

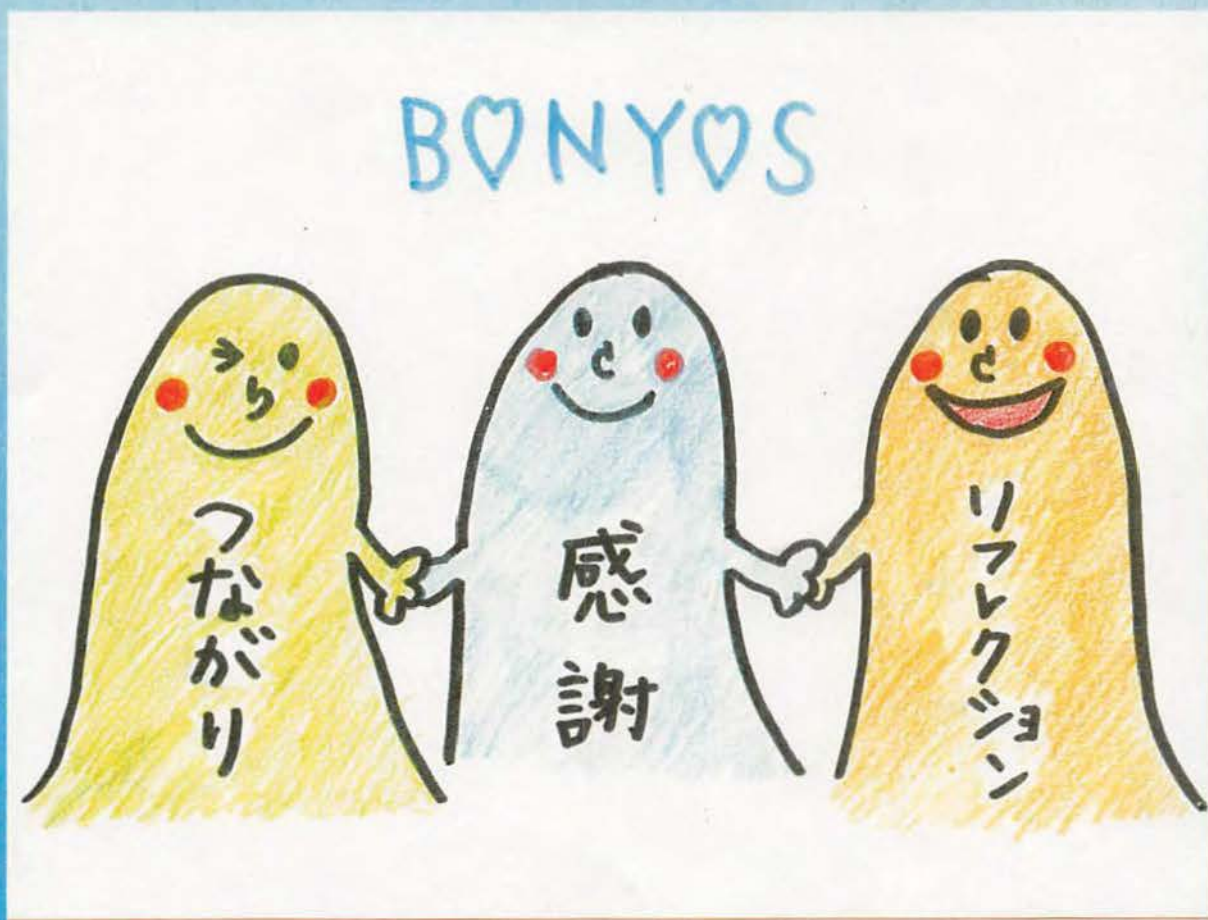
学部長裁量経費 平成 20 年度 教員養成学部フレンドシップ事業 報告書  
学部長裁量経費 第 9 回全国フレンドシップ活動 in 信州 報告書  
授業科目名「社会体験実習」「社会教育演習」

ワールド  
「信大YOU遊世間」の教師教育学研究 第 15 集

—「教職実践演習」への志向 ①—

15th Annual Report on Shinshu University Project "You-you World" in practice (2008)  
Pedagogical Research for Teachers

—Trial Cases of the Practical Teacher-Training Program ①—



2009 年 (平成 21 年) 3 月  
信州大学教育学部

## はじめに

信州大学教育学部長 岩永恭雄

平成 20 年度フレンドシップ事業の一環として実施された信大「YOU 遊世間 (ワールド)」が1年間の活動を終えるにあたり、その報告書『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究』(第 15 集)を刊行する運びになりました。

今年度第 15 期目を迎える本フレンドシップ事業で実施された主要なイベントには、第 7 回 YOU 遊フェスティバル (平成 20 年 11 月 29 日～30 日に教育学部で開催)、第 9 回 全国フレンドシップ活動 in 信州 (平成 21 年 3 月 4 日～9 日に青木村文化会館で開催)、そして信大茂菅ふるさと農場があります。YOU 遊フェスティバルでは、8 大学から参加学生があり、2 日間で過去最高となる 540 名の参加者がありました。また全国フレンドシップ活動 in 信州では、10 大学からの参加学生があつて、長野市立大岡小学校校長による講演が含まれています。さらに信大茂菅ふるさと農場では、JA ながのと地域住民の方達の御協力を得て、総勢 55 名の参加者が農業を実地体験しました。このフレンドシップ事業を実施するための連携協力機関も、長野県教育委員会・長野市教育委員会・須坂市教育委員会・青木村教育委員会・麻績村教育委員会・長野市大岡支所・長野市農業公社・JA ながの・JA グリーン長野・長野市茂菅地区農家・長野市立湯谷小学校保護者・長野県長野養護学校保護者と多岐に渉り、多くの協力者の支援を受けております。

「信大 YOU 遊世間」の前身である YOU 遊サタデーは 15 年程前に本学部土井進教員によって、教育学部学生が子供達と触れあう場を提供する目的で開始されました。信州大学が発行している広報誌「信大 NOW」54 号では、10 月 18 日に行われた信大茂菅ふるさと農場での活動報告とともに、『YOU 遊世間と脳のカンケイ』と題する本学部寺沢宏次教員との対談が掲載されています。

大学卒業後は学校教員になることを目指して勉学に励んでいる教育学部学生にとって、こうした地域の大人や子供達との共同作業を通じた交流経験が、学校現場で教員として活動する際の宝物になることは言うまでもありません。本事業の趣旨に賛同されて、上記の各プラザで御協力いただいた地域住民の方々には、厚く感謝いたします。

学校教員が持つべき資質は実践的指導力と学問的素養で、どちらかに偏ってはいけません。双方がバランス良く備わっていることが教員の必須条件でありましょう。後者を養う場は大学ですが、前者は学校で児童・生徒と接していく過程で、また地域住民との交流を重ねていく過程で養われます。このフレンドシップ事業に参加することによって得られたものには、ボランティアの精神、共同作業の進め方、環境問題に対する知識等多くのものがあつたと思います。どれもが学校現場での活動に役立つもので、フレンドシップ事業での経験が十分生かされることを期待するものです。

本フレンドシップ事業の継続には、今後参加する学生諸君による新しいアイデアが提案されることも重要で、学問的知識・素養に基づいた活動計画を立てて実行してほしいと思います。それこそが信州大学教育学部が掲げる『臨床の知』の精神を実現することになります。今後の実りある活動を期待いたします。

## も く じ

はじめに	岩永恭雄 信州大学教育学部長……………	1
もくじ／凡例		
第15期「信大YOU遊世間」	原 耕平 第15期「信大YOU遊世間」運営委員長……………	4
「信大YOU遊世間」の魂は、自発・能動の「一人立つ精神」		
	土井 進 信州大学教育学部教授……………	5
子どもから学ぶ教師であってほしい	三崎 隆 信州大学教育学部准教授……………	11
YOU遊世間における学生の学び	村松浩幸 信州大学教育学部准教授……………	12
「YOU遊」で生きた学びを	安達仁美 信州大学教育学部助教……………	13
<b>1. 信大茂菅ふるさと農場（9年目）</b>		<b>14</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
9代目の軌跡～何にも勝る大地のパワー～	宮川はるな・中川 茜・原 卓也……………	17
◇地域協力者からの評価	林部信造 農業……………	22
* 「信大茂菅農業義塾」の開設（⇒99ページ）		
<b>2. XY サタデースクール（7年目）</b>		<b>24</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
子どもとの関わりの中	小林良太郎・吉田ちひろ……………	25
◇地域協力者からの評価		
唐木忠重 NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク常務理事・事務局長……………		28
<b>3. 湯谷子どもランド（7年目）</b>		<b>30</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
子ども・学生・保護者で築き上げる湯谷子どもランド	笠井悠太・高池亮輔・梅澤美夏……………	32
◇地域の保護者からの評価	中谷隆秀 湯谷小学校子どもランド 保護者代表……………	37
<b>4. 青木村えがおクラブ（4年目）</b>		<b>39</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
「村が子どもを育てる」という社会教育への参画	小西 舞・原 耕平……………	41
◇青木村教育委員会からの評価	上原博信 青木村教育委員会事務局……………	44
<b>5. 麻績村 dE 遊ぼう！（4年目）</b>		<b>46</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
支えられている活動	伊藤香澄・吉池潤奈……………	47
◇連携団体からの評価	橋渡久美子 麻績小学校司書……………	52
	石田恵子 麻績村 G-kid's わくわくクラブ代表……………	53
<b>6. わらの会（3年目）</b>		<b>54</b>
◇実践から得た「臨床の知」		
コミュニケーション・連携・環境・音楽	宮下奈保子……………	54
◇連携団体からの評価		
島田友美子・西沢 泉 長野音楽療法研究会セラピスト・ピアニスト……………		60
<b>7. 信州すざか農業小学校豊丘校（3年目）</b>		<b>61</b>
◇実践から得た「臨床の知」		

農業と異年齢交流の場	一條まな・菊地ゆかり・宮川志織……………62
◇地域の協力者の方の言葉	羽生田郁雄 信州すぎか農業小学校豊丘校校長……………68
	友田一江 須坂市教育委員会子ども課……………68
	北原昌司 長野県須坂園芸高等学校教諭……………69
	北村珠巳 長野県須坂園芸高等学校3年……………70
8. 大岡わらわらクラブ(1年目)……………	72
◇実践から得た「臨床の知」	
0を1にする作業を大岡で	原 耕平・宮尾 亘……………72
9. 第7回 YOU 遊フェスティバル(講座内容)……………	73
1. オカシ de 家づくり	2. 劇的♡Before After ～これが噂の改造計画～
3. 巨大迷路に挑戦	4. うどん名人になろう!!
5. あそび屋 わにわに	6. 楽しい!かしこくなる!ゲーム
7. ビー玉コースター!!+理科実験!	8. つくろう ぼくらのひみつきち
9. どっこい☆ソーラン ～楽しくおどろうソーラン節～	10. トレジャーハンター
11. わくわく漢字ワールド	12. 不思議がいっぱい
13. みんなあつまれ!わんぱく大運動会	14. 世界記録に挑戦!牛乳パック紙ヒコーキ
◇実践から得た「臨床の知」	
人と人との関わりの大切さ	高池亮輔……………94
10. 「信大茂菅農業義塾」の開設	飯村昌史……………99
「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介……………	103
編集委員会規程……………	104
第16期だよ!!「信大 YOU 遊世間」全員集合～♪	東野千尋……………105
おわりに/編集後記……………	106

第9回全国フレンドシップ活動 in 信州 …… 107

参加大学：上越教育大学・横浜国立大学・文教大学・福井大学・岐阜聖徳大学・  
奈良教育大学・広島大学・鳴門教育大学・熊本大学・信州大学(主催校)

凡 例

執筆者が信大生の場合、適宜、専攻名と学年を略記した。以下に「例」と「略称」を示す。  
例：「実3」=教育実践科学専攻3年、「言2」=言語教育専攻2年、「心2」=心理臨床専攻2年  
専攻名とその略称

実：教育実践科学専攻	言：言語教育専攻	社：社会科学教育専攻	理：理数科学教育専攻
芸：芸術教育専攻	保：保健体育専攻	生：生活科学教育専攻	障：障害児教育専攻
地：地域スポーツ専攻	野：野外教育専攻	心：心理臨床専攻	院：大学院生

なお、他大学等の参加者については、下記略称を用いた場合もある。  
上：上越教育大学、横：横浜国立大学、茨：茨城大学、文：文教大学、岐聖：岐阜聖徳大学、  
長：長野大学、県短：長野県短期大学、清短：清泉女学院短期大学

# 第15期「信大YOU遊世間」

第15期「信大YOU遊世間」運営委員長  
原 耕平 (理数科学教育専攻3年)

## 1. 第15期のはじまり

プラザを立ち上げるにあたって第15期のメンバーはたくさん悩んできました。

自分が本当にプラザ長として一年間続けることが出来るのだろうか。という声や、自分の時間を削ることに抵抗を覚える人もいました。しかし、第15期のリーダー一人ひとりが自分の中でつらくなってでも「YOU遊世間」を行いたいという強い決意を表明しました。

そして、そしてその強い決意の下、平成20年4月5日に信州大学にて発足式が行われ、第15期「信大YOU遊世間」が始まりました。

## 2. 今期のテーマ

第15期がテーマとして掲げたのは「感謝」「つながり」「リフレクション」の三つです。

まず、一つ目の「感謝」について。これまでに活動を行ってきた背景には、いつも地域の協力者の力がありませんでした。今の「YOU遊世間」の活動が行えるのは当たり前ではなく、様々なバックアップがあってこそ成り立つものです。今年は、このことに「感謝」する心を常に持っていたいという願いからこのテーマを掲げました。

二つ目に「つながり」について。このテーマは、プラザごとが孤立して活動するのではなく、それぞれの抱える悩みや問題をみんなで共有しながら、それぞれが、「YOU遊世間」として繋がっていること。人は、今年度の新しい「YOU遊世間」を作るためには、それぞれの持つ人とのつながりから広げていきたいという願いをテーマとして掲げました。

三つ目の「リフレクション」について。今までの活動の中で、リフレクションを各プラザで行うことをしてきました。しかし、そのことを次の活動に十分に生かすことができていなかったように感じました。そのため、今期では「リフレクション」をテーマとして掲げて一つ一つの活動を充実させていきたいと思いました。

## 3. 一年間の活動を終えて

今年一年の活動を終えて思うことは、一人ひとりが「やらなきゃいけないんだ」「YOU遊世間」はつづけなければいけない」という使命感だけでは本当に残していきたい「YOU遊世間」は残らない。ということです。この活動は学生の「やりたい」「こんな活動をしてみたい」という強い願いや思いの上で成り立っています。これからもこの思いをもった学生がこの活動を支えていってほしいと強く願います。

一年間の活動を終えて、参加してくれた学生の中にたくさんの反省や学びがあったと思います。その一つ一つを大切にしながら、自分自身の成長につなげていってほしいと思います。

# 「信大YOU遊世間」の魂は、自発・能動の「一人立つ精神」

「信大YOU遊世間」指導教員

土井 進 (信州大学教育学部教授)

## 1. 学生の皆さんの高い志と熱い情熱に感謝

15年目の「信大YOU遊世間」もお陰様で、無事・無事故で終了することができた。これは一重に高い志と篤い情熱をもった学生の皆さんの日夜の努力の賜である。皆さんと一体となって活動を推進してくることができて、私はこの上ない喜びと充実感で一杯である。先ず以て1年間にわたって陰の苦勞に徹してきた学生の皆さんに心からの感謝を捧げたい。

第15期「信大YOU遊世間」は、目標として『つながり』『感謝』『リフレクション』を掲げた。そして次のような運営組織を編成し、平成20年4月5日に図書館2階で発足式を行った。

第15期 運営委員長、原 耕平 (理数科学教育専攻3年)

副運営委員長、宮川はるな (言語教育専攻3年)

高池 亮輔 (保健体育専攻3年)

第7回YOU遊フェスティバル実行委員長、高池亮輔 (保健体育専攻3年)

第9回全国フレンドシップ活動 in 信州実行委員長、笠井悠太 (理数科学教育専攻3年)

(◎プラザ長 ○副プラザ長)

プラザ名	連携団体・協力者	役員	専攻・学年
信大茂菅ふるさと農場 (9年目)	JAながの 長野市茂菅地区農家	◎宮川はるな ○中川 茜 ○原 卓也	言語教育専攻3年 生活科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年
XYサタデースクール (7年目)	JAながの校 JAグリーン長野校	◎小林良太郎 ○吉田ちひろ ◎中村 光希	理数科学教育専攻3年 生活科学教育専攻3年 理数科学教育専攻3年
湯谷子どもランド (7年目)	長野市立湯谷小学校保護者 長野県短期大学	◎笠井 悠太 ○高池 亮輔 ○梅澤 美夏	理数科学教育専攻3年 保健体育専攻3年 言語教育専攻3年
信州すざか農業小学校豊丘校 (3年目)	須坂市教育委員会	◎一條 まな ○菊地ゆかり ○宮川 志織	言語教育専攻3年 言語教育専攻3年 言語教育専攻3年
わらの会 (3年目)	長野県長野養護学校保護者	◎宮下奈保子	生活科学教育専攻3年
青木村えがおクラブ (4年目)	青木村教育委員会 青木村地球クラブ	◎小西 舞 ○原 耕平	教育実践科学専攻3年 理数科学教育専攻3年
麻績村dE遊ぼう! (4年目)	麻績村教育委員会 おみ図書館	◎伊藤 香澄 ○吉池 潤奈	教育実践科学専攻3年 教育実践科学専攻3年
第7回YOU遊フェスティバル	長野県教育委員会 長野市教育委員会 長野市PTA連合会 教育学部附属長野小学校ほか	◎高池 亮輔	保健体育専攻3年
大岡わらわらクラブ (1年目)	長野市大岡支所・大岡小学校 大岡農村女性ネットワーク	◎原 耕平 ○宮尾 亘	理数科学教育専攻3年 教育実践科学専攻2年

## 2. 「信大NOW」No.54の特集記事

2008年(平成20年)11月27日に信州大学広報・情報室から発行された「信大NOW」54号に、「遊ぶ!働く!話す!YOU 遊世間—YOU 遊世間と脳のカンケイ—」と題された5ページに及ぶ特集記事が掲載された。この中の学生インタビューで、YOU 遊世間の活動で得られることって一体何ですか?と問われて、学生たちは次のように応えている。

「ぼくは、K君のこと。K君は学校では問題児といわれていました。でもK君は、友だち思いでとても気遣いのできる子、ぼくは仲がよかったです。でも子どもを見る立場なのに、K君のことをとても悪く言う人がいてショックでした。ぼくは、子どもが悪さをしてしまうことがあっても、その中でその子が何を思っているのか、見てあげなければと思います。ぼくも、今までうわべだけで人を避けたようなところがあったから、この頃はいろいろと話しかけるようにしています。話すと、思ったより気の合う人がいるんです。実践しつつあるというところかな。」(原 耕平)

「(青木村の)通学合宿で、子どもに賞状を渡す場面があり、取りに来てもらって渡すのですが、一人の男の子がイスにすわったまま手を出して、そのまま渡してしまいました。先輩がその子に“せっかく、あなたに渡そうと準備してきたのに、どうしてそういう受け取り方するの”と言ってたしなめたんです。それを聞いて、自分が嫌われても、真剣に叱らなきゃいけないときがあると思いました。教育実習の時には、子どもたちの組体操の取り組みがいい加減だったことに対して、真剣に話すことができました。」(高池亮輔)

「ぼくは、無茶をするタイプで、全国フレンドシップのホスト役をやるというって、みんなの承諾を得ずに話を持ってきました。最初は、できるわけがないよって、反対されていたんですが、結局実行委員メンバーとして、協力してくれるようになって。何かでみんなとつながっているなと感じました。自分はみんなに支えられている、それが得たものだと思います。」(笠井悠太)

「昨年、第6回 YOU 遊フェスの実行委員会をやり始めた時、私は先輩に圧倒されて、上っ面な意見しか言えなかったんです。だけど、自分でやりたいと思っているのに、このままではやっている意味がないと思って、がんばって思っていることをいってみました。そしたら先輩もちゃんと応えてくれて、意見を言うのがしだいに楽しくなりました。茂菅農場でも意見の違いから対立を避けて黙っていたら、相手も何も言わない。そのまま企画を子どもに持つていくのは申し訳ないと思って言うようにしました。私にとっては、話し合えるようになったのが、この活動で得たものです。

この活動を続けてきて、何が魅力で、何が原動力でやっているのかということ“人は人を動かす”ということ。先輩たちに自分が動かされてきてここまで来たように、引っ張る人のやる気が伝わってくる。そういうふうにつながっているのって、楽しいなと思うんです。」(宮川はるな)

このような発言からも伺われるように、「信大 YOU 遊世間」という地域貢献の活動は、「やりたいと思う学生が」、「やりたいことを」、「やりたいように」、思いっきりやってみることができる場である。したがって、この活動を貫いている唯一の行動原理は、自発・能動の「一人立つ精神」である。一人の学生として、一青年として、地域社会の中に入り、青少年と高齢者を繋ぐ役割を全力で担い、大きな成果を生み出している。実に尊い地域貢献の姿ではなかるうか。

未熟な実践にもかかわらず学生たちの活動を励まし、支えて下さっている地域社会の連携団体・協力者の皆様に衷心より御礼を申し上げる次第である。本当にありがとうございます。

### 3. 「信大YOU遊サタデー」の精神を受け継ぐ「第7回YOU遊フェスティバル」

「第1回YOU遊フェスティバル」が開催されたのは、2001年（平成13年）12月8日であった。1994年（平成6年）から2000年（平成12年）まで7年間実施された「信大YOU遊サタデー」が廃止され、新しく2001年から「信大YOU遊広場（プラザ）」が開設されることになった。大学キャンパスに子どもたちを招く活動から、学生が地域社会の中のでていく活動へと脱皮をはかったのである。この変化のなかで考え出されたのが年に1回だけ、「YOUサタ」のように大学キャンパスに子どもたちを招いてにぎやかに楽しもうという企画であった。これが「YOUフェス」の発祥であった。第1回目の「YOUフェス」を発案し、実行委員長となったのが清水美香さん（当時、教育実践科学3年）であった。その後、2004年（平成16年）には諸事情により開催されないことがあったが、「YOU遊」発足の精神を脈々と伝える「YOU遊フェスティバル」が先輩から後輩へと受け継がれて7回目を迎えることができた。

今回の参加者は子どもが約360名に対して、学生スタッフが何と全国8大学から約320名も集まり、これに保護者も加えると約860名という過去最高の参加者で教育学部キャンパスは大にぎわいであった。この大成功を支えたのは、高池亮輔実行委員長が1,000名達成を悲願として必死に準備に取り組み、歩きに歩き、頼みに頼み、祈りに祈った努力の賜以外の何者でもない。2008年（平成20年）11月30日（日）図書館2階で行われた後夜祭で、壇上に立った高池実行委員長に対して、約300名の学生から惜しみない大拍手が鳴りやまず、これに応える高池実行委員長の両眼からは感涙があふれてやまなかった。

### 4. 「全国フレンドシップ活動」の発祥

1994年（平成6年）に「第1期信大YOU遊サタデー」が発足した。これが直接的契機となって文部科学省（当時、文部省）が教員養成政策として1997年（平成9年）から「教員養成フレンドシップ事業」を開始した。これは、学生が教育実習以外に直接児童生徒とふれあうことができる内容であること、県教育委員会等と連携すること、大学の授業科目化することの3点が要件とされた。これを受けて平成9年度からは全国の教員養成大学・学部においてフレンドシップ事業が展開された。

このような全国的な動向を受けて、1999年（平成11年）11月13日（土）に信州大学教育学部第1会議室において、教育学部創立50周年記念学部祭の一環として、「教員養成学部全国学生シンポジウム」を開催した。そのテーマは「生き生きとした未来へー今、学生が求めるフレンドシップ事業とはー」であった。このシンポジウムに参加し、実践報告した大学は次の13大学であった。

広島大学・愛媛大学・熊本大学・秋田大学・福島大学・大分大学・琉球大学・高知大学・愛知教育大学・鳴門教育大学・横浜国立大学・上越教育大学・信州大学

つづいて、2000年（平成12年）12月9日（土）に信州大学教育学部図書館2階で、「第2回フレンドシップ事業全国学生シンポジウム」が開催された。そのテーマは「21世紀の実践に向けてーフレンドシップ事業の課題と発展ー」であった。これに参加し実践報告を行った大学は、横浜国立大学・上越教育大学・鳴門教育大学・熊本大学・信州大学の5大学であった。このシンポジウムでは記念講演として、佐島群巳氏（帝京短期大学教授・東京学芸大学名誉教授）による「フレンドシップ事業と総合的な学習」があった。

このシンポジウムが終わった後、宿舎のしなのき会館に会場を移して、5大学の学生による



熱い討論が続いた。その会話の中からひょいと生まれ出たのが、「信州は山国で海がない」「鳴門には素晴らしい海があるよ」「いっそのこと5大学のみんなで、鳴門へ行って地引き網を引こうか」「そこに子どもたちが参加すれば、全国フレンドシップだ！」。

こうして誕生したのが、「全国フレンドシップ活動」である。ここに5大学の固い絆が生まれ、深い友情が生まれて今日にいたり、参加する大学の輪を広げてきている。これまでの全国フレンドシップ活動の開催大学は次の通りである。

- |     |              |             |
|-----|--------------|-------------|
| 第1回 | 2001年(平成13年) | 鳴門教育大学      |
| 第2回 | 2002年(平成14年) | 熊本大学        |
| 第3回 | 2003年(平成15年) | 横浜国立大学      |
| 第4回 | 2004年(平成16年) | 上越教育大学・信州大学 |
| 第5回 | 2005年(平成17年) | 広島大学        |
| 第6回 | 2006年(平成18年) | 福井大学        |
| 第7回 | 2007年(平成19年) | 横浜国立大学      |
| 第8回 | 2008年(平成20年) | 上越教育大学      |
| 第9回 | 2009年(平成21年) | 信州大学        |

## 5. 「第9回全国フレンドシップ活動 in 信州」の要綱

### (1) 目 標

「気づき」×「築き」

- ・「気づき」…他から学び、他を知り、各大学の活動につなげる。
- ・「築き」…感謝の気持ち、仲間意識をもって活動を築き上げる。

私たち学生が、フレンドシップ事業の活動を通じて学ぶことができるのは、各大学、ならびに地域の方々のご協力のおかげである。また、ともに協力し、企画をする仲間がいるからである。たくさんの協力の下にフレンドシップ活動は成り立っている。学生が成長するためには、活動を通じて気づき、学び、感じる事が重要である。フレンドシップ活動による学生の成長には、これらのどれ一つが欠けても成り立たしません。このことから「気づき」×「築き」という目標にしました。

### (2) この要綱をお送りした大学

北海道教育大学釧路校、弘前大学、宮城教育大学、福島大学、茨城大学、筑波学院大学、宇都宮大学、東京学芸大学、一橋大学、立教大学、文教大学、横浜国立大学、関東学院大学、新潟大学、上越教育大学、都留文科大学、岐阜聖徳大学、静岡大学、長野大学、清泉女学院大学、長野県短期大学、愛知教育大学、中部大学、福井大学、大阪大学、聖和大学、奈良教育大学、岡山大学、広島大学、鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学、高知大学、熊本大学、宮崎大学、琉球大学(計36大学)

### (3) 平成19年度の参加大学

茨城大学、横浜国立大学、上越教育大学、岐阜聖徳大学、福井大学、広島大学、鳴門教育大学、熊本大学、信州大学(計9大学)

### (4) 活動内容(6日間)

- 3月4日(水)…アイスブレイク、大学紹介、各大学の活動報告、前夜祭
- 3月5日(木)…講演会 小岩井彰先生

(長野市立大岡小学校長、前青木村教育委員会教育長)

信州の子どもと関わる活動の企画①、大学生交流会

3月6日(金) …信州の子どもと関わる活動の企画②、地域の方との交流会

3月7日(土) …信州の子どもと関わる活動の実施、活動の振り返り①

3月8日(日) …活動の振り返り②、分科会、全体報告会、後夜祭

3月9日(月) …フィナーレ

(5) 会 計

(収入) ・参加費 1人20,000円×100人=2,000,000円

・繰越金 60,000円

合計 2,060,000円

(支出) ・食費 1日1,850円×5日×100=925,000円

・シーツ 380×100=38,000円

・活動費(物品等) 30,000×7班=210,000円

・消耗品(おやつ、ファイル、物品等) 751,000円

・貸し切りバス 136,000円

合計 2,060,000円

## 6. 「教職実践演習」の先駆としての「信大YOU遊世間」の意義

2010年度(平成22年度)の入学生が4年次生になる2013年度(平成25年度)の後期に開設される必修科目が「教職実践演習」(2単位)である。現在、教職に関する科目(小学校・中学校・高等学校・幼稚園)の第5欄には「総合演習」、第6欄には「教育実習」が位置づけられている。これが変更され第5欄に「教育実習」が移り、第6欄に新しく「教職実践演習」が位置づけられることになっている。そして、「総合演習」は必修科目から外されることとなった。

文部科学省からの指示によると、「教職実践演習」の教育内容として盛り込まなければならない事項として、次の4項目が掲げられている。

- ① 使命感や責任感・教育的愛情等に関する事項
- ② 社会性や対人関係能力に関する事項
- ③ 幼児児童生徒理解に関する事項
- ④ 教科等の指導力に関する事項

ここに掲げられた4つの事項をよくよく検討してみると、「信大YOU遊世間」の活動を通して学生が修練している資質能力は、正に①②③の事項であるといっても過言ではあるまい。ただ④に関してはとても十分とは言えないことを自覚しておかなければならない。この点について筆者は「教材学研究」第16巻 pp.211-214(2005年、日本教材学会)に掲載した論文「信大YOU遊サタデー」を通して学生が修得した実践的指導力の基礎的特質」において、次のように論じた。

「教育者としての使命感や教育的愛情、子ども理解などの資質能力こそは学生時代にしっかりと身につけなければならない基礎であるといえよう。「信大YOU遊サタデー」においてこのような重要な資質能力を涵養することができた最大の要因は、大学教員が学生の自主的、主体的な取り組みを尊重し、学生と共に師弟同行・師弟共育の精神で実践したところにあると受

け止めている。

高久清吉が広義の実践的指導力は「主体的、自主的な理解や判断に基づいた実践から生まれる指導力」（高久清吉『教育実践学—教師の力量形成の道—』p. 3、1990年、教育出版）であると指摘しているように、教育者としての使命感や教育的愛情というものは、学生が自ら責任を担って、主体的に取り組む実践の中から自ずと醸成されていくものと考えられる。“信大YOU遊サタデー”は、教師に求められる自選的指導力の根幹の陶冶に深く関わり、貢献しているところにその特質があると考えられる。

（教育科学講座）

# 子どもから学ぶ教師であってほしい

三崎 隆 (信州大学教育学部准教授)

授業を構成する要素として、子ども、教師、教材の3つがあると言われます。これらの3つが相互に影響し合いながら、授業が形成されていくことになります。これらのうち、子どもの要素については、子どもが授業に持ち込む既有経験、興味・関心、学習意欲、学習能力などによって授業の構成が大きく異なってきます。しかも、これらはどのような集団に所属しているのかによって異なりますし、一人一人の子どもによっても異なります。また、学習する内容によっても異なります。授業を展開するに当たっては、このような子どもの持ち込むことの状態を十分に把握しておくことが大切になってきます。ところが、実際の学校現場に行ってみると分かりますが、子どもたち一人一人が授業に持ち込んでくる要素を十分に把握することは大変難しいことです。一人の子どもの要素を把握することでさえ難しいのに、1学級40人の子どもたちのすべてを把握しようとするのは容易ではありません。

一方、一般に子ども、教師、教材の3つの授業構成要素のうち、まず力量が高まっていくのは教材であると言われています。その次が教師、そして子どもです。ここで言う教師は、教師が授業に持ち込む教材観、指導観、指導力などです。つまり、授業を構想し、実践しようとした場合に子どもの実態を把握できるような力量がついてくるのは、教壇に立ってから何年も経ってからということになる傾向があることが実証されています。したがって、子どもの実態を把握して、それに基づいて指導しようとするのは尚更容易ではないということです。

学校現場で、休み時間に子どもたちとふれあいなさいとよく言われるのは、子どもたちの授業に持ち込む要素としての既有経験や興味・関心、学習意欲などの実態を少しでも把握することができる機会をたくさんもった方が良いという先達のアドバイスなのです。子どもたちと触れあう機会を多く持つことによって、授業だけでは知り得ない素直な側面を把握することが可能となる場合があります。日常生活との深いつながりを持った子どもの素材観を把握することができます。

YOU 遊の活動は、活動を通して知らず知らずのうちに子どもの実態を把握する力量を高めてくれるところに大きな良さがあると考えられます。子どもたちの持つ教材につながる経験や知識、技能、興味・関心などを把握する貴重な機会であるにとらえることができるのです。ぜひ、YOU 遊の活動を通して、子どもたちから多くのことを学ぶ教師であってほしいと願って止みません。

(理数科学教育講座)

# YOU 遊世間における学生の学び

村松浩幸（信州大学教育学部准教授）

本学教育学部に転任してきて、初めて YOU 遊の実施の様子を参観させていただいた。話には聞いていたが、閉会式の体育館に入ると、フロア一杯の小学生の子ども達や学生らの熱気あふれる姿に驚かされた。こうした学生らの自主的な教育活動が継続されて実践されていることは素晴らしいことである。そして本年度は、研究室の2・3年生も参加させてもらった。彼らも中学校の出前授業や環境ワークショップなどは経験しているが、YOU 遊は初めての経験であった。そこで YOU 遊での彼らの取り組みの様子と学びを紹介してみたい。

YOU 遊の準備・運営を含め、学生らに全て任せることにしたところ、2年生が積極的に手を挙げてくれ、進めてくれることとなった。大変意欲的である。学生らによる検討の結果、牛乳パックでの紙飛行機の製作講座を開くことになった。苦勞していたのが教材研究であった。紙飛行機は一見簡単そうに見えるが、羽の形状や重心位置の工夫など、それだけで競技会になるくらい奥が深い。学生らは資料を探し、試作するが、思いの外飛ばずに苦勞していた。ゼミ室は苦勞の跡であるたくさんの試作の紙飛行機が並んでいた。手間はかかり大変だが、技術教育としては、もの作りの難しさと面白さを実感するいい機会でもある。

一方、参加者が低学年にも広がったことで、低学年にも対応できるように、指導の流れや方法もあれこれと検討していた。初めての参加で準備がスムーズに進まないことも多かったようだが、他大学からの学生も参加したことで活性化し、前日はほぼ夜を徹して皆で準備をしたという。準備の甲斐あって、講座は大盛況。肝心の紙飛行機も良く飛び、子ども達の笑顔があふれていた。参加した子ども達の笑顔は、学生らにとって何よりの報酬であろう。皆、満足そうであった。私自身も、学生らのパワー、そして学生らの大学間ネットワークに改めて感心した。

本研究室の2年生まで含めた全体ゼミでは、研究や教育活動の基礎になる理論を輪講形式で学ばせている。本年度は、前期はインストラクショナルデザイン、後期はマネジメント手法を取り上げた。YOU 遊講座の議論でも、インストラクショナルデザインの観点からプログラムの検討がされたり、マネジメントの観点から準備や運営についての振り返りや改善案が議論されたりしていた。学生らにとって、今回の YOU 遊世間の参加は、ゼミで学ぶ理論知と YOU 遊での経験とをリンクさせ、実践的な理論知の一つとして自分の中で再構築する良い契機になったのではないだろうか考える。こうした実践的な理論知の獲得こそ、まさに本学が目指す「臨床の知」ではないだろうか。

YOU 遊世間における学生らの自主的活動は今後も大事にしながらも、熱意を持って取り組んでいるからこそ、活動を理論と結びつけ、実践的な理論知獲得の学びへと転化していくことを促進させたい。これが進むと、今以上に YOU 遊世間の教育的意義が高まるのではないだろうか。

YOU 遊の活動を支えてきた土井先生はじめ関係された皆様に深く感謝をすると共に、この教育活動がより充実・発展していくことを祈念したい。  
(生活科学教育講座)

# 「YOU 遊」で生きた学びを

安達仁美（信州大学教育学部助教）

本年度（平成 20 年 4 月）助教として信州大学教育学部に着任し、平成 14 年 3 月に学部を卒業して以来、約 6 年ぶりに母校へと戻ってきた。学生時代にお世話になった先生や、授業を受けた講義室、友達と夜遅くまで語り合った演習室。同じ場所で同じように過ごす学生たちの姿を眺めながら、悩みや不安を抱えつつも、将来に期待を抱きながら自由を楽しんだ当時の自分を思い出す。そして、この「信大 YOU 遊世間」もまた、当時の自分を懐かしく思い出すものの 1 つである。

3 年生の時、同じ専攻の先輩に誘われて、初めて YOU 遊の活動に参加をした。当時は、「信大 YOU 遊サタデー」という名で、現在の「YOU 遊フェスティバル」のように学生が講座を企画し、土曜日に地域の子どもたちを集めて遊ぶ活動を行っていた。私は、同じ専攻の仲間と共に「みんなで飛ばそう！おもしろ飛行機大集合！」という講座を企画することになった。ゼロから企画を作りあげていく面白さ、仲間と一緒に活動する楽しさ、協力的ではないメンバーへの腹立たしさ、キャプテンとしてうまくまとめられない自分へのくやしきなど、他人に対しても、自分に対しても真剣に向き合った数ヶ月間であったように思う。後夜祭では、達成感と安堵感で泣きながらスピーチをしたのを懐かしく思い出す。

久しぶりに信大に帰ってきて「信大 YOU 遊サタデー」が「信大 YOU 遊世間」として活動の輪が拡大していることを知った。そして、11 月に行われた「第 7 回 YOU 遊フェスティバル」では、前夜祭から参加させてもらい、YOU 遊での活動の様子を、自信をもった表情で生き生きと語る姿や、活動を終えた後の充実感があふれる姿に、以前と変わらず YOU 遊が生きた学びの場となっていることを再確認した。

近年、いじめ、不登校、引きこもり、ニート、少年犯罪の深刻化など青少年を巡る様々な問題が発生している。中央教育審議会は、平成 19 年 1 月 30 日に「次代を担う自立した青少年の育成に向けて—青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について—（答申）」を公表し、青少年の健全な育成には、「自己や社会の様々な物事に興味・関心を抱き、知識・技能の獲得や課題の克服、目標の達成等へ向かって意欲を持つことが、成長のための行動の原動力となる」<sup>(1)</sup>と述べ、自己や社会に対して興味・関心を持ち、意欲的に関わることが重要であると示している。また、青少年の対人関係の希薄さも指摘しており、仲間とのコミュニケーション体験、特に異年齢集団の中で他者と関わることで、青少年が自己を相対化し客観的に捉え直す力の育成につながり、自分の存在意義を実感すると同時に、集団活動への意欲を更に高めることも明らかであるとしている<sup>(2)</sup>。

多様な仲間たちと共に、目標に向かって主体的に取り組む「信大 YOU 遊世間」の活動は、まさに次代を担う自立した青年の育成の場となっているのではないだろうか。YOU 遊での生きた学びが、学生たちの今後のキャリア形成に生かされていくことを、とても期待している。

（教育科学講座）

<sup>(1)</sup> 中央教育審議会、「はじめに」『次代を担う自立した青少年の育成に向けて—青少年の意欲を高め、心と体の相伴った成長を促す方策について—（答申）』、文部科学省、2007 年 1 月 30 日。

<sup>(2)</sup> 中央教育審議会、「第 2 章 青少年の意欲をめぐる現状と課題」、同上書。

# 信大茂菅ふるさと農場（9年目）

農場長 宮川はるな（言語教育専攻3年）  
副農場長 中川 茜（生活科学教育専攻3年）  
原 卓也（理数科学教育専攻3年）

## ○学生スタッフ名

宮川はるな（言3）	中川 茜（生3）	原 卓也（理3）	五味 紗織（実4）
藤岡 泰裕（実4）	洞出 直美（実4）	落合 静香（社4）	土田 恵久（社4）
野口 洋憲（社4）	石山 裕貴（理4）	上田 雄介（理4）	肥留間淳也（理4）
細田 有希（生4）	市原 美里（地4）	北野 剛史（地4）	梅澤 美夏（言3）
市原 哲也（社3）	岡田 克志（社3）	小松 智恵（社3）	笠井 悠太（理3）
坂本 英幸（理3）	重田 直幸（理3）	中出 智章（理3）	中村 光希（理3）
高池 亮輔（保3）	古野 友理（障3）	小口 七海（地3）	須郷 遥（地3）
土崎 朋美（地3）	飯島 理沙（理2）	鈴木 祐香（理2）	藤田 裕介（社2）
室岡 聡也（生2）	阿部 由季（芸2）	島崎 涼子（芸2）	中村 恵理（芸2）
東野 千尋（芸2）	岩本 美美（障2）	永塚 達也（OB）	平林 照世（OG）

## ○参加者数

子ども 35名（22家族） 地域協力者 5名 学生 38名 卒業生 2名

## ○連携団体

地域協力者：林部信造・幸子ご夫妻

JAながの：北沢政美 塚田清正 和田新

## ○プラザの概要

### 1. 「信大茂菅ふるさと農場」とは

教育学部キャンパスから鬼無里方面へ自転車で約15分、山々に囲まれ、近くに裾花川の流れるところに「信大茂菅ふるさと農場」はある。ここはもともと休耕田であった土地だが、平成12年に人力によって開墾され、9年目の現在では12アールに及ぶ畑が広がっている。学生は地主から直接に農地を借り受けることができないため、この農場はJA（農協）を介してお借りしており、そのため農場にある水田は国際協力田として位置づけられている。そこで収穫されるお米の一部はJAに納入し、アフリカのマリ共和国へ国際援助米として送られている。多くの自然に囲まれ代々受け継がれてきたこの農場も、今年で9年目を迎えた。

### 2. 今期の活動目的と内容

3月末から参加者の募集を始め、昨年度参加していた子どもたちを中心に、保育園や児童館、新聞社などにも募集要項を出した。保育園や児童館にはポスターを貼らせていただけることになり、学生スタッフで一枚一枚手づくりした。

今年度の活動目的は「五感を使って自然とふれあい、仲間とともに協力して活動に取り組むことによって、喜びや楽しさを全身で感じ、自然との出会いを共有する」と掲げた。子どもたちが自然の中を思いっきり駆け回り、農場で出会った仲間と活動をともしる場面を活動の中に盛り込むことによって、この目的の達成を目指した。活動内容としては、畑でジャガイモ・サツマイモ・コンニャクイモ・トウモロコシ・ミニカボチャ・大豆を、国際協力田でもち米とうるち米を育てた。また、稲のスズメ対策としてかかし作りをおこなったり、減多に見ること

のできない野生のザリガニを観察したりする場も設けた。

### 3. 各活動内容

農場では4月から11月にかけて、毎月1回の活動をおこなった。活動の約2週間前には各家庭に活動案内と「もすげしんぶん」と称したお便りを郵送した。参加者の出欠確認については、欠席される方のみ、電話、FAX または E メールで連絡していただいた。「もすげしんぶん」は、子どもたちに読んでもらうことを第一に考え、野菜クイズを出したり、スタッフの顔写真や活動している様子の写真を載せたりして読みやすいよう工夫した。

当日の活動は午前中に3時間程度おこなう。活動のはじめには、『声を出したい』『体を動かしたい』という願いのもと、「もすげ体操」（「1・2・モス・モス」「2・2・モス・モス」「3・2・モス・モス」「4・2・モス・モス」というかけ声に合わせて、うね作りから収穫に至るまでを「耕す→植える→お祈り→伸びてくる芽→実る→収穫→よろこびダンス」という動作にしたもの）をおこなった。このような取り組みは昨年度もおこなわれていたが、今年度は名前を引き継いだけ、動きについては学生スタッフとともにゼロから考えた。体操をした後は、作業内容を絵やクイズなどを用いて子どもたちにわかりやすいように説明した。そして作業に移り、活動の最後には思い出絵日記を書いてもらうようにした。

第1回の活動の前には、子どもと学生、地域の方の名札をフェルトで作成した。これには、活動中、参加者が互いの名前を呼び合えるようにという思いを込めており、子どもたちの名札については出欠確認もできるようにした。こうして子どもたちを受け入れる準備を万全に整え、9年目「信大茂菅ふるさと農場」は幕を開けた。今年度初めての活動であるジャガイモ植えては、農場でしか体験できないことをさせてあげたいという思いのもと、幼い子どもたちにも包丁やくわといった道具を持たせてみんなで活動した。活動の最後には、子どもたちに折り紙一枚で思い思いの作品を作ってもらい、それを一枚の紙にまとめてジャガイモの看板とした。第2回の活動からは子どもたちの班を色（赤、黄、緑、水、白）で分けるようにし、班付き学生スタッフには子どもと同じ色のバンダナを渡し、着用してもらうようにした。また、今年度の「もすげ体操」はこのときからスタートした。当日は植える作物が多かったため、畝づくりは学生とJAの方で事前にしておいた。各作物の看板は前回同様、保護者の方に作っていただいた。続く田植えでは、苗を植える目安としてビニールテープに印をつけたものを田んぼに張りながら、学生と子どもはもちろんのこと、保護者の方もいっしょになってみんなで苗を一つ一つ手作業で植えていった。田植え後の水田管理として、田んぼの水入れポンプというものがあり、これは近隣の地域の方と連携しておこなう。朝6時に水入れをし、夕方6時にはポンプを止めに行かなければならず、学生スタッフの中で当番を決めて計20日間おこなった。そして稲がすくすく成長し、田んぼが見わたす限り緑色になった頃、スズメ対策としてかかし作りをおこなった。子どもたちに持ってきてもらった要らなくなった服や帽子などを使って、計4体のユニークなかかしが出来上がった。ザリガニの企画については、観察をおこなってから田に放流をし、あらかじめ区切っておいた枠の中で釣りを楽しんだ。しかし、ザリガニ釣りはなかなか難しく、結局は学生スタッフで捕まえることになってしまった。ちなみに今回のザリガニはすべて野生のもので、学生スタッフと地域の方のご協力のおかげで約50匹を放流することができた。夏本番を迎えたころ、農場では自然の恵みをいっぱいを受けたジャガイモとトウモロコシの収穫をおこなった。土を掘ると子どもたちの掌よりも大きなジャガイモが次々に出てきて、参加者からは歓声があがった。子どもたちの目は終始キラキラしており、まるで宝探し



をしているかのような様子だった。一方、トウモロコシは子どもたちの背よりもはるかに大きくなっており、茎ごと引き抜いて自慢げに持ち歩く子どもの姿も見られた。この日は下の畑で PTA 連合の活動がおこなわれており、活動後には農場で取れたジャガイモとトウモロコシをゆでて、茂菅の自然に囲まれた中、みんなで大地の恵みを味わった。そして、稲刈りでは子どもたちが一人1本かまを持ち、稲を刈るところからはぜかけまで一通りの活動をおこなった。子どもたちは、こちらが指示を出さなくても積極的に活動に取り組んでおり、夏休み前よりも一段とたくましく感じられた。活動後には今年度初めて全体写真を撮ることができた。農場での最後の活動は、脱穀とサツマイモ掘り。土の中からは曲がりくねったサツマイモがどんどん出てきて、それには参加者全員が夢中になり、収穫したイモを両手いっぱい抱えて嬉しそうにしている保護者の姿も見られた。脱穀では JA や地域の方の協力を得て、今では珍しい「千歯こき」や「とうみ」などを貸していただいた。今年度はもみ袋に約8袋分の収穫があったが、そのうち3袋は JA の方に国際援助米としてお渡しした。活動後には、農場でとれたサツマイモと地域の方からいただいたリンゴを食べ、仕事の疲れを取った。収穫祭では、農場で育てた作物を使ってみんなで料理をし、これまでの活動を思い起こした。この日は、これまで1回しか活動に参加していなかった子も集まり、会場であった家庭科室はにぎわいを見せた。メニューは豆腐、スイートポテト、白ご飯おにぎり、肉団子のもち米蒸し、具沢山みそ汁、ポテトサラダの6品で、すべて子どもたちと一っしょに作った。どの料理もとてもおいしくでき、農場で取れた作物を堪能することができた。食事後はみんなで DVD を見て一年間の活動をふりかえり、その後、子どもたちへのプレゼントとして、フェルトで作った名札と賞状、思い出絵日記をつづったものを手渡した。解散前には校舎の外に出てみんなで「もすげ体操」をし、9年目「信大茂菅ふるさと農場」の活動は幕を閉じた。今年度は保護者の方にも積極的に活動に参加していただきたいという思いで活動してきたが、活動中はなかなか保護者の方と話す時間がなく生の声を聞くことができなかつたため、新たな試みとして懇親会をおこなうことを決めた。当日はお子さんにも来ていただき、学生スタッフは保護者の方と話すグループと子どもと一っしょに遊ぶグループに分かれた。一週間前という急な通知にもかかわらず6家庭の方々に参加していただき、午前中の2時間という限られた中で有意義な意見交換をおこなうことができた。

#### 4. 今期の参加者状況

今年度は初めて参加するというご家庭が多く、半数以上が今年新たに参加して下さった。参加対象は幼～高としていたが、参加者の弟や妹、保護者の方も一っしょに活動するようになり、幅広い年齢の交流が見られた。保護者の方においては、第1回では活動に参加するのをためらっている方も多く見受けられたが、回を重ねるごとに子どもと一っしょになって大地とふれあう姿が多く見られるようになった。学生スタッフは、初めのうちは昨年参加していた学生が多かったものの、次第に参加スタッフの輪は広がっていった。事前準備から積極的にかかわってくれる学生も多く、毎回の活動がスタッフに支えられて成り立っていた。参加の有無はもちろん強制ではないのだが、多くの学生スタッフが農場に来る子どもたちに会えることを楽しみに何度も参加してくれた。地域の方、JA の方は畑おこしや畝づくりなどの準備のときも、平日にもかかわらず当たり前のように参加して下さった。時には活動に必要な道具も貸していただき、本当に多くのことに気を配っていただいた。

## 5. 一年間の活動

活動日	活動内容	学生	子ども
4月12日(土)	※畑おこし	7名	—
4月19日(土)	じゃが②じゃがっち! おおきくなあ〜れ♪♪	15名	20名
5月2日(金)	※畝づくり	7名	—
5月7日(水)	※マルチはり、田おこし	4名	—
5月8日(木)	※マルチはり	2名	—
5月10日(土)	コンニャくん、イモ子もモロ子もすくすくそだ〜て♪	14名	28名
5月26日(月)	※田おこし、草刈り	3名	—
6月5日(木)	※代掻き	4名	—
6月7日(土)	だいずくんとおこめちゃん、 みんなでわい②たのしくうえよう♪	18名	21名
6月14~23日 7月13~23日	※田んぼの水入れポンプ	18名	—
7月19日(土)	わくわく♪かかしづくり ドキドキ☆ザリガニつり	12名	24名
8月2日(土)	じゃがいも・とうもろこし収穫	10名	20名
8月3日(日)	※田んぼの網掛け	10名	—
9月27日(土)	※田んぼの網はずし	5名	—
9月28日(日)	さくさくいねかり、どっこらしょ♪♪	11名	15名
10月18日(土)	おこめだ☆おいもだ♪あきがきた!!	12名	18名
11月15日(土)	収穫祭	17名	25名
12月13日(土)	「9年目 信大茂菅ふるさと農場」懇親会	8名	7名
1月13日(火)	※茂菅米のマリ共和国への発送式	2名	—

※は、農家の方、学生スタッフのみで行った活動。

## ◇実践から得た「臨床の知」

## 9代目の軌跡 ～何にも勝る大地のパワー～

宮川はるな (言語教育専攻3年)

## 1. はじめに

9年前というと、シドニーオリンピックの開催された2000年。「信大茂菅ふるさと農場」の歴史はそれほど古くにさかのぼる。「YOU 遊世間」の中でも、現在まで続いているプラザとしては最長期間を誇っている。学生の自主性に任されているこの活動が、9年という時を刻んだ背景には一体何があるのだろうか。たくさんの方の思いと歴史を背負いスタートした農場の一年を振り返る中で考えていきたいと思う。

## 2. “9代目”

今期どのような活動をするかについては、昨年2月から考え始めた。農場長と副農場長の計3名は、8年目の活動にほとんど参加していない、もしくはまったく参加していなかったた

め、最初どこから手をつけていいのかまったくわからなかった。しかし、そのお陰で“9代目”というカラーを存分に出すことができた。ときに先輩や地域の方、JAの方に相談して、毎回、限られた活動時間をどのように充実させていくかについて試行錯誤した。

実際の様子が変わらないながらも、当日の様子をイメージしながら集合時間や内容などを具体的に決めていったのだが、やはり、いざ当日を迎えるとさまざまな問題や課題が浮きぼりになった。下の畑と上の畑とを移動するときの誘導の難しさ。トイレ休憩のタイミングや移動の仕方について。子どもたちの班編成は学年や年齢をばらばらにするか、同じくらいの子同士で組むか。中でももっとも頭を悩ませたのが、夏場の暑さ対策である。今年の夏も例年のように暑く、農場で3時間も活動し続けることを考えると日陰をつくらなければならないと思った。しかし、学校のテントを簡単には貸していただけなかったことと、「せっかくの外での活動だから、自然の暑さを経験することも必要」という考えによって、結局テントを立てることはなかった。その考えがどれほど安易であったかということは、活動中に熱中症のような症状になった子どもが出てしまったことによって思い知らされた。その子の保護者の方からは、「これからは私も活動と一緒に参加させてもらい子供たちを見守りたいとおもいます」（保護者からのメールより引用）というメールをいただいたが、こちらの勝手な判断で多大な心配とご迷惑をおかけしたことを深く反省した。これ以降、子どもたちの体調や体力のことも考慮に入れながら当日の計画を立てていった。

活動の流れについては、「作業が終わった後に何をすればいいのかあいまいな時が何度かあった」（市原哲也）という声が聞かれたように、学生間での情報共有があまりできていないまま当日に臨んでしまったというのが反省すべき点である。また、保護者の方からは「スタッフの方に草とりや水など大変なお世話をしてもらっているおかげで、子供達も楽しく過ごせることができ、感謝しています」（保護者へのアンケートより引用）という声が聞かれた一方で、「月1回の活動だと、どうしても活動内容が限られてしまい、子ども達はおいしい所だけ体験させていただいているような気がします」（保護者へのアンケートより引用）という声も聞かれた。このような理由から活動回数を増やしてほしいという要望もあったため、この点には改善の余地があるように思う。使用する道具については、子どもたちに怪我をさせたくないという思いがあったために検討することが多々あったが、保護者の方からは、子どもたちには幼いうちから危険な体験をさせることも大切であるという声も聞かれた。

また、私たちは活動のメインを子どもたちであると考え、子どもたちが楽しむには、子どもたちにとってわかりやすい説明とは、ということ念頭において内容を組み立てていった。しかし、実際に活動をしていくうちに「何か違う」という思いが募り始めた。準備をしているときは、子どもたちにもっと野菜のことを知ってもらいたいという思いでクイズなどを考えていたのだが、農場に来ている子どもたちは実体験を通して自然の中から学んでいるということを感じ始めたのである。そのため、今期のはじめのうちは学生スタッフに手伝ってもらって夜遅くまで準備をするということがあったが、事前準備は次第に少なくなっていく。どこまで伝えるべきで、どこまで準備をすべきであるかということは悩みながらの決断だった。このことについては、やはり「流れはよかったけど、ひとつひとつのプロセスはもう少し手を入れられるところがあったかも」（中村光希）、「機械の説明（絵など視覚的なもの）があれば」（洞出直美）、「活動がスムーズに進んでいくというか淡々と進んでいく印象がありました」（上田雄介）という声が聞かれた。しかし、こちらが情報を提供するのではなく、子どもたちの学びに

任せるというこのスタイルをしばらく続けていくうちに、学生から「最初はクイズとかやって頑張ってたけど、逆にやらなかった時の方が雰囲気もよかったし、楽しかった」（東野千尋）という声が聞かれるようになっていった。子どもたちのために思えば、たしかにクイズを考えたり準備をしたりすることは活動の楽しさにつながるのだが、企画者として活動していく中で、そのように企画することが“農場”という場所にはとてもかなわないものであるということを感じ痛感するようになった。これは一年間農場に携わってきたからこそ気づいたことであり、私自身、とても大切な学びをしたように思う。

### 3. 子どもの姿に見る「信大茂菅ふるさと農場」

今期の活動に参加してくれた子どもたちのことを思い出すと、年齢に関係なく、また男女を問わず、とにかくみんなが生き物とのふれあいを楽しんでいたという印象しかない。子どもたちのその姿には、学生も「子どもたちは虫とすごく仲良しですごいな、見習わなきゃな、と思いました」（飯島理沙）と言う程である。保護者の方からも「次回もトカゲを捕まえると張り切ってます」（保護者からのメールより引用）、「体験談や、学生さんと話した内容をよく家で話してくれます。特に弟は次にどんな虫をつかまえるかワクワクしていました」（保護者へのアンケートより引用）という声が聞かれた。活動に参加している学生スタッフにしてみれば、活動に参加させたいわ、子どもの好きにさせてあげたいわで戸惑ったこともあったようだが、個人的には、農場にあふれる自然と思いいいにたわむれている子どもの姿を嬉しく思っていた。私は、このような自由さこそ農場で活動することの魅力と感じており、このことについては学生からも「子どもが活動に集中できなくて他のことに気をとられても、その子がやりたいことをやってもらうという姿勢はいいなあと思いました」（島崎涼子）、「様々な子どもがいて、まるで教室のようでした」（藤田裕介）という声が聞かれた。

子どもたちとのかかわり方については、学生一人ひとりが悩み、考え、学んでいたようである。私自身においては、人の話をきちんと聞くというような集団行動に大切なことをなかなか子どもたちに伝えることができないことに悩んだ。学生スタッフの感想からは、農場が子どもたちとのコミュニケーションのとり方を学ぶ場であったことがうかがえる。「子どもとあんまり話せなかった。話が続かない。どうしたらいいかわからない」（中村恵理）、「もっと観察の時間をとったり、他にも気づいたところを子どもの声から取り上げたり、他にも発問すればよかった」（小松智恵）、「もうちょっとうまくかかしを紹介したり、発表している班にみんなの注目を向けられたら良かった」（鈴木祐香）、「すぐに理解して作業を始める子と、実際に一緒に手取り足取りで教えてあげないと種植えができない子がいて、作業の教え方に苦労しました」（重田直幸）、「田植えも最初はやっていた子どもがだんだんやらなくなってきた」（中出智章）、「最初は親から全くはなれなかった子が最後には楽しそうにしていたのでよかった」（室岡聡也）、「少しずつ距離を縮め、手をつなげてよかった」（梅澤美夏）、「子どもたちの名前を呼んだりしながらコミュニケーションをとれると気持ちが良い」（野口洋憲）、「子どもは疲れたなど言わないで楽しんでいたと思う」（岡田克志）。参加スタッフからのこのような生の声は、一人ひとりが毎回の活動での子どもとのかかわりを大切にしていたことの現われのように思う。子どもたちと真剣に向き合おうと思っているからこそ悩み、どのように接したらよいか考えたのではないだろうか。活動に対していつでも真剣勝負である多くの学生スタッフの思いこそが、子どもたちの「また来るね」という声や、農場に来てくれる子どもたちの笑顔につながってい

たのだろう。また、活動している子どもの姿から学ぶこと・感じることもたくさんあったようで、「1年生の女の子がすごく頑張っていて、一人で稲を刈ることも縛ることもできていました」（落合静香）、「もっと子ども同士で話す場面があればなあと思った」（土崎朋美）、「稲刈りの時に稲を自分では持ちきれないぐらい持って頑張っていた姿が印象的でした」（北野剛史）という声が聞かれた。

子どもたちは農場での活動を通して、自然に対してとても興味を示すようになったようだ。このことについては保護者の方から多くの声が聞かれ、子どもたちは家に帰ってからも農場での出来事を話していたようである。子どもたちにとっては、活動すること、その場にいること、参加することに意義があったのだろう。すべての活動終了後、活動に参加していた子どもから一通の手紙が届いた。活動が終わってからも農場での様子を思い出してくれる子どもがいることを知り、この一年やってきたことの大きさを改めて感じた。

#### 4. 「信大茂菅ふるさと農場」を支える仲間

9年目を迎えた今年は、総勢 38 名もの学生スタッフが農場の活動に携わってくれた。農場での活動を通して、学年や専攻の壁を越えた、普通なら知り合っていないであろう人との出会いが本当にたくさんあった。それは、「あの時誘ってくれなかったら今までのたくさんの出会いはありません。本当に感謝しています」（島崎涼子）という学生の声からもわかるであろう。農場に来ればみんなが同じ立場で、いっしょに悩み、いっしょに遊び、思いを共有した。1年間という任期を終えた今、一つ一つの活動を、学生スタッフと共に作り上げてきたということ強く感じている。こちらはスタッフ集めに必死で、来てくれた学生スタッフに対しては「ありがとう」という感謝の気持ちでいっぱいなのに、「参加させてくれてありがとう」という学生スタッフの声が多く聞かれたことは、本当に幸せなことであった。

学生間の連携の良さは、子どもたちと活動するときにも現われていた。保護者の方からも「安心して子どもを任せられる」「チームワークも抜群で、皆さん、明るく子供達に接して下さり、とても感謝しています」（ともに保護者へのアンケートより引用）というお言葉をいただき、学生同士のつながりは、学生と子どもとのつながりにも反映するということを実感した。仲間と活動をとともにすることに関しては、「人数がいるとおもしろい」（古野友理）、「お互いに支えあって協力できた」（坂本英幸）という声が聞かれた。中には、スタッフ同士で助けあいながら活動したことが印象に残っている学生もいたようで、仲間とともに活動することの良さを感じているようである。そのことは、「一つのものを作り上げるのにも全員の協力が必要であって、自分は何もできなかったけど、みんながいたからできました」（北野剛史）という声に代表されるであろう。

都合がつかず子どもたちとの活動には参加できないが、学生スタッフのみの活動だけでも、と言って参加してくれた学生もいた。そのような学生スタッフの働きかけは、子どもたちとの活動の大きな支えになっていたと感じている。参加してくれた学生スタッフからすれば「予定があいてるから」という軽い気持ちであっても、その一言がどれだけ心強かったかは計り知れない。このように、陰ながらも活動に携わろうとしてくれる学生がいたからこそ、今年度の「信大茂菅ふるさと農場」があったと、強く感じる。

## 5. 信頼と協力からなる「信大茂菅ふるさと農場」

「来年もぜひ参加したい」「(子どもは) 来年度も参加したいと言っています」。これらは保護者の方から聞いた生の声である。活動が終わって間もないにもかかわらず、このような声を本当にたくさんいただき、農場での活動が子どもたちだけでなく、保護者の方の心にも大きな影響を与えたことを心から嬉しく思った。保護者の方の中には、収穫祭で作ったメニューを家でも試してみたことや、活動でつかまえたザリガニの様子をメールで報告してくださる方がいて、農場でおこなった活動が、農場以外の場所でも話題として取り上げられていることに驚いた。そして、ここに“農場”というものの偉大さを感じた。

また、土井進先生や林部さんご夫妻、JA の北沢さんを始めとして活動を支えてくださった方々には、本当に感謝の気持ちでいっぱいである。農作業に関しては初心者の方ばかりであるにもかかわらず、私たちの活動を認めていただき、いつでも温かく見守ってくださっていた。今年1年、私たちが子どもとともに活動することができたのも、また農場の活動が今年で9年目を迎えることができたのも、本当に多くの人のご理解・ご協力、そして支えがあったからだと感じる。それを「ありがとうございました」の一言で済ませてしまうことは絶対にできない。

## 6. 「信大茂菅ふるさと農場」の意義・魅力

作物を育てる喜び。幅広い年齢層のふれあい。仲間と活動を同じくする共通体験。大地に根づいた活動。子ども、学生、保護者、地域の方という一体感。“農場の意義”と考えただけで、これだけたくさんの方が思い浮かぶ。もちろん、農場の持つ意義はこれだけではないだろう。一言では表すことのできないほどの良さが農場にはあり、1年間活動してきたということには、それほどの思い入れがある。活動中の子どもたちの輝く目や、生き物を追いかける姿には、理屈では考えることのできない、まさに“自然”の姿が感じられた。クイズや寸劇というような作為的なものは、やはり農場という場所にはかなわない。またいくら子どもを楽しませようとしていても、自然の中で活動する子どもたちが求めているのはやはり自然の中にあり、それを私たちがねじ曲げてしまっただけではいけない。学生スタッフに『茂菅の魅力』は何だと思えますか、と聞いたところ、「自然と人」(島崎涼子)、「子ども、学生、保護者、地域の方が一つになれること」(北野剛史)、「場所・空間・空気」(上田雄介)、「自然の中で、子どもと思いきり触れ合える!!」(阿部由季)、「自然と笑顔がいっぱい!! ついでに美味しいものもいっぱい」(東野千尋)、「恵まれた自然、澄んだ空気、楽しいスタッフ」(藤田裕介)という声が聞かれた。このことからわかるように、やはり“農場の意義”は自然の中にこそあるのだろう。

活動当初、昨年度、中心となって企画していた学生スタッフから「“9代目らしさ”をどんどん見せてほしい」(石山裕貴)という激励のメッセージをいただき、その言葉を胸に、この1年、思う存分活動することができた。農場の魅力は活動する中からも感じられたようで、「もすげ体操」を実際におこなった学生からは、「おばあちゃんもおじいちゃんも子どももお母さんもお父さんも大学生もみんなが一つになった感じがしました」(高池亮輔)という声が聞かれた。

1年間という活動を終えた今、「もっとうれしかった」という改善点は学生スタッフからも挙がっており、農場での活動をともに作り上げようとしてくれていたのだと感じる。そして、このような農場で生まれた一体感こそが、「来年もぜひ!!」という参加者の声につながっているであろう。

## 7. 9年目を終えて

農場長をやろうと思ったきっかけは、自身の農業体験にある。木曾という地で幼い頃から多くの自然に囲まれて育ってきた私は、いつしか「自身の体験を子どもたちに伝えたい」と思うようになっていた。その思いは、昨年度の先輩たちの活動を見てさらに強くなった。学生スタッフからは生き生きとした表情がうかがえ、子どもたちはみな活動に夢中になっており、その様子を見て「これだ!」と思ったことは今でも覚えている。

9代目を創り上げるにあたっては、試行錯誤のくりかえしであった。それは、子どもたちにいろいろ知ってもらいたい、経験してもらいたいという願いからであったが、最終的には、自然の中で活動をする子どもたち自身の学びに委ねるというスタイルをとった。一見すると、企画を怠っているように思われるかもしれないが、そのような形こそが「信大茂菅ふるさと農場」のあるべき姿であると思ったし、農場の魅力がみんなに最大限伝わるような気がした。

参加者たちに笑顔をもたらし、人と人をつなぎ、自然や人とふれあうことの温かさを教えてくれたのは他にもない、「信大茂菅ふるさと農場」という場所そのものであった。そのような偉大なパワーを持つ農場に、紙に書いたクイズなどを持ち込むことは、おこがましいような気さえた。このように、何も着飾ることない、ありのままの農場の中で活動してみても学んだことは、ただ一つ。“大地に勝るものは何もない!!”

### ◇地域協力者からの評価

## 「茂菅ふるさと農場」の実体験と人間形成

農業 林部信造

第7回 YOU 遊フェスティバルが信大教育学部において、11月30日、一年間の集大成として、15の講座が一同に会し、盛大に開催されました。小学生を始め保護者の皆さん、志を共にする県内外の大学生の皆さん、地域の人達等860余名の参加を得て成功裡に終わりました。参加した人達はそれぞれ希望する講座で楽しい一日を過ごし、子ども達は自由にのびのびと活動し、歓声を上げ、皆明るい笑顔を振りまいていました。

このように多くの講座が合同で開催され、準備、運営に携わった各実行委員の皆さんは肉体的にも、精神的にも大変だったと思います。本当にご苦労さまでした。

今回のフェスティバルの成功の原点は各プラザで一年間、それぞれの分野で活躍した皆さんの努力と養われた実体験がもたらした成果だと思えます。人が組織をつくり、組織が人を動かし、和と智の行動により個ではなし得ない大きな力が発揮されることを体験され、今後もリーダーとしての活躍が期待されます。

私達も例年通りフェスティバルに参加させていただき、今回も深い感動と喜びを味わい、楽しい一日となりました。「信大茂菅ふるさと農場」も9年を迎え、新しい農場長をはじめ、スタッフの皆さんが誕生し、私達も共に一年間お手伝いをさせていただきました。

毎年感じることは、参加する子ども達、保護者、学生の皆さんは皆明るく、何事にも前向きに考え、目的を持って立ち向かう人達の集まりであると力強く感じられます。農場では農場長の挨拶で始まり、作業内容も画図面で幼児にもわかりやすく説明し、学生考案による「もすげ音頭」の準備体操から全員手をつなぎ、輪になって廻り、連帯感を深め「働く」「作る」「育て

る」を確認し作業を始める。

稲作については、耕起、あぜぬり、代かき、田植え、収穫と続きますが、田植えはすべて手植えで参加者全員が田に入り、ドロ水の感触を肌で感じ、足を取られ転がる子ども、衣服や顔がドロコになりながらも笑顔で田植えを続ける子ども達の目の輝き、また、素裸で田植えをする子どもの側でお母さんが笑えみながらいっしょに田植えを続ける姿は、親子の絆と愛情の深さを感じほほえましく、日頃、見ることの出来ない「信大茂菅ふるさと農場」ならではの光景で自然とのふれあいのすばらしさを教えてくれました。立派に田植えが出来たのも土井先生をはじめ農場長を中心としたスタッフの皆さんの気くばり、綿密なサポートがあったからと思います。

「茂菅ふるさと農場」は、ただ農作物を作るという事ではなく、伝統的に土井先生の「人づくり」のための「土づくり」を基本理念として誕生し、学生の皆さんが自主的に運営、管理、活動する実体験農場として今日までその精神が引継がれ、物の作り方、育て方等あらゆる面での学び得る農場だと思えます。農業は自然界との共生であり、計画通りに進まないのが農業であります。机上の計画では知る事の出来ない数々の課題（気象の変化）が生じ、それがため対応力、応用動作、判断力、決断による実践力等が求められます。これらは自然界から学ぶ貴重な体験です。

自から育て、収穫し、農場で皆で食する喜び、食の新鮮な味をかみしめ語り合う笑顔は美しい。収穫した米の一部は例年通り支援米としてマリ共和国に発送し、世界の人々との連帯感を深め「信大茂菅ふるさと農場」は無事その目的を果たしました。

「茂菅ふるさと農場」も 10 周年目を迎える節目に当り、更に躍進を計るため、「信大茂菅農業義塾」として新たに開設し、学生、児童、生徒、保護者、高齢者の四世代の皆さんが一同に会し、交流を深め、農に親しみ、自然の中で語り合い絆を深めたくましく生きる力をこの農場から学び一步一步前進することを願っています。

私達家族も及ばずながら皆さんとの交流を楽しみ、知識とパワーをいただきながら健康に努め、一年でも長くお手伝い出来、また、我が家のりんごづくり、米づくりに夢を託し頑張りたいと思えます。



# XY サタデースクール (7年目)

ながの校 プラザ長 小林良太郎 (理数科学教育専攻3年)

副プラザ長 吉田ちひろ (生活科学教育専攻3年)

## ○学生スタッフ名

### <ながの校>

落合 静香 (社4)	石井絵理子 (社4)	納 愛果 (社4)	小西 舞 (実3)
小林良太郎 (数3)	竹内 裕 (数3)	宮下奈保子 (生3)	吉田ちひろ (生3)
桃澤 佑子 (芸3)	高池 亮輔 (保3)	村上 侑 (生3)	小松 智恵 (社3)
原 耕平 (理3)	宮澤 美貴 (生3)	中出 智章 (数3)	鈴木 梢 (理2)
飯島 理沙 (理2)	鈴木 祐香 (数2)	黒木 李紗 (芸2)	丸山 諒 (数2)
根岸 徹 (数2)	若林 幸大 (数2)	岩崎英里子 (清短)	浅川久美子 (清短)
荒井 麻理 (清短)	伊藤 舞 (清短)		

## ○参加者数

校名	NPO	JA	信大	清泉短	その他	子ども
ながの校	6名	4名	22名	4名	4名	12名

## ○連携団体

NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク JA ながの 清泉女学院短期大学

## ○プラザの概要

XY サタデースクールとは

子どもたちが大人になるにさいして必要なことは、「確かな学力」と「豊かな経験」を積んでいくことです。この「確かな学力」が子どもの人生の座標軸の X 軸だとすれば、「豊かな経験」は Y 軸に相当するといえます。この座標軸の中で、「自ら学び考える」人間が育ちます。

「XY サタデースクール」の「XY」には、「確かな学力」と「豊かな経験」の相互関係を大切にして、子どもの成長を支えたいという願いが込められています。「豊かな経験」は、わたしたち人間になくてはならない「食」に関係していますので、JA 長野中央会と連携した農業体験を行うことから、また、「確かな学力」は退職なさった先生や現役の先生の指導、信州大学や清泉女学院短期大学の学生のみinnで作り上げた学習から、それぞれ得られます。

XY サタデースクールは今年で7年目の活動です。今年度は県内2か所(ながの校、グリーン長野校:篠ノ井)で年間21回(月2回、土曜日の午前中)開かれました。農作業と学習(国語、算数、英会話)は毎月各1回ずつ行われます。地域の小学校に通う子どもたちが参加しています。通常は各校ごとに農作業や学習が計画されます。今年度も、10月に第4回「ハイキング in 白馬・岩岳」が日帰りで行われました。参加人数も多く、大規模な企画になりました。子どもたちは友達とさらに友情を深めたり、他校の友達を作ったり、新しい経験をする良い機会になったと思います。みんなで楽しむことができ、本当に充実した一日でした。

今年度も XY サタデースクールはのびのびと活動することができました!

## ○年間活動計画

＜ながの校＞活動時間 9:00～12:00

活動日	活動内容	
4月12日	基礎学習	開校式、レク、名札作り、自己紹介、英会話
4月26日	農作業	料理体験
5月10日	農作業	ジャガイモ植え、ジャガイモクイズ、リンゴの花摘み
5月24日	基礎学習	算数、英会話、国語
6月14日	農作業	田植え 田植えを行うまでの作業について
6月28日	基礎学習	算数、英会話、国語
7月12日	農作業	畑の草刈り、看板作り、草とりの意味
7月26日	農作業	ジャガイモの収穫、試食、「いただきます」「ごちそうさま」「食べること」の意味について
8月9日	農作業	料理体験
9月13日	基礎学習	算数、英会話、国語
9月27日	農作業	稲刈り お米についてのクイズ
10月11日	基礎学習	算数、英会話、国語
10月25日	デイキャンプ in 白馬岩岳	
11月8日	農作業	リンゴの収穫、餅つき、試食
11月22日	基礎学習	算数、英会話、国語
12月13日	農作業	リース作り リース・クリスマスについてのクイズ
12月27日	基礎学習	算数、英会話、国語
1月10日	基礎学習	算数、英会話、国語
1月24日	農作業	料理体験
2月14日	農作業	いちご狩り
2月28日	基礎学習	閉校式

## ◇実践から得た「臨床の知」

## 子どもとの関わりのなかで

ながの校 小林良太郎（理数科学教育専攻3年）

4月からの活動もあっという間に過ぎていきました。活動当初、学校も学年も異なる子どもたちが集まる場であるからこそ、農作業や学習を通して、協力しあい、感動を共有し合える場であってほしいという願いを持って臨みました。そのため、農作業の班分けは、同じ学年の子たちで班が一緒にならないように、学年のバランスを考えて一つの班としました。また、国語でも学年に合わせた学習内容を用意するだけでなく、教えあい、助け合いながら取り組めるものを提供するように心がけました。これらの1年を通した取り組みから、わたしたち学生はどんなことを子どもたちから、学生同士から、また地域の方々から学んだのでしょうか。

## 1. 基礎学習について

XY サタデースクールの基礎学習は算数、英会話、国語をそれぞれ45分ずつおこなってい

ます。学生スタッフは主に低学年の算数を担当しています。今年度の国語は、国語の教材作りの専門家の手を借り、孔子の言葉や、漢字について触れ合っていました。

子どもたちの中には、教室に入らず廊下にてたままの子もいれば、席についていることができず、歩き回り、子どもたちの前にたつて説明しているスタッフの話を中断させてしまう子どもも何人かいました。子どもたちへの対応の仕方をどうするべきか参加スタッフ一人ひとりが悩んでいました。また、そんな子どもたちが興味を示し、集中力を持続させることのできる学習内容とはなんだろうか。と、学習内容を考えることにもとても苦労しました。

改善策として、難しく投げ出してしまうことがないように、学年別漢字配当表を参考に、各学年のレベルに合わせた漢字クイズの教材を用意していただきました。しかし、小学校の教室ではなく、1年生から6年生までが集まっているXYであるからこそ、学年ごとに違うことを学習するのではなく、何か一つのことを一緒に取り組みながら協力し合って学習をしていけたら。という願いをなかなか実行に移せませんでした。

また、書いた漢字を確認しているときに、自分たちが気づけなかった漢字があると、「そんな漢字もあったな。忘れてた」「あんなにわかったんだあ。すげえ」と他の子の結果に驚いていました。

基礎学習を通して、子どもたちがどのような状況にあるのか、どのような個性をもっているのかを理解したうえで、授業内容を考えていくことが大切なのだと感じました。子どもたちが集中できない、歩き回る、といったことは、授業を考えるわたしたちの力のなさに原因があるのだと思います。子どもたちは何かに熱中すれば、驚くほどの集中力とやる気を見せて、物事に取り組んでくれます。教材の準備は手を抜くことは楽で、簡単です。しかし、それでは子どもたちは何ら興味を示してくれません。授業をやる側も、子どもたちに求める集中力とやる気と同じくらいの力を込めて授業内容を考えなければならないのだと学びました。そして、こちら側で無理に他学年の子と関わりをさせようとしなくても、子どもたちは自然に教えあい助け合っていくのだと感じました。

また、子どもたちとの関わりが深まっていくなかで学生は子どもたちへの対応の仕方を自ら気づき学んでいきました。

学生は、子どもたちと関わるなかで、子どもたちの真剣な表情と興味を示したものに組み込む集中力のすごさに驚きを感じたとともに、「褒めることの大切さ」と「子どもたちの行動を見つめ、ともに取り組むなかで認めていくことの大切さ」を学びました。見ているだけではなく、実際に子どもたちとともに動くことが大切なのだとあらためて感じました。

## 2. 農作業について

今年も農作業を通して、子どもたちだけではなく、学生も親御さんもまた一緒になって汗を流し、食物を育てることの大変さを実体験することができました。学生自身、農作業体験では「初めて」を体験したことばかりではなかったのではないのでしょうか。

XYの活動は月に2回あるといっても、農作業体験は月に1回だけです。しかし、農業は月1回だけでは作物は育ちません。日々の作業があって、わたしたちの食卓にならぶ食材となるのです。ジャガイモを植えるまでも畑を耕さなくてはならない。収穫するためにも、草刈り、間引きなどの作業があります。田植えをするまでも田おこし、苗作り等、子どもたちの活動の前までに色々な作業があり、それらをやってくれている人がいるからこそ、自分たちが今日、

田植え等を体験できるのだということを伝えたいと考えました。ジャガイモを植えた後、学生だけで畑の草刈りをしたときの写真を基礎学習の際に子どもたちに見せて、草の成長の早さを知ってもらうとともに、なぜ草刈りが必要なのかを活動の際に絵などを使って説明することもしました。田植えの際も 18 年度の稲刈りの写真を提示しながら、目の前にある田んぼの変化に気づかせ、田植えをするだけで米が育つのではないということを伝えようと思いました。

しかし、子どもたちにとっては説明を聞くよりも、やはり実際に体験してみるの方が楽しく、喜びや驚きが生き生きとした表情から伝わってきました。これはもちろん学生も同じです。言葉よりも実際にやってみることで、農作業の大変さを子どもたちも学生も感じていました。夏の暑さにも負けずに額に汗をびっしょりかきながら、真剣な目で力のかぎり畑に大きく成長した草を引き抜いていた子どもたちの姿はとても印象的で忘れることができません。そして、学習のときと同様に、子どもたちは自然にお互いを思いやり、教えあい、協力し合いながら感動や大変さなどの思いを共有していました。

また、農作業の活動は子どもたちが自然に生きる生き物たちと触れ合う場でもありました。子どもたちはカエルなど、畑や田んぼに生きる生き物たちを実に楽しそうに追いかけていました。その表情は真剣で、学生の声も届かないほどでした。時には作業そっちのけで、カエルなどを追いかけている子もいましたが、興味を持ったものが自分の前で動き回っていたら作業をやるよりも、そちらの方向に意識が向いてしまうのもしかたのないことだと思っています。無理に止めて作業をさせるのではなく、頑張っている子たちが不快に感じないように隅っこによって、その子の欲求に添ってあげることも大事だと感じました。もちろん頑張っている子たちに対しては、その頑張っている姿を褒めてあげることも決して忘れてはいけません。頑張っている子たちの中には自分たちの欲求を我慢し、作業に取り組んでいる子たちも少なくはないでしょう。参加してくれた学生は、子どもたちに寄り添い、ともに作業しながら子どもたちの頑張りを本当によく褒めてくれました。

これらのことから、のびのびとした子どもたちとともに体を動かすことで、今まで気づかなかった子どもたちの持っている別の一面をみることができたのではないのでしょうか。そして、経験することによって、自分たちが普段何気なく食べているものを育てることの大変さ、自然の大きさなどを子どもたちとともに感じとることができたのではないのでしょうか。

### 3. デイキャンプについて

今年度も 10 月 25 日に日帰りで白馬岩岳に約 50 名でのキャンプが実施されました。XY ながの校から 10 名、XY グリーン長野校から 18 名の子どもたちが参加し、1 日活動をともにしました。今年の企画は「デイハイキング」ということで、予算の関係で日帰りになりました。大根掘り、白馬豚のカレーの昼食、ゴンドラに乗ってのハイキング等を行い、充実した、参加者の仲が深まる 1 日になりました。

この企画での 1 日は、子どもたちは学生が準備した企画に生き生きと楽しそうに取り組んでくれました。

### 4. 1 年を振り返って

基礎学習、農作業、デイキャンプという 3 つの事柄から 1 年間を振り返りましたが、わたしたち学生は XY を通して多くの子どもたちや地域の方と関わる機会を与えていただき、そこで

経験することによって学生一人ひとりが今までの自分自身の行動や今後とるべき行動などについて学ぶことができました。

振り返れば反省点や改善点は書き切れないほどたくさんあります。これらの反省が次に活かされるためにも、もう一度活動を振り返り、見つめ直していきたいと思います。

最後になりますが、この1年間活動ができたのは多くの人の協力があつたからです。毎回の準備や活動に協力してくれた学生スタッフにはとても助けられました。ともに考え悩み、喜びを共有しあつた仲間存在は決して忘れることはありません。また、XY サタデースクールネットワークのスタッフの方々、JA のの方々、地域の方々のご指導と支援があつたからわたしたち学生が学び、経験を積むことができました。そして、なによりも、活動の場に子どもたちが参加してくれたからこそ、わたしたちは今まで知らなかったことに気づき、考えを深めることができました。XY の活動に関わってくださった多くの方に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。

#### ◇地域協力者からの評価

### XY サタデースクールの活動について

NPO 法人 XY サタデースクールネットワーク 常務理事・事務局長 唐木忠重

当スクールは、学校の完全週休二日制により休日となる土曜日に、子どもたちに居場所を提供しようという趣旨で、平成14年から活動している NPO 法人 (XY サタデースクールネットワーク) が運営しているスクールです。スクールの理念として、戸田忠雄代表が掲げている XY とは次のようなことです。

————— 子どもたちが大人になるに際して必要なことは、確かな学力と豊かな経験を積んでいくことです。この「確かな学力」を子どもの人生の座標軸の X 軸だとすれば、「豊かな経験」は Y 軸に相当するといえます。具体的には、「確かな学力」は国語、算数、英会話の基礎を学ばせよう、「豊かな経験」は農作業を通して自然体験・共同体験をさせようというものです。 —————

農作業は、JA (農業共同組合) の営農指導員の指導を受けて進めますが、学習の指導をしたり、農作業の手順について営農指導員と打ち合わせて、実際に子どもたちを指導するのは学生スタッフの皆さんにもお願いしています。現在は、信州大学と清泉女学院大学と同短大の学生の皆さんです。

学生の皆さんには、学習のカリキュラム委員会にも加わってもらい、年間のスケジュール設定から、農作業の企画 (何を、いつ、どう進めるか?) について営農指導員と打ち合わせたり、それに沿った教材を用意したり、すぐにも学校で教職員=先生として活動できるという、学生の皆さんにとっても、極めて実践的実習の場になっていることと思います。教職に限らず、どんな活動もそうですが、カリキュラム検討や農作業も、どう進めるか、自ら進んでその中に飛び込んでいかなければ、難しさもまた喜びも味わえないと思います。始めて7年目になりますが、毎年積極的に参加してくださる学生さんがいて、感謝もし、また頼もしくも感じています。子どもたちは、社員スタッフより学生スタッフの方が、お兄さんでありお姉さんですから、身近に感じているようです。逆に言うと、学生スタッフの皆さんが居るお陰で当スクールが成り立っているとも言えます。その点で、心からお礼を申し上げます。

実際に、「XYにはどうしても行くんだ……」といって、他の行事があってもXYの方へ行くんですよ、と言ってくれる不登校気味の子どものお母さんがいます。学校より自由な行動を許しているということがあるのですが、それも子ども一人当たり一人か二人の学生スタッフがいてくださるからです。

ペスタロッチに啓発されたところが大きいといわれる、幼児教育の先覚者のフレーベルは、立派な大人になるためには、子どものころ①遊ぶことに②夢中になる時間を持ち③それを温かく見守ってくれる母親との肌の触れ合いの三つが大事だといっています。

学生の皆さんは、母親の変わりにはできませんが、肩車をしたり、抱きついていたりして、子どもたちから見れば、母親代わりの役を果たしてもらっています。子どもたちも学生スタッフとの触れ合いを楽しみに当スクールへ来てくれているのがよく分かります。

学習では、限られた時間しか取れない中で、基礎的なことしか取り上げられませんが、子どもたちが将来大きくなって、「ああ、そういえばXYサタデースクールであんなことを聞いたことがあるな」ということが一つでも二つでもあればいいな……と思っています。例えば、今年度の国語で取り上げた孔子の論語もそうです。孔子は、けして難しいことを言っているのではなく、人間としてごく当たり前のことを言っていることをいくつか紹介しているのですが、具体例を引き合いに話してもなかなか理解するところまではいかないかもしれないのですが、大きくなった時に思い出してもらえることがあれば、当スクールの存在意義があると思っています。

以上のように、当スクールは、学生スタッフの皆さんの自発的参加がなければやっていけないし、また学生スタッフの皆さんも当スクールに参加することで大学内ではなかなか経験できない貴重な体験の機会となっているのではないのでしょうか。参加してくださる学生スタッフの皆さんに感謝し、ここでの経験を生かして将来ご活躍されますようお願いしております。

# 湯谷子どもランド（7年目）

プラザ長 笠井悠太（理数科学教育専攻3年）  
副プラザ長 高池亮輔（保健体育専攻3年）  
梅澤美夏（言語教育専攻3年）

## ○学生スタッフ名

田村 将太（実4）	布山奈津美（言4）	野口 洋憲（社4）	齋藤 有希（米1）
田村 弘樹（言4）	春原 圭佑（実4）	土田 恵久（社4）	青木 智博（実4）
納 愛果（社4）	市原 美里（地4）	一條 まな（言3）	宮川はるな（言3）
小西 舞（実3）	伊藤 香澄（実3）	吉池 潤奈（実3）	小林 祥之（地3）
岡田 克志（社3）	菊地ゆかり（言3）	市原 哲也（社3）	原 耕平（理3）
小松 智恵（社3）	吉田 雄哉（理2）	滝沢雄太郎（理2）	島田英一朗（理2）
片桐 清史（理2）	早川 和宏（理2）	堀井 大輔（理2）	西澤 直城（理2）
鈴木 祐香（理2）	田畑隆太郎（実2）	布山 朋和（実2）	小林 智子（実2）
市川 香織（実2）	近藤 純江（実2）	園田 泉（実2）	塚原 昌裕（社2）
田中 陽菜（言2）	戸谷 望美（言2）	中村 恵理（芸2）	

## ○長野県短期大学 学生スタッフ名

高橋 真依（幼2）	菅原 千史（幼2）	百瀬 史麻（幼2）	松本 奈央（幼2）
堀内 綾花（幼2）	武重 彩那（幼2）	倉島 喜子（幼2）	小林 円香（幼2）
宮林 世羅（生2）	中沢 恵美（生2）	小川原芳奈（生2）	中村 諒（幼1）
山口 葉月（幼1）	岡澤 沙季（幼1）	木村 彩乃（幼1）	熊谷 恵美（幼1）
荒井 陽子（幼1）	飯島 晶子（幼1）	坂西 麻衣（幼1）	岩下 実花（幼1）
鈴木瑠里子（国1）	清水 歩美（国1）		

## ○参加者数

子ども約80名 中学生3名 保護者約40名

## ○連携団体

湯谷子どもランド保護者会 湯谷小学校 教職員 長野県短期大学 学生

## ○プラザの概要

「湯谷子どもランド」は、湯谷小学校の子どもたち（1～6年生）と、その保護者、湯谷子どもランドを卒業した中学生スタッフ、信州大学の学生と長野県短期大学の学生が提携して活動している団体です。

活動の回数は月に1、2回程度で、主に土曜日の午前中の時間を使い、湯谷小学校の近くの壇田地区センターを利用させてもらい一年間を通して様々な活動をしてきました。

「湯谷子どもランド」の特徴は、子ども・保護者・学生が一緒になって活動を築き上げることです。そこで、「湯谷子どもランド」では、次のようなことを主な目標としています。

子どもたちが異学年、異年齢の集団の中で友達や学生、保護者との関わりを通じて、集団の中で自分を豊かに表現する力や人と関わるためのコミュニケーション能力、異世代の存在する社会で強く生きるための社会力の形成・向上を目指すと共に、子ども・学生・保護者の三者間、または子ども・学生・保護者同士の交流を深め合い、互いを信頼して活動を築いて

いくこと。

この目標のもと、今年は子どもとの活動だけではなく、学生と保護者がもっと関わりを持つ場がほしいと思い、活動後の学生・保護者交流会も行いました。

また、「湯谷子どもランド」の起源は小学校が週5日制になったことをきっかけに「土曜日の午前中に子どもの居場所を作る」ということから始まりました。このことを基として、子ども・学生・保護者が互に関わり合い、この場（湯谷子どもランド）に参加することが楽しくなる、行くことが楽しくなるような場を作っていきたいと思い私たち学生の願いとして一年間活動をさせていただきました。

#### ○活動の当日の流れ（一例：7月26日「流しソーメン」の企画）

企画の内容：牛乳パックでオリジナルボートをつくって遊ぼう！！時間がきたら流しソーメンを班毎食べる。

- 7時50分 学生、しなのき会館に集合
- 8時10分 壇田地区センター到着
- 8時15分～ 活動の準備
- 8時50分～ 学生、打ち合わせ
- 9時00分～ 子どもが集まり始める  
※9時30分まで自由に友達と遊ぼう♪
- 9時30分～ あいさつ、活動の説明（導入）
- 9時40分～ ボート作り
- 10時30分～11時30分 班毎、流しソーメンを食べるかボートで遊ぶ（30分交代）
- 11時35分～ 片付け&リフレクション
- 11時50分 解散
- 12時15分～ 保護者さんとの交流会開始
- 14時00分 活動終了

#### ○一年間の活動

今年の「湯谷子どもランド」は、4月に発足しました。そこから、湯谷小学校に挨拶に行き、「湯谷子どもランド」に子どもが参加していただけるようにプリントを配布しました。また、新1年生の保護者さんに「湯谷子どもランド」が理解してもらえるように参加日などを利用させていただき、ピラを配る活動も行いました。

その学生と保護者さんの活動により、約80人の子どもが「湯谷子どもランド」に参加したいと表明していただき、第1回の活動を開催することができました。

以下、一年間の活動をまとめてあります。

日程	活動名	活動場所・詳細
5月10日	飛んで！走って！みんなで遊ぼう♪	湯谷小学校 体育館
5月31日	名札づくり☆	壇田地区センター
6月28日	キャンプに向けて、仲良くなるろう☆	湯谷小学校 体育館
7月12日～13日	湯谷子どもランド 夏キャンプ	国立妙高青少年自然の家
7月26日	夏を満喫☆流しソーメン	壇田地区センター
8月30日	魚釣り&BBQ	雨天のため中止
9月13日	野外炊飯☆火をおこして、カレー作り	小天狗の森



10月4日	みんなで秋を探しに行こう♪♪	遠 足
11月15日	迷Q巨大パズル☆	壇田地区センター
12月13日	楽しく！おいしい♪クリスマスケーキを作ろう	壇田地区センター
1月17日	お正月の遊びをやろう！！	湯谷小学校 体育館
2月7日	昔の遊びに挑戦！！	壇田地区センター
3月14日	思い出ぼろぼろ！！	壇田地区センター

◇実践から得た「臨床の知」

## 子ども・学生・保護者で築き上げる湯谷子どもランド

笠井悠太（理数科学教育専攻3年）

今回、「湯谷子どもランド」の一年間の活動を通じて、上記標題のようなテーマを掲げました。その理由は、「湯谷子どもランド」には、子どもと学生という関係だけでなく、保護者さんがとても密接に関わり合い、ともに「湯谷子どもランド」の活動を支えていることが特徴的だからです。つまり、「湯谷子どもランド」は、子ども・学生だけが活動の主役ではなく、子ども・学生・保護者の3役が主役になれる活動の場です。

そこで、今年、「湯谷子どもランド」の1回1回の活動ごとに子ども・学生・保護者がどのように響きあうのか？この3役が一年間つながりあうことで子ども・学生・保護者のそれぞれにどのような効果があるのだろうかと考え、きっとそれぞれの成長に大きな影響を与えるのだろうと思い、このテーマを掲げました。

さて、このテーマの下、今年は、子どもと学生、学生と保護者、子どもと保護者が関わりが深くなるような活動をいくつか企画し、行ってきました。また、学生は、子どもの様子を気やかに活動中だけでは学生と保護者の関わりが薄らいでしまう可能性があったので、学生と保護者の方が深く関われる場を設定しました。活動の準備段階での連絡と協力、学生と保護者の交流会などです。

このような活動を通して、子ども・学生・保護者の様子、考え方にどのような効果があったのかを企画進行者の視点から子どものリフレクション、様子、学生のリフレクション、感想、様子、保護者さんの声、様子、感想から話を展開し、いくつかの活動を取り上げ具体的に考えていきたいと思います。

### 1. 最初の活動における子ども・学生（5月10日 飛んで！走って！みんなで遊ぼう♪）

活動自体は、初めてということもあり子どもと子どもが深く関り合い、子どもと大学生の心と体のアイスブレイクを目的とした活動でした。内容的には、おにごっこ、何人何脚障害物リレー、ボールを使ったゲームでした。

#### 子どもの感想（原文のママ引用）

- ・大がく生のお兄さん、おねえさんといっしょにあそべて楽しかった。（3年 女子）
- ・今日はありがとうございました。楽しかったです。一番楽しかったのはムカデおにごっこです。またいっしょに遊んでください。（4年 男子）

このときの活動が今年の「湯谷子どもランド」の初の活動でしたが、子どもの中からは何人か大学生と遊ぶことに楽しさを感じていました。まだ、学生が子どもの心に影響していると

までは言えないが、初回の活動を通じて活動に参加したいという意欲が感じられました。

#### 学生の感想 (原文のママ引用)

・初めての子どもと関わる機会でのように接していいかわからず、積極的になれなかった  
ので次回の活動では、もっと積極的に関りたい。(信大2年 男子)

・子どもはチーム対抗戦になると積極的にコミュニケーションをとっていた。私もそのこ  
とをきっかけに子どもとかかわることができました。次回の活動が楽しみです。

(信大2年 女子)

・やっぱり湯谷の子どもは元気があって大好きです。子どもたちに会うと元気になれます。  
参加できてうれしいです。(信大4年 女子)

信州大学の2年生、長野県短期大学の1年生にとっては初めての「湯谷小子どもランド」の活動でした。その中で、子どもとのかわりについてのリフレクションでもっと積極的に関われればよかったという意見が多かった。子どもを意識してしまい、まだ、子どもとの関わりに不安を感じているようでした。しかし、学生の中からは、子どもと関わるために考えるようになった人もいたので、早くも子どもが学生に与える影響が見え始めた。また、「湯谷小子どもランド」に何度も来ている学生は活動の機会をととても楽しみにしていることが分かる。きっと多くの学びを得てきたのだろう。

## 2. キャンプを通じての子ども・学生・保護者(7月12日～13日 夏キャンプ)

湯谷小の一大イベントとっていいほどの「湯谷小子どもランド 夏キャンプ」が今年も7月に開催されました。この活動は、子どもたちにとって年に1度の1泊2日の活動です。グループで活動し、どの子もひとまわりもふたまわりも大きく成長する活動です。また、学生も信州大学2年生が初めて企画することもあり、仲間意識、企画力、そして子どものことを考える大きな機会となります。さらに、今年は、保護者さんにも深く関わっていただき、子ども・学生だけで終わらないキャンプを築くことをねらいに、保護者さんの多大なご協力の下すばらしい活動ができたと思います。

今年のキャンプのテーマは「フレンズ」でした。

子どもたちにとって普段学校で遊んでいる子どもの枠を越え、この夏キャンプでは、「湯谷小子どもランド」に参加している同じ学年の子はもちろん、異年齢の子ともなかよくなってほしい、協力してキャンプを達成してほしいという気持ちでテーマと立てました。また、子どもにとって学生と保護者さんの存在も大きな意味を持つと考えていました。

その活動を通じて子ども・学生・保護者はどのように響きあったのかを考えました。

#### 子どもの感想 (原文のママ引用)

・今日は、班の人たちと協力し合いながら、川にいけたり、クイズにちょーせんできました。学生さんとも仲良く遊べてうれしかったです。今年が最後だったからなんだか寂しいです。学生さんありがとう。(6年 女子)

・フレンズという目標がとってもいい。たくさんの友達ができてよかった。大人の人も協力できたのでうれしかった。(5年 男子)

6年生にとっては、最後の夏キャンプでした。そのこともあり、6年生の中にはキャンプが終わることが寂しそうな子がいました。また、子どもから活動を通じて初めて学生さんのおかげです。ありがとうという声を聞きました。去年のキャンプと比べると子どものためというか学生同士の内輪な感じがあったが、子どもたちには学生の陰の努力は、形として通じている

と感じました。これは、今回のキャンプがあったからだけではなく、6年間の長い間、学生の姿を見て、学生とともに活動してきたからだと感じました。また、6年生以外の子どもたちからもキャンプを通じて大きく成長した姿が見られました。さらに、5年の男の子から大人の方と協力ができてうれしかったという感想がありました。保護者さんの影で支え、子どもと学生を支え、密接に関わってくれる姿を見て、その姿に少しずつ気づき、なんとなくの気持ち的に子どもに感謝の気持ちが生まれていることに気づかされます。

#### 学生の感想 (原文のママ引用)

- ・今年のキャンプを通じて、子どもの気持ちを考えることの大切さ、子どもの命を預かることの大切さについて気づかされました。学生がもっとまわりを見る視野が必要でした。  
(信大3年 男子)
- ・初めて企画をしたことで企画のつらさをしりました。活動自体は、反省点が多いですが、自分の力として見つめしっかりと反省し、考え直していきたいと思いました。  
(信大2年 男子)
- ・今回のキャンプは学生も子どもの姿から多く気づかせてもらえたと思いました。ぼくも子どもの様子、企画について再び気づき、見直すチャンスがもらえたと思っています。また、企画者は保護者の方への感謝の気持ちをもつことが必要に感じました。今回の活動は本当に影で保護者の方に支えてもらったと思います。  
(信大3年 男子)

「湯谷子どもランド 夏キャンプ」という大きな企画を通じて、子どもの存在が学生に与える影響はとても大きいものであると思われます。大自然の中で子どもを預かり活動することは、時には危険な場面やはらはらさせられる場面がある中で、学生の意識の中に子どもを預かることの大変さ、大切さをイメージづけていきました。また、企画者たちからは子どもの気持ち、子どもの視点を考える大変さを初めて実感したように見えました。実践を通して、子どもと活動することが学生を成長させていることがはっきりしてきたと思います。

また、学生と保護者さんのつながりについては、このキャンプを通じて大きく変化したと思います。学生がキャンプという大きな企画を行えることの裏には、保護者さんがとてもささえてくださっていること、協力してくださっていることがあります。そこに気づき始めた学生がいたことに保護者さんの存在が学生に与えているものも大きいことが分かります。また、感想にもっと感謝をすべきだと書いてありますが、感謝というワードがはじめて企画を通じてできたのもこの企画を通じてでした。やはり、企画ごとに、そして大きな企画によって学生が成長している様子が分かります。

#### 保護者さんの感想 (原文のママ引用)

- ・学生さんには、毎年いいキャンプを企画していただき感謝しています。子どもたちもとても楽しみにしていました。私も久しぶりに楽しむことができ、学生さんに関わって若返った感じでした！！  
(4年生の母)

保護者さんの中には、キャンプを通じて学生と深く関わったことを本当に喜んでくださった方がいました。自分たちが裏方の仕事をしつつ、キャンプを楽しんでくれたことには本当に感謝です。また、学生と関わることで普段体験のできない感覚を感じ心から楽しんでいたと思います。

### 3. 保護者さんとの交流会を通しての学生と保護者の関わり

今年の「湯谷子どもランド」は、保護者と学生も深く関わり合い、お互いの思い、気持ち

を伝え合おうという目的で保護者さんと学生が関わりあえる交流会の場を4回提供してきました。その交流会を通じて学生はどのように感じたのか、保護者さんはどう思って下さったのかを感想として聞きました。

- |        |                            |
|--------|----------------------------|
| 第一回交流会 | (5月10日 「湯谷小子どもランド」に期待すること) |
| 第二回交流会 | (6月28日 キャンプで不安に思っていること)    |
| 第三回交流会 | (7月26日 キャンプの反省会)           |
| 第四回交流会 | (11月15日 子育てへの不安、学校問題と子ども)  |

#### 学生の感想 (原文のママ引用)

- ・新鮮でした。このような機会が減多にないので余計にそのように感じました。また保護者さんが自分の子どもに対する悩みなどのリアルな意見も聞けて大変参考になりました。このような交流会は積極的に行うといいかな、と感じました。(信大2年 男子)
- ・保護者さんとの交流会を通して、いつもの活動の中では見られない子どもの姿を知ることができました。保護者の方が子どもに対して思っていること、考え方など考えさせられることも多く、勉強になりました。(県短1年 女子)
- ・保護者さんとの交流会で「子育てへの不安」というテーマで行ったときに保護者さんたちが本当に深い話をしてくださるのは学生との信頼関係が成り立っているのだと思った。(信大3年 男子)
- ・保護者の方一人ひとりから子育てに関する悩みを聞かせて頂き、中には涙する方もいて常に不安を抱えながら子育てをしているということに心が痛くなりました。話すことで少し解放される面もあると同時に学生にとっても、保護者の方の本音を聞いた貴重な時間だったと思います。(県短1年 女子)

交流会を通じて、学生は多くの感情を抱くことができたと思います。特に第四回交流会の「子育てへの不安、学校問題と子ども」では、保護者さんが自分の子への思い、将来のため、現在の子どもの様子を心から語ってくれたことが本当に貴重な体験となったと思います。涙を拭いながらいじめ問題を語り、自分の子が強く生きてほしいと願うという話を通じて学生は、自分の子どものときを振り返っていたと思われま。自分のことを思い出し涙ぐむ学生もいました。子どもがいない場であったにもかかわらず、学生の中にはいつも触れ合っている子を思い返し感想を書いてくれた人もいました。ここで、子ども・学生・保護者の三役が存在する場が響きあっていることが分かり始めてきた。また、このような交流会を開けたこと、自分たちのような他人の学生にこのような話をしてくれた保護者さんとの間には強い信頼関係があるんだと感じていた学生もいました。「湯谷小子どもランド」を通じて築かれてきた信頼関係は、これまでに三者が存在しお互いに支えあってきたからだろうと思います。

#### 保護者さんの感想 (原文のママ引用)

- ・「学生」と「保護者」とが子どものことでこんなにも心を開いて話ができることが出来て、とても感動した懇談会でした。私達保護者はわが子の問題をどうしても「個人の問題」と思いがちですが、保護者同士で、またこのような学生との分かち合いの中で「子ども」を中心にした多くのネットワークに広げてお互いに支えあい、学び合えると素敵だなと感じました。子どもランドの大切な活動の一つにしていきたいと思いました。参加していろいろ発言してくださった保護者の方々に感謝いたします。(6年生 父)

この交流会を通じて、学生と保護者さん、保護者さん同士が気持ちを分かち合うことが、本

当にすばらしいと思い、「湯谷小子どもランド」という活動を大切だと感じてくださる人がいることが分かりました。「湯谷小子どもランド」は、単に子ども・学生・保護者がいるところではなく、個々に、お互いに響きあって築いていることを再確認させてくれるような感じがします。そして、この「湯谷小子どもランド」を大事な場所と感じさせてくれるこの活動「湯谷小子どもランド」は、本当に特別な場所なんだと気づかせていただける内容でした。学生と保護者はお互いに感謝の気持ちと信頼の関係でつながっているんだと感じました。

#### 4. 1年間を振り返って（一年間の活動を学生の感想から…）

学生の感想（原文のママ引用）

- ・活動や実習を通して、蹴ったり殴ったり自分の思うままに行動する子に出会い、今まで自分がどう子供と接してきたか分からなくなる時もあった。しかしその度に、どうしたらその子が自主的に活動に取り組めるか。活動を楽しむには自分はどうしたらよいか…などと考えるようになり、教師を目指す私たちは、ただ子どもが好きというだけでなく、子どもと同じ目線で考える姿勢が求められるのだと痛感した。私にとって子どもランドは教師ではなく、兄弟のような、友達のような、特別な存在で子どもと向き合える場所でした。（県短2年 女子）
  - ・子どもたちと関わる中で、子どもとの関わり方を考える機会にもなっています。始めは子どもたちのパワーに圧倒されるばかりでしたが、だんだん目的を持って参加できるようになりました。保護者の方の理解や協力が本当にあたたかく、みんなで良い活動をつくっていきましょうという雰囲気がとても有り難いし、良いなと感じます。（県短1年 女子）
  - ・子どもとの遊びを企画することの大変さ、ただ遊ぶだけでなく、子どもから学んだことを次に活かすための反省になる。また保護者との交流があることで、保護者からの目線で見た子どもの姿を知ることができるのがためになると思います。（県短1年 男子）
  - ・野外炊飯は、当日雨が降り中止になるかと思われた活動でしたが、保護者さんの協力の下、簡易テントみたいな屋根を作り、活動を行うことができた。この活動では子どものためにというよりは、こども、学生、保護者の三者が協力し合って火を起し、カレーを作り、遊ぶといった子どもランドに関わる人たちが一体となった活動だと感じた。（信大3年 男子）
  - ・一回しか参加できなかったけど、たった一回でも湯谷の子どもたちのパワーが伝わってきた。同じ小学校でも、普段あまり学年を越えたつながりがないと思うので、湯谷小子どもランドのような場で他学年と思いっきりはしゃげるのはとても貴重な体験だと思う。活動前、学生スタッフに自然と寄っていき、いっしょに遊ぶ姿からは、子どもたちが本心で求めているもの（人とのふれあい、コミュニケーションのようなもの）が感じられた。もっと活動に参加して、もっと子どもたちのことを知りたかった。（信大3年 女子）
- 一年間を通して活動を行ってきたが、学生が感想に持ったとおりだったと思います。

#### 5. 子ども・学生・保護者で築き上げる「湯谷小子どもランド」の響き合い

私は、この一年間、「湯谷小子どもランド」を通じて本当にたくさんのことを学びました。三者が主役の子どもランドを取り上げ、子ども・学生・保護者で活動を築き上げることでお互いにどのような影響を及ぼすのか、お互いにどのような関係が切り開かれ、どのように成長するのかを考えてきました。このテーマの下、子ども・学生・保護者ともに大きな成長を見るこ

とができました。

子どもは、いつも遊ぶ子と違う子と関わることでグループ活動でも自己を表現することができる子が多く、自分を持ちつつも協力し合おうという姿が多く見られました。また、学生との関わりで小学校では体験できないことを通し、成長していきました。学生は、子どもを通して、子どもの想像力などのすごさに気づき、子どもとの関わりについて振り返る機会を得ました。また、保護者とは信頼関係を通じて、交流会では心で語り合い、自分たち学生同士だけでは味わうことのできない思い、感情に触れることができていました。保護者にとっては、「湯谷小子どもランド」の場が普段の思い、悩みから解放され、心から楽しむことができる場になっていたと思います。

子ども・学生・保護者の三者が存在することは、互いの心、気持ち、成長に大きな変化をもたらすことが分かりました。そして、普通の生活では体験できないことについて考え、振り返り、時には思いをぶつけることで、一人の人としてひとまわりもふたまわりも感情が豊かになっていることが分かりました。さらに、活動を何回もこなしていく中で、子ども・学生・保護者の中に感謝という思いがお互いに刻まれていったのは、「湯谷小子どもランド」の参加者の感想からすぐに読み取ることができました。

しかし、私が途中から感じたことは、この三者がいたからこのような成長が見られたのではないのかとも思いました。三者がいる前に「湯谷小子どもランド」という不思議な空間が子ども・学生・保護者の三者を響かせ合っているのではないかと感じていました。「湯谷小子どもランド」というなんでもない場には、なぜか人が集まり、いつも楽しそうな笑顔が生まれる空間という気がします。私にもう一年あれば是非、考えたいテーマであると思います。しかし、この思いこそが「子どもランド」の不思議な空間に取り入れられているような気がします。「湯谷小子どもランド」がこのように愛される空間になっているのは、7年間という短いようで長い歴史の中で、感謝の気持ちの下、多くの人が響き合うことができ、築き上げてきたからだろうと思います。

最後は、本テーマからずれてしまいましたが、子ども・学生・保護者は、「湯谷小子どもランド」という場のもとに三者が響き合うことで個々に大きな成長、変化をもたらすことがわかりました。一年間、「湯谷小子どもランド」に関わることができて本当によかったです。

#### ◇地域の保護者からの評価

### おなじ時を生きる仲間たち、学生も子どもも親も

湯谷小学校子どもランド 保護者代表 中谷隆秀

#### 1. 湯谷小の子どもランドに関わって8年間変わらないもの

子どもランドには、いつも必ず子どもたちと、学生と、そして保護者の笑顔がある。子どもランドの活動を通じていつもみんなが大事にしてきたもの、それは「子どもたちの笑顔」だと思う。そして、親の願い＝子どもたちが元気に生き生きと成長すること。これも変わらない願いです。学校週5日制が始まり、子どもランドがスタートして17年、それは子どもたちの居場所を確保して安心して遊べる場作りから始まりました。

#### 2. 学生スタッフ中心の運営になり、子どもランドは年々進化しています。

子どもランドの活動は4年前から運営主体を学生スタッフ自身に移行させて任せてきました

が、2008年度は毎月のランドの日常運営にプラスして、保護者との懇談会も年間計画の中に組み込んで、学生スタッフと保護者が一緒に話し合う場面を増やしてきました。この定例の「学生スタッフと保護者の懇談会」を継続する中で、活動内容も変化し充実してくると共に、一緒に支え運営する保護者との交流内容が充実してきたと思います。2008年11月の保護者と学生の懇談会の中では、一緒に「子育ての悩み」について語り合いましたが、わが子の子育ての赤裸々な悩みや、学生自身の生い立ちに思わず涙する保護者の姿があちこちで見られました。お互いに率直に話し合いができる関係を目の当たりにして、この子どもランドに関わる学生や保護者の関係が進化している事を実感しました。今の時代にあって、保護者にとってもこんなに真面目に真剣に子育てについて考えられる場は、決して多くはないのではないかと思います。今年の「子どもランドの進化」の場面だったと思います。

### 3. 子どもランドの魅力、かけがえのない「場」

子どもランドでは学生スタッフもいろいろな活動にチャレンジできる、そのことの魅力は大きいですね。毎年新しいチャレンジがあり、また新しい取り組みがありますね。特に夏のキャンプは新2年生のメンバーがいつも試行錯誤しながらゼロから作り上げてくれます。このキャンプでは子どもたちも保護者も「学生スタッフのエネルギーと情熱」を全身で感じるができます。学生スタッフの「子どもたちに喜んで欲しい」、「素敵な夏キャンプを作りたい」という熱い想いを私たち保護者はとても強く感じるのです。多くの保護者はその純粋な想いを感じたときに、この子どもランドがかけがえのない素敵な「場」であると感じるのだと思います。またそのキャンプと一緒に作るパートナーとして参加できる喜びも同時に感じるのです。夏キャンプは子どもランドの大きな財産であり、魅力であります。

### 4. 子どもたちにとって学生スタッフ＝未来の自分の姿＝「夢」の形

子どもランドは子どもたちにとっては友達作りの場でもあり、1年生から6年生までの異年齢の集団での活動や様々な体験ができる場でもあります。毎月の企画ではどの子も元気いっぱい体を使って、学生スタッフのお兄さんやお姉さんたちにぶつかって行きます。いつも元気な湯谷っ子はみんな学生スタッフのお兄さん、お姉さんたちが大好きです。子どもたちにとっての学生のお兄さん、お姉さんは、身近な友達であり、信頼でき、甘えられる大人なのです。子どもたちは活動の中で、近い未来の自分の姿＝「夢」と学生スタッフのお兄さんお姉さんの姿を重ねているようにも感じています。学生スタッフは子どもたちの憧れの的なのです。

### 5. これからも共にもっともっと素敵な活動を作っていきましょう！

このような子どもランドの活動がこれからもずっとずっと続けていけるように、保護者としてもしっかり学生スタッフと協力をして、子どもたちがいつまでも「夢」を持って明るく元気に過ごせるように活動を続けて行きたいと思います。本年度は特にリーダーの笠井悠太君、副リーダーの高池亮輔君、その他多くの学生スタッフの皆さんには大変お世話になりました。また長野県短期大学のスタッフのみなさんにも大変お世話になりました。湯谷小の子どもたちは本当にこんなに素敵な学生スタッフにめぐり合えて、幸せだと思います。これからももっともっと素敵な子どもランドの活動を共に作っていきましょう。心から感謝を込めて、いつも子どもたちに「夢」をありがとう！

## 青木村えがおクラブ（4年目）

プラザ長 小西 舞（教育実践科学専攻3学年）

副プラザ長 原 耕平（理数科学教育専攻3学年）

### ○学生スタッフ名

小西 舞（実3）	原 耕平（理3）	青木 智博（実4）	加藤 博美（実4）
田村 将太（実4）	石井絵理子（社4）	城井 希人（社4）	三枝 裕紀（社4）
須貝 和之（社4）	土田 恵久（社4）	野口 洋憲（社4）	田村 弘樹（言4）
肥留間淳也（理4）	伊藤 香澄（実3）	永谷 嘉浩（実3）	一條 まな（言3）
内田 拓（言3）	宮川はるな（言3）	笠井 悠太（理3）	中川 茜（生3）
高池 亮輔（保3）	田村 淳樹（美3）	市川 香織（実2）	渋谷美奈子（実2）
田畑隆太郎（実2）	布山 朋和（実2）	宮尾 亘（実2）	鈴木 祐香（理2）
西澤 直城（理2）	早川 和宏（理2）	中村 恵理（音2）	前嶋ゆうこ（長大）
原田 圭祐（長大）	菅原 謙輔（長大）	小宮山 寛（長大）	丸山 怜央（清泉）
本間 美紀（清泉）	堀田 沙依（清泉）	久保田歌穂（清泉）	山田 貴子（清泉）
佐藤 彩音（清泉）	福士 最愛（清泉）		

○参加者数 子ども約70名

○連携団体 青木村教育委員会

### ○プラザの概要

青木村は上田市と松本市の間に位置する人口 5,000 人弱の村です。青木村では、「心豊かでたくましい子どもの育成＝今こそ子どもに社会力を＝」という教育目標を掲げています。青木村の教育で中心的なものである「社会力」とは「人と人とが繋がり、社会を作る力」のことであり、この社会力を身につけるためには多様な他者との相互行為が必要です。そのために、青木村教育委員会は教育支援ボランティア、コーディネーター、学生教育ボランティアという村内の子どもに関係するグループである子どもはつらつネットワークと連携・協働し、子どもの社会力育成を目指しています。その中で信大「青木村えがおクラブ」は、学生教育ボランティア「わこうど」として青木村の教育に参加させていただき、子ども・地域に関わる様々な活動を展開しています。

### ○一年間の活動

活動日	活動名	参加者（人）		
		学生	子ども	地域の方
6月1～7日	あおきっ子通学合宿	22	36	22
7月18日	通学合宿報告会	22	26	20
7月19日	自分だけの風鈴を作っちゃお♪	11	28	12
8月5～8日	あおきっ子川遊びキャンプ	24	38	12
10月19日	図書館フェスティバル	4	120	
11月3日	保福寺峠ウォーク	8	3	12
11月15日	青木村産業祭	14	不特定	不特定
12月6日	子育てフォーラム青木2008	9	0	100
2月21、22日	冬の大三角	—	—	—



## ○活動内容

### 1. あおきっ子通学合宿

今年で4回目となる「あおきっ子通学合宿」とは、青木村の文化会館（公民館のようなもの）を家にして、子どもと学生が衣食住を共にするという活動である。その間も子どもたちは小学校に行き、学生は朝子どもたちを見送り、夕方帰ってきた子どもたちを迎える。今年は「気付き」というテーマの下で通学合宿を行ったのだが、1週間家族と離れて生活することで子どもたちは家族の大切さに改めて気付き、また学生にとっては1週間という長期の合宿の企画運営を通して本当に多くのことに気付き、学ぶことができた。

### 2. 通学合宿報告会

「あおきっ子通学合宿」が終わって1か月以上が経ち、久しぶりに子どもたちと再会した。ここでは、通学合宿に参加した子どもの保護者さんたちと合宿が終わってからの家での子どもたちの様子をお聞きしたり、学生が作成した通学合宿のDVDを上映し子どもたちにプレゼントした。

### 3. 自分だけの風鈴を作っちゃお♪

「通学合宿報告会」の翌日、学生が企画・立案した活動を行った。内容は、ワイヤーとテグス、鉄の棒などで作ったオリジナルの風鈴に、さらにビーズやモールで飾りつけるという工作だ。子どもの参加者層は保育園児から中学生まで幅広く、保護者の方々の参加も多くあり充実した活動となった。

### 4. あおきっ子川遊びキャンプ

「青木村の川『浦野川』で思いっきり遊んだことがありますか。」をテーマに、夏休みを活用し体で自然を感じ、多くの友達と思い出をつくることを目的に小学校3～6年生を対象に行ったキャンプである。昼は青木小学校のすぐ横にある浦野川で遊び、夜は学生が企画した肝試しやキャンプファイヤーといったお楽しみがある。小学校の校庭にテントを張って、そこで寝泊りする。

### 5. 図書館フェスティバル

青木村図書館で行われた図書館フェスティバルに参加させていただいた。子どもは保育園から小学校中学年の子たちが参加した。内容は、子どもや地域の方によるお話し会や、子どもたちと一緒に紙コップを使ったおもちゃ作りを行った。

### 6. 保福寺峠ウォーク

歴史の道、旧東海道を歩く1日コース。青木村の歴史に詳しい方が案内してくださった。義民による一揆の歴史も見ることができた。

### 7. 青木村産業祭

道の駅あおきで行われた「青木村産業祭」にえがおクラブとしてお店を1つ出店した。内容は、「くるみのキャンドル作り」と「コインシューター（ゲーム）」。通学合宿や川遊びキャンプに参加した子どもたちも多く来ていて、再会の場となった。また、地域の方々とも多く触れ合うことができた。

### 8. 子育てフォーラム青木2008

青木村の保育園、小学校、中学校の先生方をはじめ子どもに関わる地域の方々、また青木村で活動させていただいている信州大学、長野大学、文教大学、清泉女子短期大学の学生が一堂に会した。フォーラムの前半では、青木村の教育理念でもある「社会力」を提言した筑波大学

名誉教授の門脇厚司先生の講演があり、後半では「あいさつのできる子どもを育てるには」「学ぶ力のある子の育て方」「子どもたちの仲間作りの実態をさぐる」という3つの分科会に分かれて子どもに関わるそれぞれの立場から意見を述べ、話し合いをした。

#### ◇実践から得た「臨床の知」

### 「村が子どもを育てる」という社会教育への参画

小西 舞 (教育実践科学専攻3年)

原 耕平 (理数科学教育専攻3年)

#### 1. はじめに

今年度1年間青木村で活動させていただいて最も強く感じることは、村の人ひとり一人が子どものことを考え、「村全体で子どもを育てる」という意識が高いということだ。去年参加した川遊びキャンプで前教育長である小岩井先生が「子は村の宝だ」ということをおっしゃっていたのがとても印象に残っている。このように地域と教育が密接に結びついている青木村のフィールドで、「青木村えがおクラブ」は4年目の活動を行い、私たち学生は本当に多くのことを学ばせていただいた。以下では、「村が子どもを育てる」ということに触れる中で、私たちが感じたことや学んだことについて述べたい。

#### 2. 多様な他者との関わり

「プラザの概要」でも紹介したように、青木村では社会力の育成に力を入れている。そして社会力育成のためには家族や親しい友人だけでなく多様な他者との関わりが必要とされている。「青木村えがおクラブ」の活動において多様な他者とは、普段関わる機会の少ない異学年の友だちや大学生、地域の方々ということになる。ここでは、活動の中で学生が感じた子どもたちの他者との関わりが見られた場面を紹介する。

通学合宿では、「Hくんが泣いていたとき、上級生のMちゃんが近寄って優しく背中をポンポンしていた。」(M.Y)、「夕飯の片付けのとき、男の子3人が最後まで残ってガス釜を洗ってくれた。食事係だけでやるととても時間がかかるので、とってもうれしかったです。」(M.H)、「子ども同士で『〇〇くん、次は調理だよ。』など、促しが見られる」(S.Y)、「合宿2日目、班全員で遊ぶなど、班の距離感や男女の距離がぐっと縮んだように思えた1日だった。その後の夕食でも男女間で自然と会話があったので、子どもの意識が少しずつ変わっているのではないだろうか。片付けの時は学生からいろんな指示を与えられなくても、自分から仕事を見つける姿が見られ驚いた。」(K.M)、「最初に会ったときはお互いどこかぎこちなく感じる部分もあったが、合宿最終日になると、合宿参加者がかけがえのない大家族のように思える。」(H.K)という子ども一子ども間、子ども一学生間のリフレクションだけでなく、「学生側から特に何も言わなくても食改(食生活改善推進協議会)のおばちゃんが子どもたちに教えている姿を見て、料理を通して交流しているんだと思いました。また、子どもたちは食改の方々のやり方をまねしてやってみる、食改の方々は子どもたちのやり方に必要以上に口を出さずに見守るという姿が見られた。」(M.H)、「くつろぎの湯で出会ったおじいちゃん、おばあちゃんがやさしく言葉をかけてくださった。地域の人が学生を温かい目で見守ってくれていて、この合宿が村の人に愛されていると感じた。」(N.Y)という子ども一地域間のリフレクションも見られた。

また、親子での参加が多かった学生企画『自分だけの風鈴を作っちゃお♪』では、「親子で

考えながらやっている姿が見られてすごくよかった。」(T.R)のように、普段生活を共にする家族との関わりを再確認することができた。

川遊びキャンプでは、「川遊びを通して、普段学校では一緒に遊ぶことのない友達とも遊んだという声を聞いた。」(I.K)、「川に入っていないときは工作にいたが、子どもは経験したことがなかったり、力が弱くて、あまりナタ、ノコギリなどの道具をうまく使ったりすることができていなかった。私は、去年、川遊びキャンプで工作を担当した。その時、子どもが『できないから、これやって』と言われると、私としては自分でやってもらいたいのだが、最終的には、何でも私がやってしまった。そこで、去年の反省を活かし、今年は、『できない』という子にも、最初は手本をみせるが、あとは、自分で行えるようにしていった。途中で、嫌になる子どもも沢山いたが、やり遂げた時の顔やその後、完成したものを見せにくるときの顔はとても満足そうであった。このことから、どこまで、学生の出が必要かを考えた。」(S.K)。また、「このキャンプは、4年生も3年生も2年生もいて、清泉の人とも長大の人とも教育委員会の人や食改の人とも関わりました。」(N.A)というように、学生—学生間、学生—地域間でのリフレクションも行われている。

また、地域の行事に参加させていただいた産業祭では、「地域の人と接することができた。」(T.R)、「(青木村の名物である)義民太鼓を見ることができてよかった。通学合宿に来ていた子が太鼓をたたいている姿を見ることができた。」(M.T)のように、学生が地域とのつながりをより強く感じることもできた。

このように、子どもだけでなく活動に参加した全ての人にとって、多様な他者との関わり場の創り出すことができた。

### 3. 多様な他者との関わりから学ぶこと

前記2では子ども—子ども間、子ども—学生間、子ども—地域間、学生—地域間、学生—学生間など様々な視点から他者との関わりについて述べた。このように多様な他者と関わる中で多くの学びが生まれる。ここではその学びを「学生の学び」という視点から紹介する。

「Aちゃんは学生といるとほとんどの会話が、学生がAちゃんに対する言葉がけになってしまうのだが、私が一歩引いたところで見ていると、自分でしっかり考えて気がつけている姿を見ることができた。」(K.H)、「声かけなど、やりようによって子どもはやるうとしてくれるし、こちらがどういうアプローチをするかによることもあるなと思いました。」(I.K)、「子どもに任せるためには、その後ろの支えがないといけないんだと思う。私にできることがなにか考えていきたい。」(S.M)、「掃除のとき、遊んでしまう子どもをとめられなかった。もっとしっかり言うべきだった。自分は子どもに対して手を出しすぎてしまっていたように思う。子どもがリフレクションシートに『時計を見て行動したい。』と書いていた。『はやくして』と言わない方がいいのかもしれないと思った。」(N.E)、「飛び込みは私も参加していたので、何も問題がない時には非常に楽しかった。しかし、中には二人で一人を担ぎ上げて飛び込んだり、頭から落下したりすることもあった。また、その危険な飛び込みを学生がしているのを見て真似するように子どもも行っていったように思うので、学生は常に頭の中の危険意識というものを感じたい。他にも工作では、ナタ、ノコギリ、カッターなど素手で扱うと怪我をしてしまうような道具を使うときに軍手をつけるように子どもには言っていたが、言う立場である学生が軍手をしていない時があったので、『言った言葉への責任』は重要であると感じた。」(S.K)、「Tくんが一人で黙々と作業をしていておもしろい作品が出来上がっていた。あの場面で声をあまりかけ

ない方が彼にはよかったのかなと思った。一方、Nくんは苦戦していて、結構手伝ってしまった。もう少しヒントだけでやらせた方がよかった。」(U.T) というように、子どもたちの姿がその子どもに適した支援、その状況に適した支援を考えるきっかけとなっている。

また、「スタッフや周りの人の支えやつながりに気付くことができました。みんなに助けられて成立っているんだなあ……」(M.H)、「なにより勉強になったのは、2・3・4年生、他大生、教育委員会の方などが子どもと触れ合う姿、関わり方、声のかけ方等々、個性があったり自分にはない部分を持っていたりして、それを見てわが振りを見直せるきっかけを持ったことです。」(N.A)、「川遊びキャンプでは、4年生の気付きのよさ、3年生の取り組む真剣さ、清泉や長大の人たちの子どもとの関わり方、全てが勉強になった。」(T.R) というように、他の学生の姿を見ることによって自分自身を振り返り、学びにつながっている。

他には、「川遊びキャンプでくつろぎの湯に行ったときのこと。お風呂がとても混んでいたのだからいにお湯をくんでそれをかけていたら、近くにいたおばあさんが他のたらいにお湯をくんで私に渡してくれた。普段の生活の中ではあまり考えられないことで驚いたが、親切にしてもらいとてもうれしかった。自分もそういう風に人に接することができたらいいなと思った。青木のお風呂最高!!」(N.A)のように、活動の中で触れる地域の方の姿からも学ぶことは多くある。

#### 4. 村が子どもを育てる

このように、青木村の子どもたちは幼い頃から多様な他者と関わる場が多く用意されており、村の人々も教育に対してとても協力的だ。私たち「青木村えがおクラブ」の活動も地域の方々の協力があってこそ行えるものである。例えば「あおきっこ通学合宿」だ。通学合宿では早朝6時から食改の方が食事作りを手伝いに来てくださり、子どもたちと触れ合う機会を持ってくださった。また、校長先生はじめ青木小学校の先生方は、通学合宿のことを気に留め下校時間に配慮したり、文化会館まで子どもたちの様子を見に来てくださった。他に合宿中ほぼ毎日お風呂に入らせていただいたくつろぎの湯、くつろぎの湯が休みの日は特別養護老人ホームのレポートのお風呂や近所のお宅のお風呂に入らせていただいた。そして今年の通学合宿は36名の子どもたちが参加したのだが、参加した子どもたちと、私たちの活動を理解し子どもたちを参加させてくださった保護者さん。そして何より私たちの活動に全力で力を貸してくださった教育委員会の方々。「あおきっこ通学合宿」はこのように多くの地域の方々の協力があって成立しているのだ。

他にも「子育てフォーラム」では、「村が子どもを育てる」という意識が強く感じられた。「子育てフォーラム」では「活動内容」に記したように、門脇先生の講演会のあとは3つの分科会に分かれて討論をした。そこでは中学校の教師、小学校の教師、保育士、保護者、地域、大学生など様々な立場で自ら青木の子どもと関わった経験を踏まえながら活発な話し合いがされた。その中の「学ぶ力のある子の育て方」の分科会では、今求められている学力について、話し合った。話し合っていく中で、学校が求める学力と地域が求める学力に差異があるということがわかった。学校が求める学力は社会力のような目に見えないものであり、地域が求める学力は進学率やテストの点数といった目に見える学力なのだ。このような意見を交換しあう中で、「村が子どもを育てる」「村全体で」という言葉が多く聞かれた。「子育てフォーラム」に参加した学生は、「地域の方の『自分の子どもでない地域の子どものでも、悪いことをしたらそれを叱れるような社会を作っていきたい。』という言葉から、村が子どもを育てようという姿

勢が見られた。」(H.K) というリフレクションもあったように、青木村の地域の人々の「村全体が」協力して子どもを育てるという想いが強く伝わってきた。

## 5. おわりに

このように「村が子どもを育てる」という素晴らしい理念の下で行われている社会教育に、今年も1年間私たち「青木村えがおクラブ」が参加させていただき、とても貴重な体験をさせていただいた。私たちが行ってきた活動は、活動に参加する子どもたちに社会力を身に付けさせることを目指して行ってきたものであったが、私たち学生も子どもや地域の人と触れ合う中で多くのことを学び、学生自身にとってもまた社会力を身に付ける場となっていたのではないかと感じる。

上でも述べたように、私たちの活動は青木村の人々に支えられて成り立っているものである。私たちは各活動を終える度にお世話になった方々への感謝の気持ちでいっぱいになる。この場を借りて感謝の気持ちを伝えたい。

はじめに地域の方々。私たちが活動できるのも、青木村というフィールドがあり、活動に参加してくれる人がいるからである。また、より多くの方と触れ合うことで学びの幅が広がる。特に食改の方々やくつろぎの湯、青木小学校にはほとんどの活動で大変お世話になっている。ありがとうございます。

次に教育委員会の方々。上原さんをはじめ教育委員会の方々、えがおクラブともこまめに連絡をとり、青木村の子どもたちのことを考えるのと同じくらいに私たち学生のことも考えてくださっている。活動では私たちを見守ってくださり、活動後にはお酒を飲みながら話をしてくださる。本当に大きな存在だ。いつもありがとうございます。

最後に共に活動した学生。今年は去年に比べ、多くの4年生が活動に参加してくれた。一緒に活動する中で4年生から学ぶことはたくさんあった。「初めての学生企画でとても不安で、しかもやらなければならないことを一人で抱え込んでしまった。そのとき4年生が『みんなでやればいい』と声をかけてくれ、とても楽になった。」(H.K)、私たちが1年間活動してこれたのも、4年生が築き上げてきたものがあったからです。通学合宿から青木村の活動に参加した2年生、まだ右も左もわからないときから活動に参加し、一生懸命な姿を見せてくれた。そして3年生、私たち二人では力不足なところに気づき、補ってくれた。こんな素晴らしい仲間と活動でき、本当によかった。ありがとう。

このように本当に多くの人々の支えがあってえがおクラブの活動が成立しているのだと改めて感じる。私たちは青木村で活動し、貴重な体験をさせていただいているのだという感謝の気持ちを忘れず、次の世代につなげていきたいと思う。

## ◇青木村教育委員会からの評価

### 青木村えがおクラブとの4年間

青木村教育委員会事務局 上原博信

早いもので、私が青木村教育委員会事務局へ異動となり、信州大学教育学部の学生の皆さんと出会ってから4年が経とうとしています。当時、出会った皆さんは社会人として活躍しています。彼らが久しぶりに青木村を訪れ、再会したときは本当にうれしく、立派になった姿は時に私を奮い立たせてくれます。人は人に影響され、学び、育っていくものだと感じます。どう

しても自分の学生時代と比べてしまい、よい面、悪い面いろいろと感じます。そのことが今の自分の戒めや仕事に対する取り組む姿勢など、初心に戻らせてくれます。学生の皆さんと出会い、共に活動をしてきた中で、私にとって一番のほめ言葉は「学生のようだ。」と言われることです。私は、いつまでも若々しく、元気いっぱい、何事にも取り組んで行きたいと思います。

私事ばかり述べてしまいましたが、えがおクラブの学生諸君はだいぶ青木村に浸透してきたと感じています。ゲートボール協会や食生活改善推進協議会など多くの青木村のみなさんが学生諸君と会える日を楽しみにしています。えがおクラブの皆さんが青木村へ来て活動することによって、子どもからおじいちゃん、おばあちゃんまで元気を与えてくれます。いい面だけではなく、時には村の人から学生の皆さんが叱咤を受けることもあるでしょう。これが世間なのです。えがおクラブの皆さんは、「YOU 遊世間（ワールド）」という名前のおり活動を通して世間を知り、卒業後、社会へ飛び出していったときには世間の荒波に負けることなく活躍できると確信しています。世間は子どもだけではありません、保護者、行政など各種団体、様々な人がいます。青木村での活動だけでも、保護者、学校の先生方、地域の皆さん、役場、教育委員会、くつろぎの湯など多くの人とかかわっています。ぜひ積極的に自分から話しかける姿勢を大切にしてください。一人でも多くの人と話すよう心がけてください。きっと将来役立つと思います。

あおきっこ通学合宿、川遊びキャンプ、児童センターのボランティアなど青木村の社会力育成重点事業においては、えがおクラブのみなさんの存在がとても大きいです。子どもたちに社会力を身につけていただくことはもちろん、学生の皆さんにも社会力を身につけてほしいと願っています。各種団体の人と相談、調整をする中で、また実際の合宿やキャンプの中で、多くの多様な他者と直接ぶつかり合う中で、五感で学び、学生と子ども、学生同士、学生とおばあちゃん、学生と保護者、学生と先生、多くの人と関係が生まれます。ぜひ、気取らず、みなさんの真っ直ぐな気持ちで接してください。その気持ちは必ず相手に通じると思います。毎年、毎回様々な企画、内容を提案いただきありがとうございます。あくまでも「子どもが真ん中で、具体」を念頭に検討願います。

最後に、青木村とえがおクラブが協働することにより、それぞれが益になるよう共に刺激しあいながら一歩ずつ進んでいきましょう。私も皆さんとの出会いを大切に、時には厳しく、よき仲間としてがんばっていきたいと思います。

## 麻績村 dE 遊ぼう！（4年目）

プラザ長 伊藤香澄（教育実践科学専攻3年）  
副プラザ長 吉池潤奈（教育実践科学専攻3年）

### ○学生スタッフ名

伊藤 香澄（実3）	吉池 潤奈（実3）	旗持 貴優（理4）	平野 結（障4）
小池 真弓（生4）	落合 静香（社4）	納 愛果（社4）	須貝 和之（社4）
土田 恵久（社4）	青木 智博（実3）	加藤 博美（実4）	田村 弘樹（言4）
斎藤 健治（言4）	肥留間淳也（理4）	小西 舞（実3）	高池 亮輔（保3）
原 耕平（理3）	笠井 悠太（理3）	須郷 遥（地3）	布山 朋和（実2）
市川 香織（実2）	田畑隆太郎（実2）	園田 泉（実2）	小林 智子（実2）
永塚 達也（OB）	小平 奈緒（OG）	大塚 一哉（OB）	

### ○参加者数

子ども約70名 おみ図書館運営委員会の方約15名 麻績村教育委員長  
昔遊びの会の方約30名 保護者の方約35名

### ○連携団体

麻績村立麻績小学校 おみ図書館 麻績村教育委員会 昔遊びの会 古遊会

### ○プラザの概要

麻績村をフィールドにしての「YOU 遊世間」の活動は、今年で4年目を迎えます。村に小学校は一つだけ。この「麻績村 dE 遊ぼう！」は、麻績小学校に通う子どもたち、おみ図書館の司書である橋渡先生を始めとした運営委員会の方々、保護者の方々、教育委員会の方々、地域の方々、そして「YOU 遊世間」、という多くの方が参加しています。おみ図書館は、麻績小学校に隣接しており、子どもたちが利用することは勿論、地域の方も利用できるひらかれた図書館です。地域の方の子どもを見る目は温かく、子どもたちはのびのびと育っている印象を受けます。図書館が主催する企画に「YOU 遊世間」は参加しています。年に学生企画は4回あり、その他に地域の方が中心となって企画して下さる昔遊びや、図書館企画があります。活動時間は2～3時間です。今年の学生企画では、麻績川でのストーンペインティング、ハロウィンなどを行いました。図書館の先生方をはじめ、保護者の方や地域の方、教育委員会が支えとなってくださいました。昔遊びでは、地域の方が子どもたちのために竹馬作りや麦で作る虫かごの作り方を教えてくださいました。図書館の先生たちは、充実した環境を常に提供してくれます。ハロウィンやクリスマスパーティーがあれば、学生以上の衣装で変装し、子どもたちと一緒に活動してくれます。学生だけではできないこと、学生にしかできないこと、それを麻績の方たちと協力しながら活動させていただいています。麻績には、子どもたちのことを熱心に考える大人の方がとても多いです。そんな温かい方々に囲まれた麻績村の子どもたちは優しさにあふれています。子どもと学生というつながりだけではなく、多方面から様々な年齢の人と協力し、活動は行われています。人と人とのつながりに感謝し、そのつながりを大切にしているプラザです。

そしてもう一方で、Gキッズとの連携した活動も行っています。Gキッズには麻績小学校に通う10人程の子どもと、特別支援学校に通う障害を持った子どもが数人います。保護者の方が企画して下さり、月に約1回活動をし、8月には2泊3日のキャンプをします。子

どものペースに合わせて、ゆったりと活動が進められていきます。子どもが少人数のためか、子どもとの距離が近く、子どもに寄り添って活動することができます。多様な子どもたちとふれあい、かかわり方を学ばせてもらっています。

### ○一年間の活動

#### <図書館との連携企画>

活動日	活動内容
5月17日	学生企画①（ストーンペインティング in 麻績川）
6月7日	昔の遊び①（竹馬づくり）
21日	学生企画②（麦刈り）
28日	昔の遊び②（麦かご作り）
8月10日	夏休み寺子屋道場～郷土を知る～（講師：宮下健司先生）
10月25日	学生企画③（ハロウィン）
12月6日	図書館企画（クリスマス会）学生：クリスマスダンス（30分）担当
1月17日	昔の遊び③
2月14日	学生企画④

#### <Gキッズとの連携企画>

活動日	活動内容
4月19日	名札作り&お花見
5月24日	あいあいの祭り（障害を持った子どもたちと昼食会）
6月7日	キャンプ打ち合わせ
7月19日	〃
8月3～5日	キャンプ in 高遠青少年自然の家
10月25日	ハロウィン（夕方～）写真立て作り
12月23日	クリスマス会
1月18日	新年会
2月	信大4年生を送る会
3月22日	卒業式&映画鑑賞

### ◇実践から得た「臨床の知」

## 支えられている活動

伊藤香澄（教育実践科学専攻3年）

#### 1. はじめに

4月、図書館の司書である橋渡久美子先生と、今年の活動目的と内容について相談した。この麻績のプラザが始まったのは4年前。これまでの3年間は先輩方と図書館の先生方で土台を築きあげてくれた。年にどれくらい活動するのか、おみ図書館と「YOU 遊世間」でどのように連携をとっていくのか。子どもも図書館での企画に参加することには慣れたというところだった。そこで4年目の今年は、新たな視点をもって活動に取り組もうということになった。



それは、〈子ども・おみ図書館・学生〉という三者が主だったところに、今年は地域の方という新しい風を入れるということである。村の特色として、異年齢の人と関わりたくても、どうしても限られてしまう現実がある。「YOU 遊世間」が活動に参加していることで、学生という年齢層との関わりはある。一方で、高齢者との関わりが少ないようである。地域の方が持っている知恵や技術を子どもたちにも知ってもらいたい。伝統を伝え、受け継ぐ。自分の住む村を知り、自尊心を養い、村に誇りを持って行って欲しい。橋渡先生はこのような願いを口にしていた。そこで今年は、地域の人との関わりを積極的に活動に取り入れることを目標にし、「つながる僕ら」というテーマで活動をしてきた。大人も子どもも共に学び、育て合いたいという願いをもとに今年はチャレンジの年となった。

## 2. たくさんの人に支えられて

### 2-1 学生企画

#### 〈ストーンペインティング〉

この「ストーンペインティング」が今年の学生企画の始まりであった。企画段階から何をしようか迷った。春だったので、できたら外に出て活動をしたいという思いが、図書館の先生方にも、学生にもあった。今までの麻績の活動で、外で活動したことはほとんどない。プラザの特徴として、活動に参加する子どもの人数が当日になってみないとわからないということがある。学生、図書館の運営委員会の方の人数が子どもの人数に見合わない場合も考えられた。子どもたちの安全を心配した。しかし、今年はチャレンジの年ということもあり、思い切って外に出てみることにした。せっかく外に出るのだから、麻績村の自然に触れながら活動をしたい。麻績小学校を少し下ると、麻績川がある。その石を拾いストーンペインティングをするという案が出た。川のどこで活動をするか、どこが危険か事前に下見に行った。その時、たまたま通りかかった村のおじいさんが声をかけて来てくださった。「何をしているんだい」と聞かれたので、活動のことを話すと、川の危ないところ、活動のできそうなところを詳しく教えてくれた。地域の方のアドバイスを頂き、活動場所は決まった。見知らぬ私たちに声をかけ、協力してくれる地域の方の暖かさを実感した。

当日の活動では、安全に配慮しながらケガ一つなく活動ができた。子どもたちの感性は豊かで、はっと驚かされることがある。一人一人の個性あふれる作品ができた。「ストーンペインティングだから、飽きちゃう子も出てくると思っていたが、子どもたちは夢中になっていた。その姿に驚いた」(運営委員会の方)。「学生さんが一人一人の子の個性や特徴を認めてあげていた」(橋渡先生)。活動に関わりたくないという子もいたが、無理矢理やらせず、何かきっかけがあったら一緒に活動に入るという方向で学生スタッフが対応してくれた。学生スタッフに見守られ、その子はその子なりに楽しみ、笑顔を見せていた。活動での子ども様子について、「川で活動したことで、子どもたちの顔がいつもより輝いて見えた。麻績の子どもたちには自然がよく似合う」(H.Y.)、「川で遊びたい子、坂へ行ってしまう子が出たが、学生スタッフが注意したり、一緒についてあげたりと、対応がうまくいけば問題はないと思う」(K.Y.)、「お母さんと一緒に参加していた子は、体中でペインティングを楽しんでいた。お母さんも“あらあ〜”と言いつつ、優しい表情でほほえましかった」(O.S.)、「子どもたちの発想はやっぱり半端でないということを感じた。川にあった大根に絵を描いたり、いろいろな発想がうまれるいい機会だと思った」(T.R.)と振り返っている。

前日までの準備が細かで、参加学生が準備段階から活動できたことが良かった。そして何よりも、学生スタッフが十分な人数集まってくれたことで、子どもたちにケガはなく安全に活動ができた。図書館の運営委員の方も安全に配慮してくださった。川の下見に来たときは、地域の方が危険箇所を教えてくださいました。子どもと一緒に保護者の方も参加してくださいました。多くの協力者がいたからこそ、上記した子どもの姿が見られたのだろう。学生だけでは出来なかったと私は思う。人と人のつながり、多くの人に支えられていると感じた。麻績の人に見守られた活動であった。

#### <ハロウィン>

今年のハロウィンは地域に出て活動をした。目的は地域の方との交流を持つためである。あらかじめ学校の近くに住む高齢者だけのお宅を探し、活動の主旨を説明し、子どもたちにお菓子をあげる役を依頼した。これは、学生が直接麻績村に行っている時間がないため、図書館の運営委員の方々が協力してくださいました。常に私たちを支えてくれている存在がいて、私たちはのびのび活動ができているということを忘れてはいけないと感じる。

当日は多くの子どもが集まり、それぞれ仮装をしてきた。保護者さんの手作りであったり、子ども自身の手作りであった。とても可愛らしく、学生ももっと気合いを入れなければと思う。図書館の方々の仮装も活動を盛り上げてくれていた。

活動の内容は、お菓子をくれたお宅へお礼として渡すメッセージカード作りとお菓子を入れる箱の装飾、そして地域へ出てお菓子をもらいに行くことであった。しかし、約3時間という時間の中でこの活動はハードであった。「限られた時間の中で、何を重視して何を子どもたちがすべきかを具体的にもっと明確にするべきだと思う」(O.S)、「子どもたちと地域の方々の交流がメインの活動なので、その時間をもっと長くとってあげられたら、子どもたちを焦らせてしまうことがなかったのかなと思います。あと30分あったら、もっと余裕をもって動けた」(K.H)という反省を持った。このハロウィンでは、①地域の方との交流の場にしたい、②お菓子をもらうだけではなく、子どもたちからもお礼のものをあげたい、③家に帰って、「今日ハロウィンだったんだよ」と見せられるものが欲しい、という3つの願いがあった。どれも大事なことであるが、全て取り入れたことで時間的に窮屈になってしまった。特に何が大事なのか、今回の活動目的は何かを明確にし、願いが叶えられないことは今回は見送るということにしなければ、どれも中途半端になってしまうと学んだ。また、以前の「ストーンペインティング」とは異なり、準備に参加できる学生が少なかった。そのため、「学生がハロウィンについてもっと詳しく知っておけば良かった。それで、地域の人たちにもわかりやすく説明してあげられたら良かった」(H.Y)、「思ったより地域の方がいろんなことをしてくださいましたので、こちらが準備不足で対応しきれなかった」(H.T)と語る学生がいた。準備段階で、細かいところまで意識統一をしておく必要があった。担当部分はそれぞれあったが、それを全体で共有し、場合分けをし、臨機応変に対応することが大切であった。

地域の方との交流はとても良かったと感じる。協力してくださいましたお家は全部で15軒。活動の前に学生が挨拶しに行くと、とても温かく迎えてくれ、会話も弾んだ。学生スタッフ全員で手分けをして伺ったが、帰ってきた学生から、「楽しみにしてるって言ってくれたよ」、「すごく丁寧で優しかった」という声も聞かれた。さらに、子どもたちがお菓子をもらいに行った時のことを、「地域の方々がとても優しい表情で迎えてくれた。仮装して待っていてくれた方もいた」(O.S)、「協力して頂いたお家の方々も、子どもたちとふれあえるのが嬉しかった様

子で、自ら握手を求めてくれる場面もあった」(T.R)、「なかなか子どもと話したり会ったりしていないの…と言っている方が多かったので、地域交流ができたことは、子どもたちだけでなく、おじいさん、おばあさんにとっても良かったのだと思う」(H.Y)、「これだけの大人が関わってくれるなんて、嬉しい場所だなと感じる。子どもにとっても学生にとっても地域の方にとっても良い刺激になり、温かい気持ちになれた活動だったと思う」(K.H)、「地域の方がいてくれてこそこの今回の活動。このような活動は大切にしたい」(H.T)と語った。家の中に子どもたちをあげてくださり、琴の演奏を聞かせてくださったお宅もあった。お菓子と一緒に家でとれたみかんをくださるお宅もあった。地域の方と交流する子どもたちに対しては、「はじめは恥ずかしそうに緊張していた子どもたちも、2軒・3軒とまわっていくうちに、自分から挨拶などを言うようになっていた」(O.S)と語った。子どもたちの元気なかけ声が小学校の周りのあちらこちらから聞こえた。最初は恥ずかしがっている子どもたちも次第に地域の方と挨拶ができ、お菓子をもらったら、「ありがとう」と言うことができた。地域の方の温かい気持ちにふれることができ、帰って来た子どもたちの顔は綻んでいた。地域交流の大切さを学んだ。

「たくさんの方の支えがあって今日の活動が成り立ったと思う」(Y.J)、「保護者の方々のサポート(誘導・監視など)があって、助かった」(O.A)。たくさんの方の支えられてこの活動は成り立った。協力してくださった、15軒の地域の方々をはじめ、子どもの安全を守るために、地域の中の危険な所に保護者の方がずっと立っていてくださった。図書館の方々も地域に出て、班に入って子どもを見てくださったり、地域を回っていてくださったりした。教育委員長、小学校の先生も仮装をし、子どもたちと一緒に参加してくださった。

子ども・学生・図書館・地域・保護者・学校とさまざまなつながりから生まれる活動であること、恵まれた幸せな環境で活動ができていることに、常に感謝しなければいけないだろう。学生は、活動を通し学ばせてもらっている。活動できる場所があることは当たり前ではなく、貴重なことである。5年目となる来年、さらに人と人とのつながりが深まっていったらいいなと願う。

## 2-2 図書館の企画<昔遊び～麻績の麦～>

学生企画とは別に「昔遊び」という図書館の企画がある。昔遊びの会の方や古遊会の方々が中心となり、子どもたちに伝統的な遊びを教えてください。活動は年に4回程あり、竹馬作りや麦わらで作るかごの作り方などを教えてください。

かごを作るために使う麦は、大麦だという。今はほとんどつくられていない。しかし、昔遊びの方々は子どもたちに、麦わらを使ったかごの作り方を教えるために、わざわざ畑で栽培してくださっている。子どもたちに対する思いの強さを感じる。栽培された麦を6月に子どもたちと一緒に刈った。学生も数名参加させてもらった。子どもたちも学生も麦の刈り方を手取り足取り教わった。ほんの少しの範囲をたくさんの方で刈ったはずなのに、腰は痛くなり、農業の大変さを学んだ。経験してみないとわからないことである。口で言うだけ耳で聞くだけではなく、自らの体を使って経験したからこそ感じるものがある。貴重な場を提供してくれる村の方の存在は、子どもたちにとって非常に大きい。

橋渡先生は、来年度からこの麦をより子どもたちの身近な活動として発展させていきたいと願っている。子どもたちが麦でかごを作るだけではなく、育てる段階から手を入れる。自らが体験することで、その大変さを実感してもらいたい。そして、麦に対する愛情や達成感を味

わって欲しい。地域の方と関わる機会にもなり、また麻績村だからこそできることである。「YOU 遊世間」の関わり方も考え、より多くの人で活動できたら良いと思う。

### 3. Gキッズ

8月に高遠青少年自然の家で2泊3日のキャンプを行った。「G キッズ」にいる子はもちろん、その他に、特別支援学校に通う子どもが数名参加した。お母さんと共に参加する子もいた。キャンプで見た子どもの姿であるが、子どもたちは新しい友だちが増えようと何一つ動じなかった。自然体でいつもの子どもたちのままである。自然に友達を受け入れることができる、麻績の子どもたちの良さだと思った。キャンプでは、川で遊んだり勾玉作りをしたり、プラネタリウム鑑賞などをした。子どもたちを活動に強制的に参加させることはせず、最低限の団体行動をする。自分で何をするか、何をしたいのか、のびのびと活動をしている。多様な子どもたちの中で、学生はかかわり方を学ばせてもらっている。図書館の学生企画では、全体を見ながら多くの子どもたちと関わるが、「G キッズ」では、子ども一人一人と向き合って接することが多い。どちらか一方だけではない、様々な角度から活動に参加できることは嬉しい。多角的に子どもたちを見るからこそ見えてくる子どもの姿はあるはずだ。「G キッズ」との連携も学生にとって感謝すべきつながりである。

### 4. 来年度へ向けて

麻績の活動を振り返ってみると、子どもが主体的に行うものが少ない。学生が、図書館が、村の方がやってくれるから子どもは参加するだけではなく、子どもが計画をし、みんなでやってみるという活動も必要ではないかと感じた。

また、地域へ目を向けた活動がさらにできたらと思う。地域の方とふれあうことも大切だし、麻績村の自然に親しむことも大切だと思う。外での活動は、安全面を注意しなければならないが、子どもたちが自分の体を使って自然とふれあうことができる。さらに、地域に出ることがきっかけとなり、村の人とふれあっていけるだろう。その繰り返しで、子どもたちと村の人が村内で会った時に自然に挨拶できるようになれば素敵だなと思う。

### 5. 終わりに

たくさんの人に支えられ今年の「麻績村 dE 遊ぼう！」は活動をしていくことができた。学生スタッフは自分の時間をさいて準備を手伝ってくれたし、当日の急なお願いにも臨機応変に対応してくれた。学生スタッフがいてくれたからこそ、活動での子どもたちに笑顔が見られたと思う。また、地域の方の協力もとてもありがたかった。気持ちよく引き受けてくれる優しい人がたくさんいた。子どもたちと地域の方がふれあう時、学生とふれあう時とはまた違う子どもの姿が見られた。子どもにとって地域の方とふれあうことは大切なことだと思った。そして、一番支えとなってくださったのが、橋渡先生をはじめとする運営委員会の方々である。学生の至らない点を補ってくださり、常に支えてくれた。活動では衣装や飾りを用意してくれ、一緒に盛り上げてくださった。学生だけではできなかったことも、たくさんの人に支えられてやってくることができた。

活動をするごとに学生スタッフから、図書館の方や地域の方に支えられていたという感想が聞かれる。学生と図書館の連携で始まった活動が今、人と人とのつながりから広がっている。

とてもありがたいことだなと実感する。大勢の方が協力してくれるから学生はのびのびと活動をさせてもらっているし、学ばせてもらっている。そんな麻績村で活動できていることはとても幸せなことだと思う。これまでの麻績村の人とのつながりを大切に、さらに広がってくれることを願う。

#### ◇連携団体からの評価

### 地域・保護者・子どもたちと共に一心待ちの子どもたち—

麻績小学校司書 橋渡久美子

「やっぱ、若い人の力はすごいね。」と、麦の虫かご作りに来てくださった地域の方々。

今年度は以下の2点を大切に活動してきました。

- ・YOU 遊世間のみなさんの活動を地域の方々も交え共に活動していく。
- ・地域へ出て自然にふれる。

このような前提で「昔遊びの麦で虫かご作り」「麦刈り」「ハロウィンを通して地域のご高齢の方々と交流」「おみ図書館寺子屋道場」等にも企画・参加して一緒に活動していただき、活動が広がりました。また、地域にとっても学生さん方の風を入れていただき感謝しております。

\*昔遊びの方々（子どもたちに竹馬・叩きごま作り・麦わらの虫かご作り・お手玉などの遊びを通して子どもたちと交流している）の声

- ・「これからの昔遊びや麦作りなど、子どもたちにとって魅力ある学生さん方と一緒に活動できるといいね。」
- ・「まず、今やっている麦作りを軸にして学生さんと一緒に活動できたらいいね。」
- ・「学生さんの力をお借りして地域おこしができるのではないか。」

\*保護者の声

- ・「学生さんが来てくださるのを楽しみにしています。普段接することの少ない年齢層の学生さんにふれることは、子どもたちが育つ過程でありたいことです。」
- ・「一緒に行事に参加して学生さん方の子どもに対する気配りや暖かさを感じました。」

— 一日誌より 1回目の一部 —

「麻績川へ行き石を拾いストーンペインティング」

- ・R君…素足で川に入りくつをはこうとしない。麻績川はガラスなどがあり、危険なのでサンダルを上流から流し、遊び感覚ではかせることに成功。学生さんやるなあ。すごいぞ。
- \*反省会での話題。引率の形態について。安全の観点から一緒に行動がベストに落ち着く。その話を次の日、教頭にしたところ細かいところまで気を遣って行動していることに感謝の言葉。

このように子どもたちへの心配りや細かい配慮には頭がさがります。また、遠い長野から麻績まで来ていただいていることにも本当に感謝です。

\*来年度の課題

おみ図書館が今年で5年目。子どもたちのためにと、様々な活動を地域の方々・保護者の方々、そして「YOU 遊世間」の方々と共に活動してきましたが、ここで、課題として見えてきたことは、麻績村としてどんな子を育てていきたいのか、そのためにどんな方法で何をしていたらよいか、と原点に返ることでした。そんな時に土井先生より土、自然と関わること

を軸にした活動をご提案いただきました。それをふまえ、「子どもたちが主体的に動く活動・今年度の発展として地域とともに行う活動」（これについては、こちら側の体制を整えることが必要）

来年度は上記の2点を軸にしていくことができれば、と思いますが、いかがでしょうか？ 学生さん方の力をお借りしながら、子どもたちにとってよりよい方向を見いだしていくことを願っています。

## 活動をともにして

麻績村 G-kid's わくわくクラブ代表 石田恵子

学生の皆さんと活動をともにするようになって、もう4年がたちます。4年の間に、多くの学生さんと出会うことができました。これは、私たち保護者だけでなく、子どもたちにとっても大きな「財産」として将来に繋げていってもらえたらいいなと思います。

<活動を振り返って> 今年は、例年より G-kid's わくわくクラブとしての活動は少なかったのですが、どの活動にも積極的に参加して子どもたちに関わって交流を持っていただきました。

中でも、夏に行われる『サマーキャンプ』には今年も多くの学生の皆さんが参加してくださり、「勾玉作り」や「白樺コースター」などを、子どもたちと一緒に体験していただき、2泊3日という中で、それぞれに新たな発見があったり、有意義な時間を送れたと思います。

<これからの活動> G-kid's わくわくクラブ自体は、「障害のあるなしに関わらず、個々の性格・成長・興味などを考慮して、いろいろな体験をし、成長することができたらいいね。」そんな思いから出来ました。五年目を迎えるに当たり、もう一度それらを見直し、子どもたちや私たち保護者もまた、学生さんたちもみんなと一緒に一歩前進できるような、そんな時間を活動の中に取り入れて生きたいと考えています。

<学生さんたちと子どもたち> 学生の皆さんには、日頃、子どもたちと色々と携わって頂いて、とても感謝しております。学生の皆さんは、子どもたちが日常において関わりのある先生・親・友だち等とは、違う関わりの中で、色々な経験をさせて頂き子どもたちにとって、とても良い時間を過ごさせて頂いていると思います。

子どもたちが活動しているところを常に見ているわけではないのですが、一緒に楽しんだり、アドバイスをもらったり、また、指導していただいたりと接する中で、子どもたちはどんどん成長しているように思います。

色々と活動する中で、一年間の大イベントであるキャンプ。キャンプは当然泊まりになります。低学年以下の場合は、親としてはやっぱり心配。でも、帰ってきた子どもたちは、親の心配をよそに、とても楽しかったと大喜びです。それも、学生さんの方々がずっと一緒に行動してくださり、子どもたちと一緒に遊んでくださり、また、目を掛けて頂いたりと本当にお世話になり、安心してキャンプに行かせることが出来ます。子どもたちにとっても、常に一緒に居てくださるので、とても心強く思っていることと思います。

これからも、いろいろな活動を通して、お世話になるかと思えます。子どもたちがますます成長できるように、そして学生の皆さん方とますます交流が深まるように願っております。

## わらの会（3年目）

プラザ長 宮下奈保子（生活科学教育専攻3年）

### ○学生スタッフ名

大家恵理子（社4） 小林良太郎（数3） 三浦 沙織（生3） 村上 侑（生3）  
山岸 亜矢（生3） 鈴木 梢（理2）

### ○参加者数 子ども4名 地域協力者2名 学生7名

### ○連携団体 NPO 法人「どれみクラブ」

地域協力者 セラピスト 島田友美子 ピアニスト 西沢泉

### ○プラザの概要

「わらの会」とは NPO 法人が行っている「どれみクラブ」の別称である。この会は障害を持つ子どもの母親が中心となって結成されたものである。月1回・第三土曜日を活動日として設定し、長野市の障害者福祉センターで活動を行っている。活動内容は、音楽療法を中心に、セラピストの島田先生、ピアニストの西沢先生に決定していただき、学生は会に参加する4人の子どものサポートをしている。約1時間の活動の中で、音楽に合わせて体を動かしたり、声を出したり、楽器を演奏したりという音楽を用いたセッションから、体ほぐしや運動など、幅広い内容で行っている。また、学生による演奏や手遊び、紙芝居を行うこともある。少人数での活動のため、子どもと学生が1対1で関わることのできる点が特徴である。

### ○一年間の活動

活動日	活動内容	活動場所
4月19日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
5月17日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
6月21日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
7月19日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
9月6日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
10月11日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
11月15日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
12月20日	音楽療法	長野市障害者福祉センター
12月23日	発表会	サンアップル
1月17日	音楽療法	長野市障害者福祉センター

### ◇実践から得た「臨床の知」

## コミュニケーション・連携・環境・音楽

宮下奈保子（生活科学教育専攻3年）

### 1. はじめに

私が「わらの会」に初めて参加したのは、昨年11月のことである。「YOU 遊フェスティバル」で、障害を持つ子どもを対象とした講座に参加することになったのがきっかけだった。その講座は、昨年度の「わらの会」のプラザ長である大家さんが講座長を務めていた。ハンド

ベルの活動の企画案を書く役割を与えられた私は、一度「わらの会」に参加し、音楽療法を見ておきたいと考えたのである。初めての「わらの会」で感じたことは、子どもと活動することの楽しさと、それ以上の、支援の難しさ、大変さであった。それでも、私が「わらの会」を引き継ごうと思ったのは、子どもが見せてくれた笑顔がもう一度見たいと感じたからである。

昨年度の活動の中で、子どもの笑顔が一番輝いていたのは、太鼓が上手く叩けたとき、クイズに正解したときなど、「何かができるようになったとき」であると感じた。また、自分ができるようになったことだけでなく、友達ができるようになったことを一緒に喜ぶという姿も見られた。そこで、セラピストの島田先生と相談し、本年度のテーマを次のように考えた。「自分ができるようになったことを周りに伝え、周りのみんなができるようになったことを知り、みんなで喜びを分かち合おう!」。そして、このテーマを支えるために、学生の目標を「子どもができるようになったことに気づき、伝え、成長を喜び合うと共に、自分なりの子どもとの関わり方を見つけよう」と設定し、本年度の活動を行った。

ここでは、活動内容の紹介と、「わらの会」を通して学んだことを、「コミュニケーション」「連携」「環境」「音楽」という4つの視点から述べたいと思う。

## 2. 活動内容

本年度は、音楽療法を中心に、体を動かす、演奏する、声を出す、歌う、聴くなどの活動を子どもたちと共に行った。音楽療法では、島田先生、西沢先生がプログラムを考え、クワイヤーホーンやミュージックベルなど様々な楽器を使って演奏したり、歌に合わせてお買い物をしたりと、楽しい活動をした。また、本年度は音楽と物語を組み合わせとして、「ももたろう」を歌いながら演じるなどの活動を取り入れた。年度の後半は12月に行われた音楽会での発表に向けて練習をした。学生の活動としては、ギターやブルースハープなど、普段子どもたちが触れる機会の少ない楽器の演奏を何度か行った。また、「ももたろう」の紙芝居を読んだり、冬には体を温めるための手遊びを考えたりなど、プログラムに余裕のあるときは学生が前に立って活動することもあった。これらの活動を通して、子どもたちが音楽とふれあい、音楽を楽しむことによって何かを感じ、表現し、それを共有していく様子が見られたと感じている。

## 3. コミュニケーション

活動を行う上で重点を置いたのは、コミュニケーションを取ることである。今年のテーマでは、子ども同士のコミュニケーションが増えることを願い、また、参加する学生は、子どもとコミュニケーションを取ることが第一の目標であった。このように、子ども同士のコミュニケーションと学生と子どものコミュニケーションが重要なものと考えられた。

### 3-1. 子ども同士のコミュニケーション

本年度掲げた「周りとの喜びを分かち合う」というテーマで子どもたちの様子を振り返ってみると、一人ひとりの子どもに、その様子が見られたと感じている。ある子どもは、お買い物をして、保護者の方に渡すという活動ができた友達の様子を見て、学生とハイタッチをして喜んでいった。またある子どもは、友達の近況報告に「すごいね!」と声をかけていた。4人の子どもが、表情や、言葉、声、ジェスチャーなどの様々な表現方法で、友達のできたことを喜んでい姿が見られた。子どもたちがお互いに気持ちを共有している姿を間近で見ることができて、とても嬉しかった。



また、本年度の活動の中で特に印象深かったのは、子ども同士がお互いを気にして声を掛けることが、より多くなったと感じたことである。学生の人数が少なく、1対1で子どもの支援ができなかった時には、活動が始まると、「〇〇ちゃん、行こう！」と周りの友達に声をかける様子や、欠席の子どもが居るときには、その子どものイスを指差して声を出す様子など、子どもと支援者という関係ではなく、子どもと子ども、という関係がより強くなった1年であったと感じる。よって、初めは学生数が少ないことに焦り、1対1で支援できるように人数を集めなくてはならないという義務感を感じていたが、子どもたちの様子を見て、支援者が少ない場合であっても十分に活動ができるようになっていくことを知った。今までの方法を受け継いでいだけでなく、子どもの変化に寄り添い、常に支援の形も考え、変えていかなくてはならないということ学んだ。

### 3-2. 学生と子どものコミュニケーション

活動の中で、意思表示の方法や感情表現の仕方は、ある子どもは顔の表情で、ある子どもは手を叩いたり、声や視線の高さで表現したりと、4人の子どもがそれぞれに自分の方法を持っていると感じた。話し言葉がなくても、その子どもなりの表現があり、こちらがそれを受け止め、感じていくことができれば、コミュニケーションを取ることができ、多くの感情を共有することが可能であるということ学んだ。初めて参加した日に1人の子どもを担当し、その子どもに寄り添い同じ行動を共にすることで、「楽しい」「難しい」「わからない」「嬉しい」という子どもの気持ちが伝わってきたということは、毎回の活動でも常に経験したことであった。一緒に歩いたり走ったり、手を動かしたり、視線を合わせたり笑い合ったりと、言葉を使わなくても体の動きでこれだけコミュニケーションがとれるという驚きは、実際に活動して初めて知ることができたものであった。

そして、更にコミュニケーションを充実させていくためには、子どもとの継続的な関わりが必要であると感じた。継続的に関わり、どのような時にどういう行動や表情をしていたかを見ていくことで、今子どもが何を伝えたいのかということがもっとわかっていけるのではと考えていた。そして、活動の中で、「みんなの輪に入りたい」という気持ちを手の動きや表情の変化から感じたり、不安な気持ちを行動で見たりと、子どもたちの感情表現を知る機会が幾度もあった。最近の活動では、ようやく子どもたちが伝えたいことをすぐに感じたり、感情を共有できるようになったりと、学生と子どものコミュニケーションの幅が広がってきたと感じている。また、継続的な関わりの中で、子どものことを徐々に知っていくことが、コミュニケーションのために重要であることを学んだ。「支援者の身に付けている時計や被服製品に興味を持っているような仕草をしたと感じたので、子どもに貸して、身に付けてあげると笑った。お笑いやおしゃれがコミュニケーションの切り口となることを感じた。」(山岸亜矢)子どもの好きなもの、はまっているものを知り、それを共通の話題として共有することで、学生も子どももお互いに、より距離が縮まったと感じるのではないかと思う。しかし、約1年の活動を終えてもまだ、一人ひとりの子どもが伝えたいことを、より深く正確に理解するためには、時間が足りていない。「活動を通してもっと子どもたちの日常の様子も知りたいと感じることが多かった。」(山岸亜矢)というように、まだまだ子どものことを知ることができたとは言えず、もっと多くの時間が必要であると感じている。

一方で、初めて参加する学生にとっては、子どもとどういふ風にコミュニケーションを取ろうかという戸惑いがあり、不安を感じていたようであった。しかし、子どもたちは初めて会っ

た学生に自ら寄って行き、握手をしたり、ハイタッチをしたり、頷いたりなどして、学生を歓迎してくれた。子どもたちによって、学生の不安が消える様子を見て、子どもの持っている力はすごいなと改めて感じた。初めて接する子どもに対して、どのように接したらよいのか分からないという不安な気持ちがあっても、構えず、自然に、まずは子どもたちと会ってみることに始めることも良いのではと思った。

#### 4. 連携

活動を通して、支援者間での情報交換や話し合いには、大きく二つの意味があると感じた。一つは活動においてよりスムーズに支援を行うため情報を共有することであり、もう一つは、子どもを捉える視点というものは支援者の数だけあるということを知り、子どもの様々な面を見ることで、よりよい支援を考えることができるためである。そこで、活動する中で、支援者間の連携の重要性を強く感じたため、情報を交換したり、話し合ったりする機会を多くとるように心がけた。そこから得た学びはとても大きかったと感じている。

##### 4-1. 学生の連携

「わらの会」に参加する学生の多くは、特別支援教育を専門とする専攻ではないが、それぞれが特別支援教育に大きな関心を持っている。しかし、初めの頃はまだ障害を持つ子どもと関わった経験が少なく、手探りで支援を考えていた。とにかくまずは子どもたちと会って、それから考えようというところからスタートした。そのため、学生の目標の中に「自分なりの子どもとの関わり方を見つける」という言葉を含めた。

そして、それぞれが活動の中で感じた悩みや葛藤を話し、共有し、どうしたらよいかを考え、それを次の活動に生かすために話し合うことで、自分なりの子どもとの関わり方を探ることができたと感じている。話し合う中で、自分と同じことを感じていたり、違う考えを持っていたりする仲間がいることにより、様々な支援の形を考えることができた。例えば、活動を重ねていく中で、支援に関して大きく考え方が変わった点があった。それは、学生一人に子ども一人を決めて1対1で関わるという時間を、少なくしていこうということである。活動に入る前に誰を担当するかを決めるが、活動中においては、全体を見て、支援が必要だと感じた学生が、その子どもに支援を行っていくようにした。それは、前述したように、子ども同士の関わりが多くなってきた中で、ある特定の学生がつきっきりという状態は、子ども同士の関わりを妨げてしまう可能性があるという点で、望ましくないのでは、と考えたためである。また、この活動の中で、学生が行うことができる支援の中で最も必要とされている支援とは、どのようなものかという点において、子どもの補助という役割ではなく、一人の参加者として一緒に会を楽しむということである、という考えを共有した。それと同時に、1対1の時間を短くしていくという支援の方向を取り入れていった。そのため、子どもだけが楽器を持ち学生が横で補助するという支援から、学生も楽器を持って一緒に演奏を楽しむ、という支援に変化してきたと感じている。

##### 4-2. 先生方、保護者の方々との連携

1回のセッションは1時間という限られた時間の中で行われる。その中で、充実した活動内容をすべて行うには、先生と学生が共通の認識を持ち、効率の良いサポートをしなければならない。特に、楽器を多く使う場面では、その準備や片付けをすばやく行う必要がある。初めは、時間内におさめるためにという意識で行っていたが、活動を通し、ここには、子どもの集中を

途切れさせないというもう一つの意味があることを知った。それは、一度楽器を把握していなかったことから準備が遅くなってしまったときであった。ずっと音がなっていた状態から急に音が無くなり、子どもが戸惑っていたり、他のものに手を出してしまったりという様子が見られたのである。そのときは、先生方が歌やピアノを弾くなどして対処してくださり、その後の活動もスムーズに続けることができたが、せっかく続いていた集中が途切れそうになってしまったことは、その回において大きな反省点であった。それ以降は、活動前のプログラムの確認や、使用する楽器の把握、事前確認をできるだけ行うようにし、先生とも多く連絡を取り合うようになった。また、今の状態になるまでにどのような支援をしてきたのか、どのような経緯をたどってきたのかなど、昔の子どもの様子をお聞きすることで、子どもに合った支援を考えるための手がかりを与えていただいた。

また、保護者の方と話をする時間も、大切な情報交換の場となった。「どの様にコミュニケーションを取ったらいいのかと思っていたが、あるお笑い芸人に夢中であることを保護者の方からお聞きし、そのお笑い芸人の真似をしたところ子どもが大変喜んでくれたことが嬉しかった。」(山岸亜矢) 子どもの今を一番知っている保護者の方からお話を聞くということは、コミュニケーションの手がかりになるだけでなく、プログラムに反映したり、その日の活動での支援に反映させることができたりと、とても貴重なことであった。

## 5. 環境

活動の中で、場所や人数など、環境の変化が子どもに大きな影響を与える様子を知ることができた。そのため、環境が支援を考える上でとても重要であることを学んだ。

### 5-1. 活動の場所

「わらの会」は長野市障害者福祉センターの一室で行っているが、センターには、広い部屋と狭い部屋があり、通常広い部屋で行っているが、活動日によっては狭い部屋で活動することもあった。狭い部屋では、子どもの動ける範囲が二分の一程度になってしまい、部屋のレイアウトや、物の入れ替えによって、スペースを確保していた。しかし、やはり広い部屋の方が、のびのびと動くことが可能な様子が見られた。

冬には一度、体育館で活動したこともあった。体育館という通常より広く開放的な場所での活動は、子どもたちにとっても新鮮で、いつもよりはしゃいでいる様子が見られた。一方で、体育館には部屋に無い器具などが置いてあり、走り回ってぶつかる危険があると考え、いつもより気を配る必要があった。先生が、活動の場を仕切りで決めたため、セッション中に危険は無かったが、始まる前、終わった後を特に気をつけるようにした。バランスボールを手にして楽しそうに投げたり跳ねたりする様子を見て、いつもと違う場所や、広い場所では子どもの気持ちは高揚するのかなと感じた。安全への配慮や、必要に応じて場を区切ることが大切であるということ学んだ。

また、本年度は、12月に行われた「にこにこ音楽会」に参加することになった。「にこにこ音楽会」は長野市や千曲市で音楽療法の会に参加している子どもたちが集まり、発表するという音楽会であった。活動を大きな会場で、大人数の前で発表するという機会は子どもたちにとってほぼ初めてであり、状況の変化が子どもたちに与える影響に不安を感じていた。本番前は不安で落ち着くことができない子どもの様子を見ることもあったが、ステージでは、いつも通りのセッションを行うことができた。いつもと違う場所という不安を、保護者の方が傍に居

たり、ステージ上にいつもの様にイスを並べたり、という周りの人の支援があれば、軽減できるのだなと感じた。

## 5-2. 人数・性別

学生の参加人数は、多いときには5人、少ないときには1人での参加であった。人数が多いと、それだけ会話も増え、会が賑やかになり、楽しい雰囲気でも活動することができた。子どもたちも、いつもとなりに1人学生が居ることで、頻繁に感じたことを伝えている様子が見られた。また、人数の少ないときには、会は落ち着いた雰囲気であった。そして、学生が隣に居ないことで、子どもの感じたことの表現が友だちに向けられ、子ども同士の関わりが多く見られた。多いとき、少ないとき、それぞれに良さがあり、支援者の人数も、支援の内容によって考える必要があると感じた。

また、支援者が女性か男性かということも、子どもたちに影響を与えると感じた。特に男の子は、男性の支援者に楽しそうにじゃれ合う姿が見られ、支援者の性別も、できるだけ偏らないように出来たら良いなと感じた。

## 6. 音楽

この活動の一番の特徴は、障害を持つ子どもと活動するだけでなく、そこに常に音楽という存在があることだ。そして、「わらの会」に参加したことによって、子どもに与える音楽の大きさを知ることができたと感じている。音楽を体いっぱい表現する、自分の好きな音楽がかかると表情が変わり、より大きな声で歌う、ゆったりとした音楽を聴くとリラックスする、そんな子どもたちの様子を見て、音楽がとても好きなのだなと感じた。「みんなで輪になって歌いながら歩く活動があったが、子どもたちは楽しそうに歌っていたし、私も楽しかった。音楽に合わせて体を自由に動かし、音楽を身体全体で楽しむことが好きだということがわかった。」(村上侑) というように、音楽を通して、子どもと支援者が同じ気持ちを共有することができた。音楽が心に与える影響の大きさを何度も感じた活動であった。

また、「いろいろな方法で音楽に触れることで、子どもも私たちも緊張がほどけた気がした。」(鈴木梢)「何を話せばいいか悩んでしまうこともあったが、音楽を通してだと話しやすかった。」(村上侑)と、初めて「わらの会」に参加する学生にとっても、音楽が子どもとの距離を縮める効果を持っていたことが伺える。

ある音楽を聞くとある情景を思い出すことがあるように、この活動も、子どもたちの心に、音楽と一緒に残る活動になってくれたらいいなと思う。音楽療法についての知識が不十分であり、活動の意図を十分に把握できていない部分もあったのではという反省もあるが、音楽を介して子どもたちの心に与えられる影響の大きさを実感できた活動であった。

## 7. おわりに

活動を終えていつも感じられたことは、「楽しかった」ということであった。毎月、子どもたちの笑顔から、たくさんの元気をもらっていた。「わらの会」のプラザ長として、多くの方に支えられて1年間、活動を行うことができた。活動内容のことから、日常のことまで相談にのって下さった、島田先生、西沢先生をはじめ、毎月のセッション前に必ずメールをくださったり、子どもの様子をお話して下さったり、学生の身をいつも気にして下さった保護者の方々、楽器の演奏をしてくれたり、常に相談にのってくれる友人が居て、この活動が成り立っ

ていることを強く感じた。お世話になった方々に、心からお礼を述べたい。

「わらの会」の活動を通して知ったこと、感じたことのすべてが学びになったと思う。この活動で得たものは大きく、これからの学びに生かしていくことができると感じている。

#### ◇連携団体からの評価

### 「どれみクラブ—わらの会」 信州大学教育学部生によるサポート

長野音楽療法研究会 セラピスト 島田友美子

#### 1. 概略

この会は 2002 年頃、長野養護学校の保護者会から立ち上がり、現在に至ります。多勢のお母さんたちの力で成立しました。当初からセラピーの間、対象児と共に動いてセッションを楽しくスムーズに行うことを目的とした補佐（サポート）を信州大学教育学部の学生諸氏にお願いしました。

#### 2. 今年度の補佐の内容

学生諸氏も対象児に慣れて下さり、今までのように対象児の後方から付いていくことがほとんどなくなり、状況に応じて前や横について下さり、ポイントがはっきりしていた。また、学生諸氏が自らギター、ミュージックベル等を演奏して下さり、ミニコンサートが復活してきた。すぐ目の前で生演奏が聴けることは有意義である。対象児はギターが聴ける場面では近くに寄り、誰もが集中して聴く。物音ひとつ立てずに聴く姿勢を身に付けていた。この様子から、対象児 4 名は聴覚から正しく耳に入っており、脳内の 43 野、46 野、47 野の血流が聴いた直後から活発になる（実際に実験はまだしていない。予想の範囲を超えないが）。

#### 3. 子どもたちの様子

彼ら 4 名の前頭葉は直後から直ちに刺激を受けている様子が見られる。前頭葉の刺激が側頭葉へと貯えられて、すぐそばで身体を使って演奏している人間から「感動」を受ける。その後精神を動かす「情緒的な部分を司る神経系統」が「芸術」に対するいい気持ち、うれしいが成長過程（12 歳～17 歳位）の対象児に「精神的な落ちつき」を与えるようになる。

どれみクラブのセッションがスタートして以来、7 年以上が経過して、皆一人ひとり成長し、当初 7 歳位の対象児は泣いてばかりいるとか、外へ飛び出してしまう等の特性が見られ、補佐も危険回避だけでも大変であったと思う。成長と共に 4 名の年齢差も良い影響を及ぼしている。メンバーの弟が生まれ、姉になった効果が見られて、セッションの時も弟が参加するようになり、兄や姉のようなまなざしが見られる。

#### 4. クリスマス音楽会

使用楽器—クワイヤーホーン・鈴・ミュージックベル・太鼓—4 つの楽器を各々の 4 曲「崖の上のポニョ・スーパーマリオブラザーズ・ギロップン・小さな世界」で楽器を持ち換えて演奏できたことは、補佐の素晴らしい配慮と共に、対象児の積んできた糧であると考えます。今後もこのシステムを続けて頂きたいと願っています。

# 信州すざか農業小学校豊丘校（3年目）

プラザ長 一條 まな（言語教育専攻3年）  
副プラザ長 菊地ゆかり（言語教育専攻3年）  
宮川 志織（言語教育専攻3年）

## ○学生スタッフ名

一條 まな（言3）	菊地ゆかり（言3）	宮川 志織（言3）	市原 美里（地4）
井出 陽子（生4）	鈴木 亮子（生4）	田村 弘樹（言4）	藤岡 泰裕（実4）
細田 有希（生4）	山崎 友美（生4）	半田 裕（工3）	笠井 悠太（理3）
神林 朋美（言3）	高池 亮輔（保3）	原 耕平（理3）	島田英一郎（理2）
鈴木 梢（理2）	滝沢雄太郎（理2）	西澤 直城（理2）	

## ○参加者数

子ども 61名（須坂市の児童） 地域協力者 23名 保護者 20～30人

## ○連携団体

須坂市教育委員会 信州すざか農業小学校豊丘校

## ○プラザの概要

- (1)子どもたちの健やかな成長に欠かせない自然・体験活動不足の現状を考慮し、子どもたちがたくましい精神力・想像力等を身に付けることを願い、総合的・自主的な体験活動の場として、年間を通した農業小学校を開設する。
- (2)子どもたちが、異年齢の子どもたちや保護者、地域の大人（主に高齢者）と触れ合うことにより、相互の仲間づくりや地域連帯感を養うとともに、地域の文化に触れることにより、ふるさと須坂の良さを再発見する手助けをする。

（信州すざか農業小学校豊丘校開設要領より抜粋）

という趣旨のもと、須坂市豊丘「そのさとホール」及び豊丘地域公民館、農地（田及び畑併せて1,800平方メートル）で活動が行われている。年間活動は、農家先生と呼ばれる須坂の農家の方々と須坂市役所の方によって決められている。「YOU 遊世間」との関わりは今年で3年目となる。学生は、農家先生と子どもたちをつなぐ役目として、子どもとともに学び、遊び、農家先生の手伝いをしたりと、活動に参加している。今年から須坂園芸高校の生徒も参加をするようになり、さらに異年齢交流の幅が広がった。

## ○一年間の活動

月 日	授 業 内 容	
4月20日(日)	農業小学校で友だちをいっぱいつくろう ～これから1年よろしくね～ 畑の授業もはじめよう！	・入学式 ・オリエンテーション ・ジャガイモの植付け
5月10日(土)	野菜を植えて育てよう！	・トウモロコシ、ネギの植付け ・畑の手入れ
5月24日(土)	ドロンコになって田植えをしよう！	・田植え
6月7日(土)	サツマイモは苗を植えてから芽が出るんだ！	・サツマイモ苗の植付け ・畑の手入れ
6月28日(土)	れんげつつじの五味池で、わらび狩りと焼肉パーティーをしよう	・夏の遠足(五味池探索)

7月19日(土)	こんなにたくさん取れたよ。～ジャガイモ蒸かして食べてみよう～	・ジャガイモの収穫 ・ネギ畑の草取り ・麦の刈り取り
8月2日(土)	そばの実ってこんな形をしていたの？	・そばの種まき ・トウモロコシの収穫
8月23日(土)	おやき作りは楽しいよ！伝統行事を学ぼう！	・おやきづくり ・大根の種まき ・御射山祭の伝統行事を学ぶ (小豆飯をカヤの箸で食べる)
9月6日(土)	こんなに小さい種なの？	・秋の野菜(白菜や野沢菜など)の種まき
9月23日(祝)	稲の穂が実ったかな？	・稲刈り
10月4日(土)	こんなにお米が取れたよ！米もそばもでき具合はどうか？	・稲の脱穀 ・そばの刈り取り
10月18日(土)	収穫はたのしいな これがそばになるんだネ	・サツマイモの収穫 ・そばの脱穀
11月1日(土)	豊丘の地域を散策しよう 小麦はいつ収穫できるの？	・秋の遠足(豊丘離山等) ・小麦の種まき
11月15日(土)	おいしい焼いもと 「ひんのべ」で収穫祭だ！！	・野菜の収穫 ・焼いも大会 ・ひんのべ交流会
12月6日(土)	そば打ちをして食べよう！～そばを打つのは大変だ～	・そば打ち体験
12月20日(土)	「ペッタン ペッタン」もちをつこう！～収穫したお米でもちつきだ～	・もちつき大会
1月10日(土)	米の粉でまゆだまを作ってみよう！～形もいろいろむずかしいよ～	・ものづくり ・どんど焼
2月14日(土)	もう卒業なの。さみしいネ！ ～ありがとうございました～	・卒業式

◇実践から得た「臨床の知」

## 農業と異年齢交流の場

一條まな(言語教育専攻3年)

### 1. 子どもの実態

1年間「信州すざか農業小学校豊丘校」に通ってきた子どもたちがどのようなことを感じたのか、「信州すざか農業小学校豊丘校開設」の趣旨を感じ取ることができたのかを調べるために、アンケートを実施した。(12月20日もちつきの活動の際に行い、40名が回答)

#### ・アンケート内容

- ① 一番心に残っている活動
- ② 野菜についてよく知れた？ はい・いいえ
- ③ 学校で知れなかったことが農業小で知れた？ はい・いいえ
- ④ 農家先生と仲良くなれた？ はい・いいえ
- ⑤ お兄さん、お姉さんと仲良くなれた？ はい・いいえ
- ⑥ 須坂について前よりよく知ることができた？ はい・いいえ
- ⑦ 来年もまた来たい？ はい・いいえ

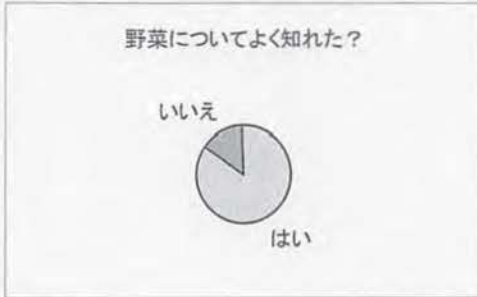
\*①については自由記述、②～⑦は はい・いいえ の選択制にした。

・アンケート結果と考察

① 一番心に残っている活動

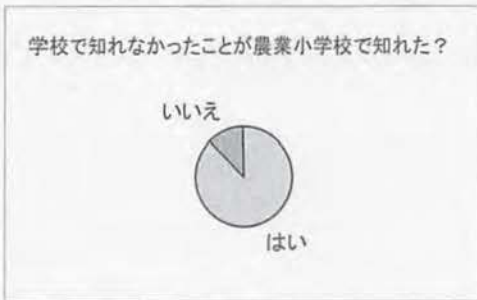
おもちつき 19名 野菜の収穫 7名 田植え 5名 山登り 3名  
 食べること（おやつ、焼いも） 2名  
 全部／そば打ち／遊んだこと／野菜の実り方がわかったこと／なし 各1名

② 野菜についてよく知れた？



＜考察＞ 39名中33名が「はい」と答えた。農家先生の説明のほか、野菜の植付けや、収穫の前に須坂園芸高校の生徒が野菜の育ち方について説明したり、信大の学生がクイズを出したりしたことによって子どもたちの興味に働きかけ、子どもたちが野菜について知るきっかけになったのだと思う。

③ 学校で知れなかったことが農業小学校で知れた？



＜考察＞ 39名中34名が「はい」と答えた。農業に関する知識のほかに、おやき作りや御射山祭、そば打ちなどを通し、伝統文化なども学べたと思う。また、普段とは違う環境の中で、新しい友達を作ったり、農家先生や学生などに関わることで、人間関係を築くことも学んだのではないか。

④ 農家先生と仲良くなれた？



＜考察＞ 40名中32名が「はい」と答えた。前年に比べると農家先生と子どもの距離は近くなったように感じる。稲の脱穀の際に農家先生が子どもにしめ縄の作り方を教えている様子もあった。今後は、農家先生が昔の遊びを教える授業などがあれば、より関わりが増えるのではないだろうか。

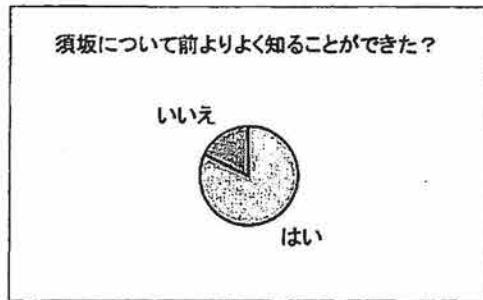
⑤ お兄さん、お姉さんと仲良くなれた？



＜考察＞ 40名中35名が「はい」と答えた。子どもたちは、農家先生よりも学生（信大生、須坂園芸高校の生徒）の方が距離を近く感じているようだ。しかし、異年齢交流をひとつの目的としているすざか農業小学校では、農家先生と学生、子どもの距離感に差がなくなることが理想だ。



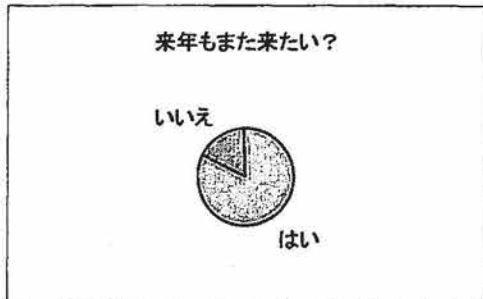
⑥ 須坂について前よりよく知ることができた？



<考察> 38名中31名が「はい」と答えた。

①の質問で、遠足と答えていた子どもがいることから、須坂や、豊丘地区に対する興味があると予想される。しかし、ふるさとについて知る授業があまりなかったためか「いいえ」と答えた子どももいた。普段の農作業の授業にもふるさとの情報を盛り込むことで、もっと子どもたちが興味を持つのではないか。

⑦ 来年もまた来たい？



<考察> 39名中32名が「はい」と答えた。また、「いいえ」と答えた子どもの中には来年中学生になるために参加できないという理由を持った子がいたことからほとんどの子どもが来年も参加したいと考えていることがわかった。

## 2. 学生スタッフの感想・反省

### (1) 農業小学校を通して学んだこと

私たちは、今年から農業小学校に参加する中でたくさんのことを学びました。

一つ目は、小学生がどんなことにも興味を持っていて、積極的だということです。野菜などはもちろんですが、畑にいる虫や道端の花など普段は見逃しがちな物を見つけては私たちにを見せてくれ、新しい発見になりました。二つ目は、小学生だけでなく、農家先生や保護者の方、信大のみなさんと交流する中で人との接し方を学ぶとともに世代を超えた交流の大切さを改めて実感しました。また、農業小学校は私たちが高校で学んでいることを生かせる充実した場所になりました。それだけでなく、学校で勉強した方法とは違ったやり方で栽培するものもあり、とても勉強になりました。

来年度も小学生に農業の楽しさや魅力を教えていき、私たちがたくさんのことを学びたいと思います。信大のみなさんとも親睦を深め、合同で発表ができればと思っています。

(須坂園芸高校野菜クラブ 小林竜也、北村珠巳、小布施美奈、掛川梢、藤沢明日香、松田茜)

### (2) 思わぬ収穫

1年間、すざか農業小学校の活動に参加し、子どもたちと共に、農業や伝統料理に関わることができた。この活動を振り返ると、自然と色々な笑顔が頭に浮かぶ。子どもたちの笑顔、農家先生の笑顔、市役所の方の笑顔、保護者の笑顔、須坂園芸高校の高校生の笑顔、そして信州大学の学生の笑顔。すざか農業小は、たくさんの笑顔があふれた温かい場所だと思う。この農業小で、「人と人とのつながり」を強く感じた。正直、入学式のときは、緊張、期待、不安など、さまざまな感情が体育館中にあふれていて、ぎこちない雰囲気はただよっていると感じていた。初めてすざか農業小の活動に参加する私は、これからどうなっていくのか、まったく想像がつかなかった。しかし、回を重ねていくごとに、子どもと子どもが友達となり、子どもと大人(学生含む)の距離が近くなっていき、大人同士がつながり支えあい、ひとつになって

きた。農業を伝えたい、伝統料理を伝えたい、その地域の人々の願いが、「つながる」ことで達成できたと思う。人と人との「つながり」がどんなに大切なものなのか、なにかを「伝えたい」と願うことを達成することがどんなにすばらしいことなのか、このすざか農業小学校の活動の中で気づくことができた。作物だけでなく、収穫できたものがたくさんあった。この活動に参加してよかったと、心から思える。  
(菊地ゆかり)

### (3) 信州すざか農業小学校で学んだこと

私が今年1年間すざか農業小学校で学んだことは、子どもの純粋さと、学生として私たちができることです。

まず、「すざか」の活動に参加して最初に感じたのが、子たちがかわいいことです。月2回というたまにしか会うことのできない私たちに、子どもたちは最高の笑顔で接してくれました。田んぼのすみにいる虫を一生懸命さがして見せてくれる姿、大きなお芋を夢中になって掘る姿、ちょっとめんどくさそうな様子、楽しそうに遊ぶ姿……。毎回の活動を、純粋で明るい子どもたちと同じ視点になって、精一杯楽しむことができました。また、須坂園芸高校のみなさんが一緒に活動するようになってから、信大生の立場をしっかりと考えることができました。1年間の活動を振り返って、「農家先生と子どもたちの架け橋」が一番の役割だと感じています。子どもと同じ目線にたって一緒に遊べて、しかも農家先生たちとは大人として接することができる私たちだからこそ、架け橋になることができるのではないかと思います。農作業だけでなく、昔の遊びなどもっともっといろいろな知識を農家先生が子どもたちに伝えられるような場から、私たちが架け橋になれたらいいと思います。1年間、とても貴重な経験になりました。ありがとうございました。  
(宮川志織)

### (4) 信州すざか農業小学校の感想

すざか農業小学校の活動に参加して、こどもが楽しく意気込んで農業している姿をみられたことが一番楽しかったです。また、農家先生や、須坂園芸の高校生、保護者のみなさんとのふれあいもとても貴重な体験でした。ありがとうございました。  
(井出陽子)

農業・ひととの関わり方は子どもによって様々ですが、畑という1つのステージで、人と接すること、夢中になること、食の実態を知ること、農業を知ることなど多くの経験ができ、楽しい思い出ができます。なにか1つでも感じたり変わったりするきっかけとなる可能性のある素敵な活動だと、つくづく思います。今後は班内のコミュニケーションが増えれば、人との関わりがさらに良くなると思います。

また、農家先生から見習いたい点が2つあります。1つ目は、注意をするときに厳しさを出すことです。2つ目は、活動日以外などの裏方の仕事をきちんとしてくださることです。子どもたちに楽しんでもらいたい、すざか農業小学校をよりよい活動にしたいという想いがあるからこそできることと思います。子どもたちが農家先生の作業の様子や、おやつ作りの様子を知ることのできる時間を設けたら良いと思います。

今年度から高校生が加わり、より活動が活性化され、質が高まったと思います。畑に移る前に、その日にやる作物や作業についてのレクチャーは、丁寧に準備され、説得力の高さを感じます。信大生も今年は積極的にそういったことをやって、向上させようという姿が見られました。子どもの持つ大人以上に楽しむ力を生かすために、どのように接し、援助をするのかが私たち学生として大切なことだと思います。

最後に、学生という立場から、ここまでいろんな人と関われるのはすざか農業小学校ならで

はないかと感じます。子どもはもとより、農家先生のおじいさんおばあさん、保護者の方々、役所の方々、高校生。色々と学ばせてもらうことばかりだし、超デカイ家族みたいで好きです。

(田村弘樹)

学生1人ひとりのやることを自覚できた1年でした。今年から参加することになった園芸高校の生徒たちが参加することで、自分たちは何のために参加しているのか、また、どういう関わり方をすればいいのかを今まで以上に考える年になったと思います。それにより、自分がただただ活動に参加していたということを痛感しました。

すざか農業小学校では、周囲の人たちとのコミュニケーションからの学び、学生スタッフの優しい関わり方が伝わってきました。「こっち行こう」「ね～、見て!」「遊ぼう」という言葉に笑顔で答え、「何して遊ぶ?」と答える学生の姿があり、アクティブに関わる学生の力強さを感じました。また、農家先生からは野菜の活用法・伝統を教えてもらうことができました。今年は、須坂園芸高校とすざか農業小学校がつながりました。今後も、他の機関と連携があるかもしれません。これからのすざか農業小学校の発展に期待しています。

(藤岡泰裕)

今年度は、新しく須坂園芸高校の生徒が活動に参加し、プラザが大きく前進した一年だと感じる。当初、須坂園芸高校の生徒が活動に加わることで、どのように連携していけばよいのか不安な面もあった。しかし、お互いの学校を行き来し連携を上手くとることによりその不安は解消された。普段の活動でも連携が徐々に取れてきているように思う。そばの刈り取りの活動で、刈り取ったそばの束ね方が分からない子どもがいた。その子どもは、私に刈り取ったそばの束ね方を聞いてきた。私も分からなかったため、近くにいた須坂園芸高校の生徒にたずねた。すると、丁寧に教えてくれた。農業を媒介にして、人と人のつながりができた瞬間であった。

このように、農業は、年齢に関係なく平等に誰でも参加でき、コミュニケーションの場になると思う。信州すざか農業小学校は、参加するすべての人が農業を通じてコミュニケーションや学びあいができる場であると感じる。これからも、この活動が続いてほしいと感じる。

(細田有希)

今年度で3年目の参加となるが、以前に比べて大きく変わったと思うことが一つある。それは、農家先生の子供達への関わり方だ。以前は、子供達への話し方や接し方がなんとなくこちない様子だったが、今年度の活動では、積極的に農業を教えている姿や子供達と同じ目線になって話す姿をしばしば見ることができた。子供達の方も以前は信大生にばかり寄って来る感じであったが、今年度は農家先生にも親しく接している姿を見ることができた。

このような関わりが更に深まり、より良い活動になっていけば良いと思う。(山崎友美)

#### (5) 信州すざか農業小学校に初めて参加して

すざか農業小学校での活動で稲刈り、稲の脱穀が初めての経験でした。今までお米を毎日食べていたが、それがどのように作られ、収穫されるか知識としてはあったが、実際に体験してみると新たな発見がたくさんあった。鎌を使って稲を刈り取っていく時や、脱穀機でお米をとっていくときの感触が初めてであった。貴重な体験ができたと思います。また農業を通して、子ども、農家先生、高校生と関わることもでき自分も成長できたとてもいい活動でした。

(島田英一郎)

今年はすざか農業小に4回ほど参加させていただきました。始めはこの活動を知らなかったのですが、友達に誘われて行き始めたのがキッカケです。すざか農業小学校での活動は子どもたちと農業を通して得られる経験が多く、とても充実した時間だったと思います。また、自分

が経験したイモ掘り、そばの脱穀、おやきづくりなどの体験活動は「体験を通して学ぶ」という考えに沿っていいと思ったし、地域のを自分たちで作っていただくという地域文化の継承という面から見てもいい活動だと感じました。友達に誘われて参加したこの活動でしたが、2、3、4回目は気づいてみると自分から参加したいと言って参加していました。土曜日の朝というといつ寝坊して一日をダラダラと過ごしてしまいがちですが、この活動がある日は午前中からアクティブに行動でき良かったと思います。子どもたちは学生が来るのをすごく楽しみにしているし、学生も子どもたちと活動することで自分の知らない子どもの一面や自分に気づけるこの活動は地域に根ざしたとてもいい活動だと思うので、ぜひ来年も参加したいと思います。今年一年ありがとうございました。(滝沢雄太郎)

「すざか」に行ってみて、子どもと関わるコトの難しさを感じました。子ども相手に大人気ない態度をとってしまったりと反省する部分が多々ありました。でも、子どもの方からよって来てくれることが幸せなことだと感じたし、また農業を媒介することで子どもと親密な関係を築くことができました。僕は農業を何も知らなかったし、どうして良いのかわからなかったけど、子どもと共に知っていったことがまた良かったのだと思います。(西澤直城)

初参加でとても楽しかったです。地域の人、子どもたち、お父さん、お母さん、学生、いろいろな立場の人が1つの臼を囲んでおもちをついて、みんなで食べるという時間がよかったです。低学年の子どもたちは、大人と一緒にとことん楽しく遊んで、高学年になるにつれて、大人に対して丁寧な態度をとってみたい、でも遊びたかったり…。僕たち学生にとっては、子どもと関わる機会、他のスタッフの対応を学んだり…。本当にいろいろな立場の人が集まる大切さを再確認しました。ありがとうございました。(半田裕)

初参加でした。氷鬼、鬼ごっこですぐに子どもたちと溶け込むことができ、本当に楽しかったです。しかし、ボールなどを使う体育館で遊ぶときはルールが必要だと感じました。

おもちつきをして、おもちをついてみんなで食べたとき、自分で育てたお米でおもちを作るということは本当にいつもよりすごくおいしく感じるし、食べ物は売っているだけではなく、裏で作っている人がいること、生き物を食べているということを感じることができるな、と思いました。たくさん農家の方々がおもちつきの準備などをして下さっている所を見て、すごく地域とのつながりが深いなあ、と改めて感じました。また、みんなあたたかい人たちが来て良かったと、受け入れていただいて本当にうれしかったです。ありがとうございました。(鈴木梢)

## (6) 2008年度すざか農業小学校を振り返って

今年1年は、農業小での信大生の立場について考えることから始まりました。もともと学生主体ではない活動のため、自分たちがなにをできるのかがわかりませんでした。しかし、農家先生、須坂市役所の方と直接お話をすることによって、わたしたちができることは、子どもたちの農業に関する理解力を高めるお手伝いなど、農家先生たちと子どもたちをつなぐ役目なのだと感じるようになりました。その後、須坂園芸高校の生徒さんたちが参加するようになりました。彼らはわたしたち信大生よりも農業に関する知識があります。農家先生に「信大生は子どものお守りをしてくれればいい」と言われたこともありました。信大生が農業小学校に関わる意味はあるのかな？と何度も感じました。しかし、今度は高校生とお互いに行き来し話し合うことによって、園芸高校は野菜そのものについての知識を、信大生はその周辺の豆知識などを子どもに伝えるということになりました。信大生の存在意義について考えた両方の機会のときに、信大生がすざか農業小学校とは関わりをなくすという選択肢もあったと思います。し

かしそれでも関わりを持ち続けたのは、今の代ですごか農業小学校というプラザを終わらせてしまうのは悔しいと思ったからです。そして、なによりもすごか農業小学校に関わる人との関係を保ち続けたいと思ったからです。わたしのすごか農業小学校の好きなところは、本当にひとがあたたかいことです。回数を重ねるごとに笑顔が増えていく子どもたち、須坂のこと・農業のことをなんでも教えてくれる農家先生、農家先生・保護者・信大・園芸高校すべての架け橋となったださっている須坂市役所の方、子どもだけでなく学生もあたたかく見守ったださっている保護者の方、人懐っこい高校生…すごか農業小学校に関わるすべての人がこのプラザの魅力だと思います。この1年に関わる人たちが思っていることを伝え合うことで、良い関係が作れることを知ることができました。これからも、すごか農業小に関わる人がこのプラザの魅力に気づき、さらに良い農業を介しての異年齢交流の場になることを期待しています。

(一條まな)

#### ◇地域の協力者の方の言葉

### 子どもは宝 宝の育成

信州すごか農業小学校豊丘校校長 羽生田郁雄

農業体験を通し子供たちの生きる力を育む目的で開校し、今年で四年目を向かえ、例年にならぬ61名の入学児童と共に体験活動も、卒業式を残すだけとなった。信州大学の皆さん、又、今年から須坂園芸高校の生徒の方々にも協力、応援をいただき、無事に予定された授業を消火するに当たり、学生の皆様方に対し、深く感謝と御礼を申し上げます。ことわざに「虎は死して皮をとどめ人は死して名を残す」とある。これは、昔のこと。今の時代に通用しない。いくら名を残してもこれからの社会、多様化する時代において、次世代を担う子供たちにはまったく関係ないと思う。それよりもっともっと大切なのは大人は生き甲斐を感じながら、明日に希望がもてる子供たちを多く育てることの方が先決である。

子供は宝である。農業小学校は、食育と食べ物に感謝することを目標にし、将来心豊かにたくましい人間となることを期待するものである。

### 農家先生・学生スタッフに感謝して

須坂市教育委員会子ども課 友田一江

農業小学校は農業の大切さと、食べ物に感謝する気持ちを育む目的で、平成17年度に須坂市豊丘地区に開校し、今年で4年目を終了しました。この農業小学校のある豊丘地区は、須坂市の東部に位置し、東は上信国境の山々にくざられ、北側山寄りの川に沿ってほぼ東西に集落が連なる農村地域です。水稻・野菜・酪農などの小規模農家が多いことが特徴でもあり、高齢化や後継者不足による遊休荒廃農地の解消が課題となっている地域でもあります。そんな中、今年、定員をはるかに超える61名の子どもたちが入学してきました。低学年の子どもたちが多く、畑の作業も初めてなので大変でした。信大の学生さんや今年から参加している須坂園芸高校の生徒さん達に助けられながら順調に授業が進められて来ました。1年経過し、子どもたちは、鍬や鎌の扱い方が上手になり、たくましく成長してきています。子どもは、体験や遊びの中で育つことから、楽しく豊かな経験をできるだけ多くさせてあげたいと思います。これからは、学生スタッフの皆さんには授業の際の説明や各班の指導など、高校生と協力しながらよりよい授業になるよう手助けをしていただければ大変ありがたいと思います。

また、政府の広報誌や八十二銀行の機関紙などにも掲載していただいたり、5月には、山口利幸県教育委員長が授業に参加され、とうもろこしの種まきなど一緒に体験されました。このように、市内外で農業小学校も少しずつではありますが知名度も上がり、ますます異年齢の子どもたちの交流の場が広がっていくように思います。

この1年間、ご支援ご協力いただいた農家先生、応援して下さった保護者の皆様方、信大学生・園芸高校生スタッフの皆様方の今後の活躍にご期待し御礼を申し上げます。まことにありがとうございました。

## 「農業教育の可能性」—信州すざか農業小学校豊丘校に参加して—

長野県須坂園芸高等学校教諭 北原昌司

須坂市の教育委員会より「信州すざか農業小学校豊丘校」への参加依頼をいただき、地元豊丘出身の2、3年生を含め6人の野菜クラブ員が年間を通して参加することになりました。農業小学校に参加する中で、参加生徒には貴重な体験と出会いがありました。

参加生徒にとっては、普段教えてもらう立場から子ども達に教える立場になりそのための学習を深める良い機会となりました。また、信大生と園芸高校生のかかわり方について課題となりましたが、土井先生のアドバイスで信大生と園芸生の交流会を持ち、それぞれの役割分担を考え、連絡をとり合いながら進めることができました。このことをきっかけに、土井先生から本校生徒が信大教育学部に伺う機会を何度かいただきました。土井先生や教育学部生の話の中から、自分たちの日々の農業学習に対する評価をいただき、大きな自信を持つことができました。また、小学生、農家先生、大学生等幅広い年齢層の方々と交流できたことは貴重な体験でした。今回農業小学校に関わり、県内外の農業小学校の状況や、信大茂菅ふるさと農場、YOU遊の取り組みなど、農業に関わりながら様々な場所で教育が展開されていることを知り、農業教育の可能性を改めて考える機会となりました。

下に掲げた「農業教育の信条」は、高等学校の農業科の教員の研究会である長野県農業教育研究会において、農業教育は何故必要かという理論を農業教育関係者が信念として持つようにしたいということから先輩がまとめたものです。30年以上も前のものですが、また新たにこの信条を生かし幅広く農業教育が展開されればありがたいと思います。

- 農業教育の信条**
- 一、**豊かな人間性を**  
 一、自然に親しみ 生命を育み育てその  
 神秘性に 深い 敬意の念を持つ  
 豊かな人間性を育てる
  - 二、**有為な農業人に**  
 二、農業の知識 技術を修得し 勤労を  
 通してその資質をびん養い 専門性を  
 駆使する 有為な農業人を育てる
  - 三、**若き時代の 実験 定習の 体験**  
 三、若き時代の 実験 定習の 体験を  
 論理的 実証的に 富む 真の 実習を  
 培う
  - 四、**生きがい**  
 四、人間は生きがいを求め  
 土に親む 農業農村にこそ  
 拘束されたい 自主と自由がある
  - 五、**郷土を守る**  
 五、緑が萌え 清き流れの  
 美しき郷土を 守る

# 子どもと土とのふれあいの懸け橋

長野県須坂園芸高等学校 3年 北村珠巳

## 1. 信州すざか農業小学校との出会い

4年前、「信州すざか農業小学校豊丘校」という活動が私の住む豊丘地区で始まりました。これは、小学生が1年を通して農業体験をする活動で、地元に住む農家の方々が子どもたちに農業を教えます。私の家も小規模ですが農業をやっているので、農家先生として農業小学校の活動に参加することになりました。祖父母は、私が園芸高校に通っていることもあり、農業小学校から帰って来ると、その日にあったことを話してくれます。「子どもたちは元気がよくて楽しいよ」「今日は収穫した野菜を食べたんだよ」そんな話を聞いているうちに農業小学校に参加してみたいと思うようになりました。今年4月、北原先生の「今年から園芸高校も農業小学校に参加するけど、一緒にどうだ」との誘いの言葉に喜んで参加することにしました。園芸高校からは、私を含め6人が参加し、信大生スタッフとともに活動することになりました。

## 2. 農業小学校の活動内容

農業小学校では、教科書も鉛筆も使いません。鉛筆の代わりは鍬や鎌です。自分の席も、もちろん教室もありません。その代わり、2つの畑と1つの水田があります。先生は「農家先生」と呼ばれる農家のおじいちゃん、おばあちゃん、そして豊丘に残るたくさんの方々の自然です。私たち園芸高校生の役割は、農家先生と小学生の間を取り持つことです。畑に着くと子どもたちは、鍬などを取り合い競うように畑に入ります。何年も続けて参加している子どもは、慣れた手つきでうね立てをします。鍬を持つのは初めてという子どもも少なくはなく、そんな子どもたちには口で指示するだけではなかなか伝わりません。一緒に鍬を使って教えると「わかった」という声と同時にみるみる上達していくのがわかりました。「上手にできたね」と褒められると満足そうな笑顔を浮かべていたのがとても印象的でした。

休憩時間には、おこびれが出ます。おこびれとはおやつのもので、おやきやおにぎり、自分たちで育てた野菜やそれを使った豚汁などが出ます。太陽の下で、みんなの顔を見ながら食べるおこびれの味は格別です。子どもたちも「いつも食べてるのよりもおいしい」「農業小学校に入って、嫌いな食べ物が減ったよ」とうれしそうに話してくれました。中にはおかわりを何回もしている子どももいました。おこびれ作りも私たちの仕事の一つでした。毎回50人以上が参加するため、簡単な献立であっても大変な作業です。そんな大変な作業でも「おいしい」と言って食べる子どもの顔を見たり「また食べたい」と言われたりするとその苦労は一気に喜びに変わります。

6月には、収穫前の骨休めとして夏の遠足で地元にある五味池破風高原自然園という国立公園へ行きました。そこはレンゲツツジが有名です。私たちが行った時には、満開の花が一面に広がっていました。駐車場から歩いて、山の頂上近くにあるあずま屋まで全員で散策しました。レンゲツツジの根元にはワラビが生えていて、子どもたちは宝探しをするように夢中でワラビ採りをしていました。あずま屋の近くまで行くと、大きなアリの巣がありました。そこで羽生田校長先生は子どもたちを集めて「アリのお尻をなめてみて。どんな味がするでしょう」と言いました。「アリってなめていいの?」「えー、怖いよ」子どもたちから声が上がります。「大丈夫だよ」校長先生が見本を見せると恐る恐る子どもたちもアリをなめ始めます。「すっぱい」「苦いよ」子どもたちはとても驚いた様子でした。どんなことにも興味を持つ姿がそこに

はありました。7月に入り、夏野菜の収穫の時期になりました。収穫はやはり楽しみな作業のようで、畑まで走っていく子どもの姿も見られました。トウモロコシの収穫では自分たちの背よりも高い茎から、一つ一つ収穫をしていきます。「こんなに大きいモロコシ初めて見た」と、抱え切れないほど収穫した子どもたちは興奮気味に言います。ジャガイモの収穫では、土の上に出た茎を頼りに手で掘っていきます。一口大の小さなジャガイモから握りこぶしくらいの大きなものまで、見た目は色々ですが、収穫の喜びは変わりません。

### 3. 農業小学校で学んだこと

作業の合間に保護者の方と農業小学校についてお話をする機会がありました。「農業小学校では、五感全てを使って生きていることを実感できる」「今は旬がわからないくらい一年中野菜があるが、実際に作物を育てる中で旬を理解できる」という声が多く聞かれました。そのほかにも、家で積極的に野菜を食べるようになったり、ご飯を残すことが少なくなった子どもも多くいるようで、「食」についても子どもたちに良い影響を与えていることがわかりました。また幅広い年齢の人が参加する活動の中で、違う年齢の人とも交流でき、人と人との関わり大切さも自然と実感できます。年上の子は年下の子のめんどうを見る、道具が足りないときは年下の子に貸してあげる。そんな年下の子を思いやる気持ちが回数を重ねるごとに身につけているのには驚きました。自然や土、そしてたくさんの人とのふれあいを通して、人は豊かになるということを実感しました。

最近、園芸療法などにもみられるように農業が人の心に働きかける力が注目を集めています。私は、農業小学校での活動や高校で農業を学んだことがきっかけで農業の持つ力について考えるようになりました。農業小学校に参加している子ども達は体験の中から、食べ物を大切にすることや、人を思いやる気持ちを身に付けてきました。作物を育てることで気持ちが落ち着いたり、優しい気持ちになれたりという変化はなぜ起こるのでしょうか。私は農業や作物に大きな可能性を感じています。そして、農業の持つもう一つの大きな力にも気付きました。それは、農業には農作業や生産物、加工品を通して人と人をつなぐ力があるということです。農業小学校について考え、研究し続けることで農業を通した人と人のつながりの一番大切な部分が見えてくるような気がします。私は、大学に進学して、子どもたちが体験を通して農業や「食」の大切さを学べる方法について勉強したいと思っています。そして、将来は都市と農村の懸け橋として、子どもと土とのふれあいを大切にした活動を豊丘地区だけでなく、いろいろな所で展開させていきたいと考えています。



# 大岡わらわらクラブ（1年目）

プラザ長 原 耕平（理数科学教育専攻3年）  
副プラザ長 宮尾 亘（教育実践科学専攻2年）

## ○学生スタッフ名

加藤 博美（実4） 井出 陽子（生4） 小松 智恵（社3） 一條 まな（言3）  
宮川はるな（言3） 岡田 克志（社3） 笠井 悠太（理3） 中川 茜（生3）  
市川 香織（実2） 石原加奈子（実2） 藤田 裕介（社2） 西野 康子（地4）

## ○プラザの概要

大岡での「信大 YOU 遊世間」のプラザ名をどうするかについて、様々な検討が加えられた。例えば「信州大岡農業小学校」、「信州大岡わらわらクラブ」、「信州大岡農業体験塾」などである。それぞれに思いのこもった素晴らしい名称であったが、最終的には主体者である学生の側から生みだされた「信州大岡ふるさとランド」が、斬新で親しみやすく、子どもたちに楽しい遊び場を感じさせるものであるとして、大岡地域の皆様のご賛同を得て決定した。平成21年2月3日、4日、大岡農村女性ネットワークの方々のやしょうまづくり、こんにゃくづくりの仕事に学生スタッフ（延べ6名参加）が手伝いに入り、作業後の懇談会で宮尾亘君がこの名称を提案し、全員の賛同を得て決定された。

## ◇実践から得た「臨床の知」

### 0を1にする作業を大岡で

宮尾 亘（教育実践科学専攻2年）

「0を1にする作業は1を100にする作業よりも大変なことだ。しかし、できた時に得られる物は他には代えることのできないものになる」。これは長野市立大岡小学校の小岩井彰校長先生からお聴きした言葉である。これを聴いて私は大岡での活動を決意しました。

最初に行った活動は大岡の三千石聖祭り。このお祭りでは、地域の人たちと一緒に地元で採れた野菜やそばを売る手伝いをしながら地域の人たちの優しさに触れ、この場所でプラザを開き「通学合宿」をしたいという気持ちがより一層強くなりました。

そして、いよいよ11月に「通学合宿」の話し合いが始まりました。1月までで3回の会議をしてきましたが、私たちの不手際で日程がなかなか決まらず、時間だけを費やしてしまいました。出だしでつまずき大岡の方々には大変迷惑をかけてしまい申し訳なく思っています。ですが、大学に持ち帰り、みんなで何回も会議をして、ようやく1月になり双方が納得する日程を示すことができ、第一歩を踏み出す段階まで行きました。

これから、この「通学合宿」の内容について詰めていくのですが、「通学合宿」の内容も含め、私が来年度大岡のプラザでやりたいことが2つあります。1つは、大岡での地域の人たち、子どもたち、学生のかかわる場を作ることです。これは、地域の行事や農作業を通してできれば面白いのではないかと思います。そして、「大岡らしさ」というものを見つけ出していきたいと思っています。もう1つは、YOU 遊の他のプラザとの交流です。青木村も麻績村も大岡もそれぞれ小学校、中学校とも1校しかありません。子どもたちは、それぞれの場所でのびのび暮らしています。しかし、小さい社会の中でずっと同じ力関係のまま生活することは子どもたちの成長には限界があるのではないかと思います。そこで、他のプラザの子どもたちと宿泊を伴うような触れ合いを通して、多様な他者と子どもたちが触れ合う場を設けたいです。そして、学生が子どもたちと地域の人たちや他の地域の子どもたちを結ぶ「架け橋」になりながら関わっていきたいと思っています。

---

## 第7回 YOU 遊フェスティバル

---

実行委員長 高池亮輔（保健体育専攻3年）

○実行委員名（7名）

高池 亮輔（保3） 宮川はるな（言3） 西澤 遥（実3） 鈴木 祐香（理2）  
西澤 直城（理2） 飯島 理沙（理2） 早川 和宏（理2）

○講座長名

青木 智博（実4） 市川 香織（実2） 加藤 博美（実4） 野口 洋憲（社4）  
鈴木 亮子（生4） 細田 有希（生4） 土肥 直也（保4） 市原 哲也（社3）  
坂本 英幸（理3） 小林良太郎（理3） 中川 茜（生3） 宮尾 亘（実2）  
渋谷美奈子（実2） 石原加奈子（実2） 田中 陽菜（言2） 戸谷 望（言2）  
藤田 裕介（社2） 山崎 慶太（理2） 土屋 和毅（心2） 佐藤 悠司（心2）

○参加者数（総勢 約867名）

子ども約360人 保護者約180名  
学生スタッフ約320名 OB・OG4名 地域協力者3名

○プラザの概要

「YOU 遊フェスティバル」とは、年に一度、教育学部のキャンパスに子どもを集めて講座を開き、1日子どもたちと共に活動するイベントである。しかし「YOU 遊フェスティバル」で行う内容は毎年違い、学生が毎週開かれる実行委員会でこの「YOU 遊フェスティバル」をどのようなものにするかという話し合いから始まり、内容が決まっていく。

さて、昨年大成功を収めた第6回「YOU 遊フェスティバル」に引き続き、今年も「YOU 遊フェスティバル」を行いたいという学生の願いから、5月に7名による実行委員会が発足した。実行委員会が発足してから、週に一回の話し合いの中で、今年の「YOU 遊フェスティバル」をどのようなものにしていきたいか、どのような願いをこのフェスティバルにかけるのかということから話し合っていた。そして今年の実行委員で『楽しむ・つながる・学ぶ』というテーマを掲げていこうと決定した。そしてこのテーマの中心にはいつも子どもがいることを考えていこうということになった。この「YOU 遊フェスティバル」は年に一度、教育学部のキャンパスに多くの子ども、保護者、学生、地域の方々がそろい、共に活動し、共に楽しむ祭りである。この盛大な祭りを参加者全員が心の底から楽しめるものにしてほしいというのがこのフェスティバルでの一番の願いである。その中で今までにあったことのない異年齢の人々とのつながりを大切に、共に活動することを通して、何か参加者自身の学びにつながればと考えた。

今年の「YOU 遊フェスティバル」では昨年同様、日程を2日間にして行った。しかし昨年とは方向性を180度変えて、講演会やディスカッションではなく学生レクレーションを企画した。講座間の学生だけではなく「YOU 遊フェスティバル」に参加している多くの学生同士で関わりを持って欲しいという願いを込めた。さらに昨年までの「YOU 遊フェスティバル」と大きく変わった点がある。それは今まで講座の内容が子どもたちとの活動のみであったが、今年は土井進教授の提案による『信大茂菅農業義塾』の開設という講座が開

かれた。この講座の対象者は地域の農業経験者、定年退職者、不登校児である。「YOU 遊世間」の「信大茂菅ふるさと農場」の一部を使い、農業をすることを通して人との関わりを育もうとする取り組みの第一歩をこの「YOU 遊フェスティバル」で踏み出した。

またこの「YOU 遊フェスティバル」には多くの他大学に声を掛けた。信州大学の学生以外に、長野県短期大学（16名）、清泉女学院短期大学（14名）、長野大学（3名）、茨城大学（9名）、横浜国立大学（6名）、岐阜聖徳大学（8名）、文教大学（5名）、関西大学（1名）の学生が参加してくれた。他大学の学生が参加してくれることにより、信大生にとっても他大学の学生にとっても普段の生活では経験できない関わりを持つことができた。

このように新しい試みに挑戦し、そして過去の良い伝統を残しながら第7回「YOU 遊フェスティバル」が開催された。以下は当日の日程・内容の詳細である。

<平成20年11月29日（土）>

9：30～	受付開始
10：00～	学生開祭式
10：20～	全体のアイスブレイク
11：00～	学生レクリエーション(キャンパス全体を使つての課題解決ウォークラリー)
12：40～	昼食会
13：30～	講座ごとにわかれて活動・準備
17：30～	前夜祭

<平成20年11月30日（日）>

8：30～	子ども受付	15：15	子ども完全解散
9：00～	開会式	15：15～	片付け
9：45～	会場へ移動	16：15～	講座ごとリフレクション
10：00～	講座ごと活動	17：30～	後夜祭
14：00～	閉会式	20：00～	片付け

○会計報告

第7回「YOUフェスティバル」における会計は以下の通りです。

収 入		支 出	
学 生	794,200	学生食事・備品	694,890
子ども	105,650	準 備	204,002
お祝い金	16,000	保 険	4,500
寄付金	2,542	生協お礼	15,000
小 計	918,392	小 計	918,392

○講座一覧

2日目に行われた講座は以下の15講座である。

	講 座 名	講 座 長	子どもの数	学生スタッフ	場 所
①	オカシ de 家づくり	青木智博(実4) 市川香織(実2)	48人	34人	泉会館
②	劇的♡Before After ～これが噂の改造計画～	加藤博美(実4)	30人	24人	N103、 104、302
③	巨大迷路に挑戦	春原圭佑(実4) 野口洋憲(社4)	30人	16人	図書館2F

④	うどん名人になろう!!	鈴木亮子(生4) 細田有希(生4)	30人	34人	調理室 W館
⑤	あそび屋 わにわに	土肥直也(保4)	21人	9人	屋外
⑥	楽しい!かしこくなる!ゲーム	市原哲也(社3)	13人	13人	E404
⑦	ビー玉コースター!!+理科実験!	小林良太郎(理3) 坂本英幸(理3)	24人	22人	N102
⑧	つくろう ぼくらのひみつきち	中川茜(生3) 宮尾亘(実2)	35人	23人	N202、 203、204
⑨	どっこい☆ソーラン ~楽しくおどろうソーラン節~	渋谷美奈子(実2) 石原加奈子(実2)	22人	42人	第2体育館
⑩	トレジャーハンター	戸谷望美(言2) 田中陽菜(言2)	34人	24人	学校全体
⑪	わくわく漢字ワールド	藤田裕介(社2)	4人	9人	N303
⑫	不思議がいっぱい	山崎慶太(理2)	18人	20人	W508
⑬	みんなあつまれ! わんぱく大運動会	土屋知毅(心2) 佐藤悠司(心2)	23人	23人	第1体育館
⑭	世界記録に挑戦! 牛乳パック紙ヒコーキ	志甫知紀(生2)	25人	13人	しなのき会館
⑮	「信大茂菅農業義塾」の開設 (p.99参照)	飯村昌史(大学院心理臨 床専修1年) 土井進 (信大教育学部教授)	20人	1人	N304
		合計	377人	307人	

## ○一年間の活動

5月22日	第7回「YOU 遊フェスティバル」実行委員会 発足
7月22日	講座長 決定、顔合わせ
10月9日	学生スタッフ募集 締め切り
10月9日、23日、 11月13日、20日、27日	講座長会 (全5回)
11月17日	子ども募集 締め切り
11月29日、30日	第7回「YOU 遊フェスティバル」

## ○講座内容

### 1 講座名 オカシde家づくり

講座長 青木智博 (教育実践科学専攻4年)

講座長 市川香織 (教育実践科学専攻2年)

#### ○学生スタッフ名

城井 希人 (社4)	田村 将太 (実4)	田村 弘樹 (言4)	小口 七海 (地3)
小林 巨樹 (保3)	門田浩友紀 (心3)	新開 夏実 (実2)	諏訪 貴文 (芸2)
塚原 昌裕 (社2)	中村 恵理 (芸2)	橋本 千里 (実2)	布山 朋和 (実2)
石田 育恵 (障1)	大島 牧夫 (実1)	久保 朝夏 (芸1)	小林 美実 (生1)
齊藤 貴寛 (理1)	橋爪 優美 (芸1)	畑 貴恵 (障1)	幅 ひとみ (理1)
平林 悠子 (清2)	藤澤千布美 (清2)	堀田 沙依 (清2)	本間 美紀 (清2)
丸山 怜央 (清2)	佐藤 彩音 (清1)	久保田歌穂 (清1)	福士 最愛 (清1)
山田 貴子 (清1)	岡澤 沙季 (県1)	羽田えりか (岐2)	小村 武広 (関4)

○参加者 子ども 48名 保護者 11名

#### ①講座の概要

“お菓子の家を作りたい” そんな小さい頃からの憧れを抱いて集まった総勢 100 名で、12 軒の素敵なお菓子の家を作りました。子どもはもちろん保護者さん・スタッフなど、参加する人全員が楽しめる活動にすることを第一に願ってきた講座です。

#### ②当日の活動日程

イントロダクション あいさつ、べっとり村 DVD 鑑賞、設計図作成

お菓子 de Making♪ 12 班に分かれて、思い思いの家を建築する

エンディング お菓子の家を食べる、表彰状・お菓子の家一級建築士免許証授与

まとめ リフレクションシート記入、あいさつ

#### ③準備段階の話

最初は“人が入れるくらいの大きな家を作りたい”という夢を抱いて計画していました。しかし大きさ故に、土台をダンボール等で作る以外に案が出ず、行き詰っていた状況に G さんが、“お菓子の家”とは何かという議題を話し合いに持ちかけました。そこで得られた結論は、“量より質”“100%お菓子で作りたい”という皆の共通の願い。本番約1ヶ月前にわたしたちは再スタートを切りました。まずは活動の願い(原点)をもう一度話し合い、“全員で楽しむ”という大きな願いの下に、①仲間と協力する②試行錯誤の中で達成感を得る③一人ひとりの思いを大切に、という3つの柱をたてました。しかし「お菓子は何をを用意すれば良いのか」「設計図はどう描こうか」などを考える際、“何が一番子どもの為になるのか”という部分での葛藤は多くありました。実際に、何が子どものためになったのか分かりませんが、重要なことは成功という結果ではなく、どれだけ自分たちが努力できたかということです。

#### ④当日の子ども様子

どの子の表情も真剣かつ、楽しんでいるようでした。家の中の家具を一生懸命に作る子。自分の持ってきたお菓子をうれしそうにくっつける子。壁が崩れても、みんなで作り直す班。そんな子どもたちよりも真剣な表情で、庭造りに励むお父さん。家が建ったとき、誰よりも大き

な歓声をあげるスタッフ。そしてそれを見てニヤニヤした表情を浮かべる本部。さらに耐震偽装を心配するチョコパイパイ。お菓子の家をやってよかった、と思える瞬間の連続でした。

### ⑤学生スタッフの感想

今回の企画を通して学んだことは、何かをするときは最善のパートナー・最善の仲間たちを見つけることが重要だということです。何が最善かは状況や結果次第というところもありますが、私は本企画のメンバーにはとても感謝しています。本企画では話し合いも多かったし、壁も多かったですが、上辺だけでなくとことん問題に立ち向かっていきました。

活動の流れに対しても、少し違和感があればはっきりと発言もできたし、悩むときもしっかり悩めました。スタッフの方には申し訳ないと思う反面、本当に私たちについてきていただきありがたかったです。そして当日の活動では、子どもの発想も多様に出だし、班で協力しようという姿勢も見られました。子どもにただやらせるだけではなく、大人や学生も一緒になって挑戦したり、工夫したり、悩んだりする活動は私の狙っていた方向の活動になりました。(青木)

サブレに水あめを塗っている子がいて、「それどこにくっつけるの?」と聞くと、にこーっと満面の笑みを浮かべながらお菓子の床にくっつけました。その笑顔を見た瞬間、「お菓子の家をやってよかった」と胸がいっぱいになりました。けれどそう思えたのも、そしてその子の笑顔が見られたのも、何ヶ月も前から準備してきた過程があったからだと思います。どうやって進めたらよいか分からず、やるせなくなった日も多くありました。

それでもお菓子の家とひたむきに関わってこれたのは、お菓子の家を夢見て待っている子ども達がいたから。なんか楽しそう!と思い集まってくれた仲間がいたから。そして何より、わたしが夢見心地で「お菓子の家を作りたい」と話したとき、誰よりも真剣に受け止め「一緒に夢叶えようや」と導いてくれた青木さんがいたからです。みんなの存在が、わたしのすべてでした。だからみんなが楽しんでくれる活動であったならば、わたしはそれだけで幸せです。みんなで真剣になれた日々が本当に楽しかった、そんな【お菓子 de 家】に感謝。ありがとう、大好きです。(市川)

## 2 講座名 劇的♡Before After ～これが噂の改造計画～

講座長 加藤博美 (教育実践科学専攻4年)

### ○学生スタッフ名

石井絵理子 (社4)	須貝 和之 (社4)	肥留間淳也 (理4)	土田 恵久 (社4)
布山奈津美 (言4)	平野 結 (障4)	北野 剛史 (地4)	永谷 嘉浩 (実3)
滝沢雄太郎 (理2)	新保亜沙子 (理2)	安積 七生 (芸1)	羽田 顕佑 (芸1)
浅川 沙織 (生1)	杉谷衣美佳 (生1)	近藤 真衣 (言1)	中沢 恵美 (県2)
宮林 世羅 (県2)	小川原芳奈 (県2)	太田 真耶 (長4)	佐藤 静香 (長2)
勝 愛美 (岐聖2)	遠藤 里紗 (茨3)	クオン ミンソプ (工3)	

○参加者 子ども 30名 保護者 4名

### ①講座の概要

「海」「ジャングル」「お化け屋敷」の3テーマに分かれて、普段の大学の教室を改造する。子どもたちにあらかじめ希望を取り、各テーマごとに子ども約10名ずつに分かれた。子ども

たちが最初に目にした教室 (Before) は、壁面に画用紙や暗幕が貼ってある程度の状態であった。その教室を2時間かけて改造した結果 (After)、私たちが予想していた以上に子どもたちの創造性あふれる空間に変化した。最後に各テーマを見学して回り、他のテーマの楽しさも味わった。

#### ②当日の活動日程

10:00	はじめの会 (余興、アイスブレイク、Before 共有)	13:00	見学会
10:30	各テーマに分かれて改造開始	13:40	振り返りシート記入
12:00	テーマごと昼食	13:50	終わりの言葉
12:50	完成 テーマごと写真撮影	13:55	体育館へ移動 (講座終了)

#### ③準備段階の話

テーマごとにリーダーを決め、そのリーダーを筆頭にテーマごとで準備を進めた。Before After と言っても、制作時間が長くないので、教室本来の状態から改造を始めると完成度が低くなると予想されたため、どのような Before の状態にするか、子どもたちとはどのような作業をするのかという点に、どのテーマも悩んだ。その結果、どのテーマも子どもたちの自由性を生かしたいという想いから、できるだけ本来の教室に近い状態と、子どもたちが作りたいものを作りやすいような材料や環境を整えた。

アイスブレイクは信大1年生に事前をお願いした。当日までの間、1年生5人は松本で集まり、アイスブレイクをしっかりと企画してくれてくれた。

#### ④当日の子どもの様子

まずアイスブレイクでは、1年生の進行がスムーズで、活動に入る前の子どもたちや親御さんやスタッフの気持ちが大いに盛り上がった。

どのテーマでも、子どもたちは思い思いに改造をした。最後の見学会ではお化け屋敷を見学するときに、海とジャングルの子もたちが非常に興奮した様子で楽しんでいた。

#### ⑤学生スタッフの感想

子どもたちが予想以上に主体的であった様子に驚いたという感想が多かった。反省としては、3テーマに関連性を持たせてもおもしろかったという意見や、安全面の不徹底さ、片付けの不徹底さなどが上がった。まだまだ考えるべき点はあったけれども、当日の子どもたちの様子から、講座が大成功となったという実感がもてた。

### 3 講座名 巨大迷路に挑戦

講座長 春原圭佑 (教育実践科学専攻4年)

講座長 野口洋憲 (社会科学教育専攻4年)

#### ○学生スタッフ名

洞出 直美 (実4)	押江 愛実 (社4)	納 愛果 (社4)	上田 雄介 (理4)
石山 裕貴 (理4)	小林 祥之 (地3)	笠井 悠太 (理3)	羽田 光 (芸1)
中島 早紀 (社1)	藤森 麻衣 (社1)	岩下 実花 (県1)	飯島 晶子 (県1)
岩澤 直哉 (横3)	大川 拓哉 (茨1)		

○参加者 子ども 30名 保護者 1名

## ①講座の概要

1×1.4メートルのベニヤ板の上に、ソフトテニスサイズのボールを転がす巨大な迷路を作成した。迷路に使った材料は、段ボールやペットボトル、牛乳パック、発砲スチロールなどで、様々な材料を使用した。1グループにつき子どもは4人程度、迷路を作成し、完成した迷路で遊んだ。作るのにも、遊ぶのにも、グループの協力は不可欠。子ども同士がコミュニケーションをとることを講座のねらいとした。

## ②当日の活動日程

10:00	リアル巨大迷路の中へ	12:00	お昼ごはん
10:10	あいさつ、導入劇	12:30	作業再開
10:20	アイスブレイク	13:00	完成した迷路で遊ぼう
10:30	巨大迷路を作ろう	13:55	あいさつ、講座終了

## ③準備段階の話

準備段階では、巨大迷路の試作品を何度か作成した。いろいろな材料を試しに使ってみたり、いろいろなコースを試しに作ってみたりした。試作を通して、当日予想される子ども達の姿や、学生の支援などを考えた。

## ④当日の子どもの様子

ほとんどの子ども達は巨大迷路を作る段階では、自分の作業に専念し、黙々と迷路作りに取り組む様子が目立った。声を掛け合うなど、コミュニケーションをとる場面は「テープ貸して」程度で、あまり相互行為は見られなかった。完成した迷路で遊ぶ段階になっても、ほとんど言葉を交わしていかなかった。しかし、迷路をなかなかクリアできずに梃子摺っていると、「右動かして！」など、クリアするためお互いに声を掛け合うようになった。グループみんなはどうやってボールを転がしたら良いか声を掛け合うようすが目立つようになり、グループの団結が深まっていった。

## ⑤学生スタッフの感想

最初は子ども同士の声掛けが少なかったが、迷路で遊ぶときに子ども同士がなんとか迷路をクリアしようと声を掛け合い、協力する姿を見ることができたので、子ども同士がコミュニケーションをとるといって今回のねらいは達成できたのではないかと思えた。今回の活動では、迷路を作る際には、迷路の下書きを作るなどせずに作るころから始めた。迷路を作る上で子どもたちに条件を課さず、自由に作れるようにした。子どもたちが自由に作るという設定にしたので、学生がどのように、どこまで声をかけていいのかが難しく、課題として挙げられた。

## 4 講座名 うどん名人になろう！！

講座長 鈴木亮子（生活科学専攻4年）

講座長 細田有希（生活科学専攻4年）

## ○学生スタッフ名

井出 陽子（生4）	加藤 悦子（生4）	榊原 礼菜（生4）	砂川 賢吾（生4）
関谷のぞみ（生4）	小池 真弓（生4）	山崎 友美（生4）	藤岡 泰裕（実4）
伊藤 香澄（実3）	菊地ゆかり（実3）	小西 舞（実3）	吉池 潤奈（実3）
青木友佳理（言1）	阿藤 茜（言1）	太田 香子（芸1）	大井このみ（理1）



飯山めぐみ(言1) 石塚 元人(言1) 梅津 千秋(芸1) 窪田 都恵(芸1)  
清水 香里(芸1) 藤浦 修司(社1) 倉島 喜子(県2) 小林 円香(県2)  
百瀬 史麻(県2) 山口 葉月(県1) 菅原 功典(横2) 大澤たくや(岐聖3)

○参加者 子ども30名 保護者15名

#### ①講座の概要

2年目になる今年は、昨年以上においしいうどんを作ることを目的にした。「うどん」だけでなく、「つゆ」、「油揚げ」にもこだわり、すべてを子どもたちが作る活動にした。そして、最後にはうどん名人であることを証明する「うどん名人認定証」を子どもたちに用意した。

#### ②当日の活動日程

10:00 講座内開会式(作りかたの説明、自己紹介)	13:00 後片付け
10:20 うどん作りスタート	13:20 認定証をプレゼント・講座内閉会式
12:30 作ったうどんを食べる	13:45 講座終了

#### ③準備段階の話

2年目ということもあり、昨年に比べると余裕を持って準備に取り組むことができた。今年は準備スタッフにも恵まれ、各準備を分担して取り組むことができた。また、去年はできなかったうどんの試作もスタッフと一緒に計3回行うことができた。当日の準備もスタッフと協力し手際よく行うことができた。たくさんのスタッフがいることで、一つの考え方に固執するのではなく柔軟に考えることの大切さに気づいた。

#### ④当日の子どもの様子

白い粉を顔につけ、目を輝かせながら、グループの仲間と協力してうどんを作っている様子を見ることができた。また、うどんをビニール袋に入れ寝かせる際、子どもたちが、隣の班のうどんを触り、固さを比べ「こっちの方が柔らかい」などお互いに意見を言って交流していた。片付けの際には、3歳児が、机の上に散らばっていた打ち粉を丁寧にゆっくりとおわんの中に入れる様子があった。食べ物を大切にしようとする思いを感じた。

#### ⑤学生スタッフの感想

- ・あらかじめうどんやつゆなどの作り方を用意したが、保護者の方が「こういうやり方もあるよ」と教えてくださり、他の方法について知ることができた。(関谷のぞみ)
- ・保護者の方と触れ合う機会を得られて本当に良かった。「YOU 遊フェスティバル」の活動をもっと早くから知り、一緒に参加することができればよかった。(砂川賢吾)
- ・十分な準備をしたと感じても、当日やってみると、わからないことなどがたくさん出てきた。準備の大切さを痛感した。また、学生同士の連携、チームワークを感じた。(窪田都恵)

## 5 講座名 あそび屋 わにわに

講座長 土肥直也(保健体育専攻4年)

#### ○学生スタッフ名

土肥 直也(体4) 半田 裕(工3) 一條 まな(言3) 藤澤美恵子(体1)  
西河 隆史(横3) 梅本亜紗美(岐聖3)

○参加者 子ども21名、保護者8名

## ①講座の概要

私たち「あそび屋わにわに」は、普段、平日の放課後の時間帯に、長野市の若里公園で子どもたちと遊んでいるグループである。「子どもたちの“日常”」をテーマにして遊んでいるが、地元のイベントに参加することもあり、今回の YOU 遊フェスティバルにも参加することとなった。講座では、いつも通りリヤカーに様々な遊びの素材を乗せていき、「大人も子供も一緒になって楽しい遊びを見つけ、創っていく」ことを目的とした。

## ②当日の活動日程

10:15	はじめの会、スタッフ紹介、アイスブレイク	12:45	午後の遊び開始
10:30	体育館前へ移動、遊び始める	13:45	みんなで発表の打ち合わせ
12:00	みんなで昼食	14:00	講座終了

## ③準備段階の話

あそび屋わにわには、普段から日常的に子どもたちと遊んでいます。子どもたちの日常の中に、少しのエッセンス（楽しい遊び）が入れば、との思いで活動しています。だから、今回の YOU 遊フェスティバルにおいても、イベントだから特別なことをするのではなく、身近なところから遊びを創る、また、家に帰ってもまた同じ遊びができる、そのようなことを意識し、いつも通りのわにわにを展開しようと思いました。

## ④当日の子どもの様子

当日の朝、子どもたちはやはり緊張している状態でした。開会式、講座に別れてからの武道場での説明の時は、緊張の中にも「何するのかな？」といった期待の表情も見られました。

そして、いざ外に出て遊び始めると、子どもたちはとても楽しんでいました。スタッフで作る予定だった昼食の豚汁も、子どもたちが率先して作ってくれました。

子どもたちが一番いい表情を見せてくれたのは、講座終了後、閉会式のために体育館へ移動するときです。講座の最後で「閉会式でどんなふうに発表するのか」ということをみんなで話し合ったのですが、朝には知らない者同士だった子どもたちが、この時には「一日遊んだ仲間」として、一体になっていました。体育館へ移動する時も、みんなで和気あいあいとおしゃべりをしたり歌を歌ったり、本当に楽しい空間が作れてよかったと思えました。

## ⑤学生スタッフの感想

この講座では、とにかく子どもと遊び、子どもと楽しむことを一番の目標にしていました。その点では、最後に子どもたちの最高の笑顔を見ることができ、大成功でした。

反省点としては、事前の準備が不十分だったということです。普段は特に準備をすることもなく毎日子供と遊んでいるあそび屋わにわにですが、やはりイベントを企画するには十分な準備が必要だと思えました。

## リヤカーにあそびを載せて

半田 裕 (工学部情報工学科3年)

私は、第7回 YOU 遊フェスティバルの「あそび屋わにわに」という講座に参加させていただきました。「あそび屋わにわに」は、週3回平日の放課後に「リヤ王」と名付けたリヤカーに様々なあそび道具を乗せ、市内にある若里公園で子どもたちと遊んでいる学生のグループです。「わにわに」のあそびは、鬼ごっこ、大縄跳び、木登り、木にぶら下げたブランコ、工作など様々な種類があり、子どもたちが集まれば自然にその時にやりたいあそびが始まります。

## 1. なぜリヤカーであそぶのか

「わにわに」の活動は、「毎日子どもとあそびたいよね」の一言から始まりました。「わにわに」で私たちがあそぶ一番の動機は「自分があそびたい」というところにあります。しかし、ただ公園に行って「一緒にあそぼう」と子どもたちに近づいていくとたちまち“不審者”扱いです、かといってプレイパークのような拠点を学生の私たちが持つ事は難しい。そこで私たちが考えたのがリヤカーです。リヤカーならどこへでも行ける、何よりものぼりを立てたリヤカーが急に公園に遊びに来たらおもしろいんじゃないか、ということでリヤカーにあそびを載せて公園に行くことにしました。リヤカーを引き、のぼりを立てるだけで不審者から一転して「あそび屋」になれました。

## 2. 保護者の反応と公園でのつながり

このリヤカー作戦で公園に行くと子どもたちはすぐに寄ってきましたが、やはり保護者からはすぐに信用を得ることはできませんでした。当たり前のことですが、「どこのだれですか?」「なんであそんでいるんですか?」といった質問攻め、子どもたちに「リヤカーに乗せて」と言われて公園を回る時も保護者の方々が後からついてくるといった状況でした。しかし、「わにわに」の紹介のチラシを作って保護者に配布したり、新聞やTVの取材を受けたり、何よりも活動の回数を重ねることで、「わにわに」の真意を知ってもらうことができ、保護者の信用を得ることができ、子どもたちだけでも一緒に遊べるようになりました。子どもたちだけで遊べるようになると、お母さんたちには時間ができます。するとお母さんたちも一緒に遊んでくれたり、お母さん同士が言葉を交わすようになり、「うちの子も来年〇〇小学校なので、よろしくお願いします」、といったようにお母さんたちの間にも新しいつながりが生まれてきました。子どもたちの間にももちろん新しいつながりができ、私たちが公園に行くとするで「わにわに」で知り合った小学生と幼稚園児と一緒に遊んでいることがあります。そのような光景を見ると私は心の底からうれしくなります。

## 3. 日常の中であそび場

「わにわに」は平日の3時からという放課後の時間に活動しています。それは、放課後は子どもたちにとって日常であり、日常の中での体験はより強いつながりを作れると思うからです。例えば、今の子どもたちには「竹とんぼ作り」は日常の遊びではありません。しかし毎日公園で竹とんぼを作って飛ばしっこをする機会があれば、それは「日常のあそび」になるのではと思います。このような非日常的な体験にはいろいろな驚きや発見があるからおもしろい、そしてそれを毎日のようにあそぶことで非日常だったものが当たり前の日常になり、自分のものとして生かせるようになるのではないかと思います。

## 4. 大人も子どももみんな一緒にあそぼうよ!

「あそび屋わにわに」の実践は、「自分が子どもたちとあそぶ場」を作ることであり、それによって「公園にいる子どもも大人もつなががる」「非日常的な事を日常にできる」「公園にいる人たちがみんなつながって笑顔でHAPPYになる、そしてその輪が広がっていく」。そんなあそび場になればと願っています。

## 6 講座名 楽しい!かしこくなる!ゲーム

講座長 市原哲也 (社会科学教育専攻3年)

### ○学生スタッフ名

堂前 直人 (障4)    池田 桃子 (障4)    大川 雅也 (社3)    大橋 正章 (社3)  
 江口みなみ (言3)    太田 真美 (言3)    桃澤 佑子 (芸3)    三浦 沙織 (生3)  
 山田 貴之 (理2)    金井 和也 (心1)    廣田 俊介 (織1)    松本さとみ (茨1)

○参加者    子ども 13名    保護者 6名

### ①講座の概要

「できた!」「勉強って楽しい!」という子どもたちに成功体験をしてもらうためにこの講座を開きました。なぜなら、子どもたちが勉強を好きになるためには「自分もできる」という自信が必要だと考えるからです。

普段は「YOU 遊世間ワールド」に参加する傍ら授業の勉強会を開いているメンバーが集まり、様々な学習ゲームを行い子どもたちと一緒に楽しみました。

### ②当日の活動日程

9:45	はじめの会	12:15	パソコンの学習ゲーム
10:00	アイスブレイク	12:45	英会話
10:15	漢字のゲーム	13:00	五色百人一首
10:35	休憩	13:45	表彰式
10:55	チャレンジランキング	13:50	体育館へ移動
11:30	昼食		

### ③準備段階の話

学生メンバーで講座を分担し、最初は各自で練習をしてもらいました。講座は、勉強会で学んだゲームを取り入れて構成しました。そして、「YOU 遊フェスティバル」が近づくと、全員で集まって分かりにくい部分はないか検討会を行いました。それぞれの学習ゲームに対して次々と代案が出され、私たち自身もとても勉強になりました。

### ④当日の子どもの様子

私たちの講座は、第一希望の子どもがわずか3人。残りの9人のほとんどが第3希望でした。しかも、学年が幼稚園児・小2・小6とかけ離れていました。しかし、学年の差を感じさせないほど盛り上がりました。特に漢字のゲームでは6年生が知らない漢字を2年生が見つかることもあり、完全に立場が逆転しました。そして、「私かしこくなった気がする!」と嬉しそうに話をしてくれる子もいました。

最後に全員に表彰状を渡すと、嬉しそうに抱えながら帰って行きました。

### ⑤学生スタッフの感想

私は、五色百人一首をしました。百人一首を5色に分け、20枚で対戦することで短い時間で勝負がつく教材です。2年生は青色。6年生は緑色という様に学年で分けました。上の句を読んでいる間は会場がシーンとなり、下の句を読んだ直後に「はい!」という元気な声が教室に響きました。他の講座同様にどの学年もとても熱中していました。

この講座を準備するにあたって、札の読み方は朗々としているか。1回に指示をいくつも出

していないかを中心に検討してきました。勉強会で現職の先生を招いて検討をしてもらったこともありました。準備はととても大変でしたが、子どもたちの笑顔を見て「準備をしてきてよかったな」と感じました。これからも勉強会で授業の腕を磨き、「YOU 遊フェスティバル」のような場で子どもたちに楽しんでもらいたいと思いました。

## 7 講座名 ビー玉コースター！！+理科実験！

講座長 坂本 英幸（理数科学教育専攻3年）

講座長 小林良太郎（理数科学教育専攻3年）

### ○学生スタッフ名

池田 翼（岐2）	宇賀地由里（理1）	大谷 春花（言1）	片桐 清史（理2）
片原 範子（理1）	河住 恭兵（理1）	小阪 佑騎（理2）	小松 智恵（社3）
島田英一郎（理2）	杉山 諒（理2）	中嶋 健雄（理3）	中出 智章（理3）
根岸 徹（理2）	原 卓也（理3）	堀井 大輔（理2）	本田 智大（横2）
松井 遥（理1）	横山 教一（理3）	若林 幸大（理2）	和田 明莉（茨1）

○参加者 子ども 24名 保護者 8名

### ①講座の概要

今回、この講座には数学科の2人が講座長ということだったので、理数科学教育専攻の人たちがスタッフとしてたくさん参加してくれた。子どもたちと理科実験をしてみたい、また、一緒に工作をして楽しい時間を過ごしたいと考え開いた。当日の活動の中でビー玉コースターを作るためのキットを配布し、子どもたちのそれぞれの創造性でオリジナルのビー玉コースターが完成できることを目標とした。

### ②当日の活動日程

9:45 はじめの会、アイスブレイク、理科実験	12:25 製作再開
10:00 見本提示	13:30 製作終了、終わりの会
10:30 製作開始	14:00 講座終了
11:45 お昼休憩、理科実験	

### ③準備段階の話

準備は8月から始めました。子どもたちに提供する分のビー玉コースターを作るためのキット作りがととても大変でした。また、理科実験をするのにも時間が限られており、何をどのタイミングで行うかの準備と検討にととても時間がかかりました。準備段階から手伝ってくれるスタッフがそれほど多くなかったため、一人ずつの負担が大きく、ととても大変でした。一番準備に時間がかかったのが、理科実験を説明するための模造紙作りでした。子どもにもわかりやすいものになるように意識して準備しました。

### ④当日の子どもの様子

みんな楽しそうに、オリジナルのビー玉コースターを作っていました。理科実験にも興味を持ってくれたようでした。

### ⑤学生スタッフの感想

初めて「YOU 遊フェスティバル」に参加してみて大変なことはたくさんあったけれど、当日は来てくれた子どもや親御さんたちに喜んでもらえて感激でした！担当は、牛乳パックを

使ってコースターのレールや支柱を組み立てていくという活動でした。予想以上に作成のペースが速く、午前と午後で約3時間程作成する時間を設けていたのですが、午前中だけで完成する子どもが出てきてしまい、子どもの力に驚かされる反面、その子どもは残りの時間に何をしていたら良いかという困惑もありました。

また、ビー玉コースターの他に理科実験を楽しんでもらおうということから、はじめにアイスブレイクをし、次にお昼の時間に理科実験を見せ、実際に遊んでもらう時間を設けました。準備は相当大変だったのですが、設定されたタイムスケジュールの中で、子どもを引きつける取り組みを盛り込むことができました。

今回の「YOU 遊フェスティバル」に取り組んでみて、スタッフ一人一人から学ぶことがたくさんありました。説明書通りのコースターを作った子は一人もいなく、それぞれが工夫して自分たちの想像以上のものがたくさんできました。

## 8 講座名 つくろう ほくらのひみつきち

講座長 中川 茜 (生活科学教育専攻3年)

講座長 宮尾 亘 (教育実践科学専攻2年)

### ○学生スタッフ名

齊藤 健治 (言4)	黒岩 佳奈 (生3)	河合旗与昂 (生3)	小林 一晃 (生3)
重田 直幸 (理3)	鈴木 梢 (理2)	岩本 芙美 (障2)	井上 知洋 (障2)
小松 静 (障2)	武重彩那 (県短2)	高橋真依 (県短2)	菅原千史 (県短2)
白鳥 京志 (理1)	土屋 克明 (理1)	峯村 和裕 (理1)	田澤 岳哉 (理1)
増田 千秋 (生1)	宮坂 愛美 (横2)	石井 信平 (文1)	篠原 麻里 (文2)
渡辺 誠 (茨2)			

○参加者 子ども 35名

### ①講座の概要

幼い時は、「秘密基地を作りたい。」そんな野望を誰しも持っていましたがね。実際は、なかなか場所が足りなかったり、材料がなかったり、親に怒られてしまったりしてなかなか自由に作れない。だから、子ども達がやんちゃに、材料なんて気にせずに、親に叱られるなんて考えずに、思いっきり秘密基地を作れる機会があったら面白いな。そのように考えて作ったのがこの講座です。

当日は、ダンボール、サランラップ、布、ビニール袋、生協のお弁当箱などのこちらが準備した材料に、子ども達が持ってきた材料を合わせ使用し班ごとに秘密基地を作りました。

活動の写真はDVDにして12月の下旬にクリスマスプレゼントとして各家庭に郵送しました。

### ②当日の活動日程

9:45 アイスブレイク (挨拶ゲーム、鬼ごっこ)	12:40 昼食
10:10 導入映像「30ぴきの子豚とおおかみ達」	13:15 みんなのつくった秘密基地で遊ぶ
10:20 グループアイスブレイク、作戦会議	13:45 プレゼントの贈呈
10:30 秘密基地作り開始	13:55 移動開始

### ③準備段階の話

初めはメンバーが2人の講座長だけだった。しかし気づけば21人も集まっていた。2人で

は絶対思いつかなかった発想がでてきたり、子どもがより楽しむことのできる工夫をすることができたのはスタッフのおかげだ。人の力の大きさをこの講座を通して強く感じた。私たちは途中から「衣装」「物品」「台本」「アイスブレイク」の四つの係りに分けそれぞれ進め、松本キャンパスの一年生にはグループアイスブレイクを任せた。係り分担を行ったことで一人ひとりが責任を持って取り組むことができたが、それぞれの仕事が重く、個人負担が大きくなってしまい苦しんでいたスタッフもいたように思われる。講座の進め方についてはスタッフの了解をしっかりと得て、その場にあったやり方を考えていかなければならないと感じた。

私たちは、当日の活動の講座の雰囲気をよくするために準備段階でのスタッフの交流を重要視した。スタッフにとってしやすい場所づくりは、子ども達にとっても活動しやすい場所とすることができたと思う。

直前準備、前日準備がとてもバタバタとしていた。スタッフのみんなを巻き込んで必死にみんな準備をし続けた。「ここまでこれをしなければならぬ」という計画が不確定であったことと、前日・当日にやるが多すぎたという2点が大きな原因だ。来年講座長をやる人には、スタッフの精神的余裕のためにも進行計画を大事にしてほしい。

準備を通して、「やりたいこととやれることは違う」ということを強く感じました。やりたいというイメージはあるし、一番良いところにもっていきたいけれども、企画準備を進めていく上で、何を一番大切にしていくかということをしっかり考えて進めていかなければならない。一番やらなければならないことのために妥協することも重要なことだと感じた。

#### ④当日の子どもの様子

秘密基地作りは順序を特に設けない自由なものだった。子ども達がそれで本当に作ることができるのか不安だったが、当日大半の子ども達は戸惑うことなくすぐに秘密基地作りに没頭していった。大きなダンボールを縦に長くひらき通路にしたり、小さなダンボールを横につなげて壁をつくり、箱を接続して倒れないように工夫していたり、ダンボール横に継ぎ合わせていきお風呂に見立てたり、回転式通路を作ったり…。子ども達の発想は予想していたよりもずっと豊かで驚いた。学生だけでプレをしたときには思いもつかなかった発想がぼんぼんできて、子ども達の意欲や想像力、感性が本当にすばらしいものだと感じた。

今回本当に子ども達の力におどろいた。こんなに力を出すことのできる場は普段あんまりないかもしれない。テレビゲームや漫画などすでにある遊びが溢れる時代に住む子ども達には、秘密基地で見せてくれたような自分の力を思いっきりつかって遊ぶことのできる場が普段ほぼないと思う。力を解放していける場として素材遊びの重要性を感じた。何も無いところから自分の遊びを作っていくという体験はとても重要だと思う。

#### ⑤学生スタッフの感想

広い空間と道具と環境が整っている状態であれば、子ども達は、自分たちから作り、学んでいくと感じた。幅広い年齢層であったが、子ども一人ひとりがそれぞれ違った楽しみや学びがあったと思う。(重田) 子どもが自分のつくった落とし穴と称した机と机の穴にはまって怪我をしてしまったとき、急遽話し合いの場を設けたのだが、口火をきったのが、小学校一年生の子で驚いた。それがキッカケで学生スタッフが促さなくても一人ひとりが発言する姿が見られて感動した。(高橋) 危ないから最初からやらせないのではなくて、子ども達に経験させて失敗して学ばせる姿勢は大切。子ども達が自分で実感することで、さらに良い秘密基地を作ろうと話し合うことは重要だと思った。(篠原) 当日初めて会ったもの同士なのに、すぐに打ち解

けることができる能力は成長するにつれて難しくなっていくものだと感じた。子ども達はそのような能力をまだ持っていて、それが子ども達のすごさだと思う。楽しそうに子ども達が作業しているのが印象に残った。(白鳥) 学生スタッフ同士の親交が深まって、ある程度打ち解けてから準備でき、それが、翌日での連携にもつながったところはよかった。(峯村) 考える力を育てるのに、秘密基地のような体験はすごくいいと思った。ここにダンボールをくっつければ、壁は倒れないぞってというような考えは日常生活の色んなところに出てくるし、建設的な考え方が出来るようになるのではと感じた。(渡辺) 学校っぽい匂いはなくて、ほぼ遊びに近いリラックスした環境が良かった。思い思いの秘密基地を実現するために、試行錯誤しながら制作していく経験は大切なことだと思う。(黒岩) いろいろ学生が予想し考えて設置したものが、思ったような効果をなさなかったのが印象に残っています。(小松) 時間や子どもの行動に関する見通しが甘いように感じたので、そのことに関しても準備段階でもう少し考えておくことが出来たのでは。(宮坂) 今まで子ども達に何を伝えようとして接してきたのかということについて、「YOU 遊フェスティバル」を通して考えさせられた。(宮尾) 「みんなで協力して大きな秘密基地を作ろう」という目標を立てていたが班によって自然に協力することができていたり、やはり個人作業に走ってしまっていたり反応はばらばらであった。同じ企画でもまったく違う反応が返ってくることを実感し企画の難しさを実感した。(中川)

## 9 講座名 どっこい☆ソーラン ～楽しくおどろうソーラン節～

講座長 渋谷美奈子 (教育実践科学専攻2年)

講座長 石原加奈子 (教育実践科学専攻2年)

### ○学生スタッフ名

下村 直樹 (実4)	上原 珠美 (障4)	山上 夏美 (障4)	田中 響 (理4)
松永弥奈美 (理3)	鈴木 里佳 (理3)	後藤 知子 (理2)	鶴田 純平 (実2)
黒木 李紗 (芸2)	鈴木 文香 (生2)	黒澤 春香 (生2)	

教育学部1年生 和っしょいメンバー

計 42人

○参加者 子ども 22名 保護者 5名

### ①講座の概要

今回私たちの講座は、学生スタッフ 42人という大人数でやらせていただきました。信大の全学部から学生が集まり、子どもたちに楽しんでもらえるよう一丸となって活動に取り組みました。普段子どもたちと接する機会のない学生も多かったため、学生たちにとっても「YOU 遊フェスティバル」への参加は貴重な経験でした。子どもたちに“人前で踊ることの楽しさ”や“ひとつのことをやり遂げる達成感”を味わってもらうことを目標にし、閉会式での発表会に向けて一日体育館で汗を流しました。

### ②当日の活動日程

10:00 グループ発表 アイスブレイク	13:45 グループ練習
10:30 学生によるソーラン節の披露	13:30 発表体形での練習 発表の準備
10:35 準備体操 グループごとソーラン節の練習	14:00 閉会式にてソーラン節の発表
12:00 お昼休憩	15:00 賞状の授与 解散



### ③準備段階の話

「ソーラン節を踊ろう」の講座は今年で4回目であったため、去年よりもさらにレベルアップした講座を目指し、企画・準備をしていきました。子どもと学生用のかわいいフェルトの名札や、発表の時に付ける髪飾りやはちまき、賞状などを手作りしました。どうしたら子どもたちが楽しく踊れて、より充実した講座にできるのか考え、グループわけやアイスブレイク、学生によるソーラン節の発表などの内容、方法を検討しました。当日準備の時間には、学生スタッフみんな、ソーラン節の振りの確認をし、子どもが楽しく覚えられるよう、みんなで振りに楽しい掛け声をつけました。

### ④当日の子どもの様子

アイスブレイクで、学生と子どもの両方が楽しむことができ、子どもたちの緊張がほぐれていったように思いました。グループに分かれ、学生と子どもがマンツーマン（以上！！）でソーラン節を教えていきました。最初は戸惑ってしまい、踊りたがらない子もいましたが、学生スタッフの楽しい声掛けと、練習の仕方を、それぞれのグループの子どもにあうように変えていくことで、だんだん練習の輪の中に入る子どもも増えました。練習は、付き添いのお母さん方にも参加してもらいましたが、子どもよりもやる気満々で踊ってくださった方も！！練習の最後には、発表の形で練習し、緊張した様子でしたが、本番は、大きな法被に身を包み、髪飾りやはちまきをつけてもらい、堂々と踊っているように感じました。最後にソーランマスターの賞状をあげたときの子どもの顔は晴れ晴れとしていました。

### ⑤学生スタッフの感想

4回目となる今年は、「サークルのメンバーでない子も受け入れよう」、「和っしょいの人たちにも学生レク・前夜祭・後夜祭に参加してもらおう」という新しい試みをしました。その結果、教育学部の一年生が一人参加してくれ、また和っしょいのメンバーから「前夜祭楽しかったー！！」という声を聞くことができました。新しいことに挑戦するのは大変でしたが、それ以上に得るものがあるのだと強く感じました。また、二日目はたくさんの子もたちと学生の笑顔を見ることができ、安心しました。限られた時間の中で一生懸命練習する姿や、閉会式の前の緊張した面持ちを見て、（この講座を開いてよかった）と思いました。まだまだ改善の余地はあったし、もっとみんなで協力してできたら良かったと思う部分もありますが、なんとか笑顔でやりきることができ本当に良かったです。最後に！！同じ講座長だった渋谷美奈子へ。一緒に講座長ができて本当に良かったです。優柔不断でいつも美奈子に聞いてばかりでごめんね。本当にありがとう！！

（石原加奈子）

もっともっと子どもたちを楽しませることができる講座ができたんじゃないかなと感じています。初めて子どもと関わる活動の企画、準備をやらせていただきましたが、「やって、やりすぎることはない！」と実感しました。今回、サークルのメンバーの他に教育学部の一年生と一緒に活動できたこと、「YOU 遊フェスティバル」の講座の一員として、他学部の学生スタッフと前夜祭、後夜祭に参加することができたことは、本当にうれしく感じました。他学部からは「子どもと触れ合う機会が少ないので、子どもと活動できて楽しかった」という声をたくさん聞きました。「YOU 遊フェスティバル」の可能性と、よさこいで広がる輪を改めて感じました。子どもたちの中に「今年で3回目！」という声や「また来年もソーランやりたい」という声を聞きました。よければ、来年もまたさらにバージョンアップしたソーラン節の講座ができれば……と感じています。様々な経験をさせてくれた「YOU 遊フェスティバル」に

感謝です。

(渋谷美奈子)

## 10 講座名 トレジャーハンター

講座長 田中陽菜 (言語教育専攻2年)

講座長 戸谷望美 (言語教育専攻2年)

### ○学生スタッフ名

園田 泉 (実2)	田畑隆太郎 (実2)	内田健太郎 (言2)	熊井 彩水 (言2)
小出明日美 (言2)	國分恭太郎 (言2)	小島 夕貴 (言2)	小林 乙絵 (言2)
塩澤亜沙美 (言2)	中村 幸恵 (言2)	樋本めぐみ (言2)	松田 千里 (言2)
峰崎 潤 (言2)	坂本明日香 (言1)	山本 溪子 (言1)	米山 幸恵 (言1)
金箱 仁志 (理1)	山浦 岳 (理1)	天野 佑紀 (心1)	荒井陽子 (県短1)
安藤 佑美 (茨2)			

○参加者 子ども 34名 保護者 5名

### ①講座の概要

ストーリー設定は西遊記にしました。ある日、悟空たち一行は金閣、銀閣の手下たちに宝の地図を奪われてしまいます。その宝の地図をとりかえし、宝を手に入れるため、子どもたちは7班にわかれ、キャンパス内を移動します。その宝の地図をとりかえすには、各ポイントにいる手下から出される課題に班の仲間とともに取り組み、クリアしなければなりません。友達とともに課題に取り組み、その達成を目指すことを通して、協力することの大切さ、楽しさを感じてもらおうことをねらいとしました。

### ②当日の活動日程

9:45 はじめの会、班分け、アイスブレイク	12:30 宝探し (後半)
10:15 宝探し (前半)	13:30 おわりの会
11:30 お昼	13:45 講座終了

### ③準備段階の話

宝探しの設定、形式を決めるのに結構時間がかかってしまい、実際の準備にかける時間が少なくなっていました。しかし、スタッフみんなで協力しあって、楽しく準備をすることができたと思います。

### ④当日の子どもの様子

寒いなか、課題から課題までの間をずっと元気よく走っていました。どの子ども笑顔が輝いていて、とても楽しそうに宝探しをしている姿が印象的でした。準備を頑張ってよかったなと思いました。

### ⑤学生スタッフの感想

- ・スタッフとして子どもたちと触れ合えたことは将来の自分にとってよい経験になったと思う。また、普段、大学ではみんなばらばらに生活しているが、このようにみんな協力して何か一つのことに取り組める機会が持てたことはとてもよかった。
- ・準備はとても大変だったけど、子どもたちが楽しんでくれてよかった。子どもたちと仲良くなれてあっという間の一日だった。
- ・準備も当日も楽しかった。子どもたちのキラキラした笑顔を見て癒された。参加してよかつ

たと思う。

- ・一番の目的は「子どもたちを楽しませよう」であり、そのために何をするかいろいろと考えた。その目的を達成するため、トレジャーハンターの仲間と楽しみながら、協力して準備をすすめることができた。本番は少し準備不足の部分があって不都合なこともあったが、子どもたちが感想で「楽しかった」と言ってくれてうれしかった。やってよかったと本当に思った。
- ・「YOU 遊フェスティバル」はみんなで協力して一つのことをやり遂げる達成感を味わえた。この経験をこれからの学校生活や教育実習に活かしていきたい。

## 11 講座名 わくわく漢字ワールド

講座長 藤田裕介 (社会科学教育専攻2年)

### ○学生スタッフ名

室岡 聡也 (生2) 東野 千尋 (芸2) 島崎 涼子 (芸2) 阿部 由季 (芸2)  
乗倉由香里 (言1) 山越 俊 (社1) 元越 朝香 (茨2) 宇野早織 (岐聖1)

○参加者 子ども4名 内2名欠席

### ①講座の概要

今回、この講座は「信大茂菅ふるさと農場」で活動をしているメンバーたちを半ば引きずり込んで実施することにしたものです。当初、何か講座を開いてやってみたいという思いがあった私は、チラシに書いてあった漢字博士というものに興味を惹かれました。もともと漢字が好きなこともあり、漢字を使った面白い講座をやろうと思い立ち、この講座をやることにしました。

### ②当日の活動日程

10:00	自己紹介、アイスブレイク	12:30	お昼休憩
10:30	合体漢字をやる	13:00	飛び出す漢字を作る
10:45	休憩	13:50	講座終了
11:00	スタンプ作り		

### ③準備段階の話

この講座では情報の伝達が杜撰過ぎたため、スタッフの皆さんからとても怒られました。そのため最後の1週間は準備を急ピッチで進めることになってしまい、スタッフにはとても迷惑をかけてしまいました。

### ④当日の子どもの様子

最初、音楽が鳴らなかつたり進行係(私)が緊張してしまつたりしたため、それが子どもにも移つてしまつていた。ですが、アイスブレイクや私たちのやり取りを見ていく中で緊張は少しずつほぐれていきました。最初の合体漢字では予想以上に興味を示していました。スケジュールどおりに進行するために途中で終わりにしましたが、そうしなければずっと合体漢字をしていたと思います。スタンプ作りではみんな一生懸命自分の好きな漢字を作っていました。最後の飛び出す漢字では、高学年であつたためか、なかなか絵を描く作業が進みませんでした。

### ⑤学生スタッフの感想

いざ当日活動をやってみると、予想外の事態が多く起こりました(音楽が鳴らない、思いの

ほか合体漢字に興味をもった、昼食時間が遅れる、最後の企画のために十分な時間を取れない)。そのため、スタッフの人たちに不安を覚えさせてしまいました。また、スケジュールを重視するあまり子どもたちが夢中にやっていた合体漢字を中断させてしまい、申し訳ないと思いました。もっと自分たちの予定を考えるよりも、子どもたちの興味を重視してあげられれば良かったと思います。最後の飛び出す漢字では、どちらかという低学年向けに用意していた企画であったため、子どもたちもどうすればいいか困ってしまっていました。参加人数と子どもの学年が分かった時点で企画を変更すべきでした。あと、昼食のプレをしっかりと行っておけば当日遅れることがなかったと思います。

## 12 講座名 不思議がいっぱい

講座長 山崎慶太 (理数科学教育2年)

### ○学生スタッフ名

井手上将太 (理2)	小林 洸 (理2)	坪井 辰斗 (理2)	望月 省吾 (理2)
森 三主輝 (理2)	吉田 雄哉 (理2)	原 耕平 (理3)	斎藤 文音 (理1)
佐久 理絵 (理1)	高見澤 誠 (理1)	服部 直幸 (理1)	池田 貴広 (野1)
木村 彩乃 (県1)	熊谷 恵美 (県1)	坂西 麻衣 (県1)	前嶋ゆうこ (長3)
山本 香織 (文3)	中嶋 辰弥 (横3)	平松 進哉 (茨3)	

○参加者 子ども 18名 保護者 12名

### ①講座の概要

身近なものを使って、子どもたちに不思議で面白い体験をしてもらい、日頃当たり前と思っている物事に対して疑問や興味・関心をもつことをねらいとして講座を開いた。また、日頃あまり子どもと接する機会の少ない学生を中心に企画・運営することで、子どもとより多く接することのできる場を設けることを意識した。

### ②当日の活動日程

10:00 講座説明	12:45 わたあめづくり
10:10 班行動開始	13:45 まとめ、片付け
11:50 昼食	14:00 講座終了

### ③準備段階の話

1か月前から各ブースでの企画内容を話し合った。各々が子どもの楽しめそうな内容を持ち寄る形式をとったが、具体案を決めるまでには至らず、結局内容が決まったのは開講の1週間ほど前だった。そこから毎日放課後に集まり、1日1ブースのペースで準備を進めた。わたあめづくりは、実物を見なければイメージがわからないということもあって、準備に多少時間がかかったものの、前日準備までにはすべての準備が一通り終わっている状況に至ることができた。

### ④当日の子ども様子

最初は講座内容がいまいち把握できず戸惑う姿も見られたが、時間がたつにつれて初対面の子ども同士での会話がみられるようになった。また、企画の中でのこちらの問いかけに対して、我先にと考えを言ってくれる子どももいて、特別緊張している様子はなかった。学生スタッフとじゃれる姿もあり、非常にいい雰囲気の中活動を進めることができたように思う。

### ⑤学生スタッフの感想

準備段階で、準備スタッフ内での意思の疎通があまりとれず、結果的に内容の決定が予定より大幅に遅れてしまったのはよくなかったが、その後の準備には多くのスタッフが自分の時間を割いて協力してくれたので、非常に円滑に作業が進んだ。また、今回はスタッフの自発的発想や行動をメインにおき、各ブースでの進行は担当スタッフに任せる形をとった。最初のうちは賛否両論であったが、話し合いや準備を進めていくうちに建設的な意見が多く出るようになり、当日の企画も問題なく進行していくことができた。これは将来に生きる力をつけることができるいい経験となった。

学生が「より多く子どもたちと接する」という目的を達成することができたのは大きな収穫であったが、準備段階で予定から大幅に遅れてしまったのが今後の課題として挙げられる。また、当日参加のスタッフとの意思の疎通が不十分だったせいで、進行に若干のトラブルがあった。改めて連絡を密に取り合うことの重要性に気付かされた。

最後に、子どもたちの笑顔を随所に見ることができ、充実感あふれる経験ができたと思う。

## 13 講座名 みんなあつまれ！わんぱく大運動会

講座長 土屋知毅 (心理臨床専攻2年)

講座長 佐藤悠司 (心理臨床専攻2年)

### ○学生スタッフ名

岸野 佑哉 (心2)	山下 貴 (心2)	相川 和也 (地2)	上野 哉的 (地2)
神谷明日仁 (地2)	浅井 美咲 (芸1)	伊井 健太 (地1)	恩河 梢 (社1)
武井 祐美 (地1)	土屋 萌 (生1)	林 香那子 (実1)	福田 朱里 (障1)
湯本 哲 (理1)	大森 有起 (清短2)	岡田さや香 (清短2)	竹内 理恵 (清短2)
山岸 宏子 (清短2)	清水 瑠未 (清短1)	轟 ひろか (清短1)	高橋 優一 (岐聖2)
吉田 幸恵 (茨3)			

○参加者 子ども23名 (当日18名) 保護者8名

### ①講座の概要

今回、この「みんな集まれ！わんぱく大運動会」という講座に信大だけでなく他大学からも23名というたくさんのスタッフが参加してくれました。

今の子どもたちは昔よりも外で遊ぶことがなくなったり、大勢で遊ぶことが少なくなったりしていると聞いたことがあるので、寒くてもみんなで体を動かしたり、協力して何かを成し遂げることの楽しさや大切さを知ってもらいたいと思いこの講座を立ち上げました。また、子どもたちだけでなく自分や友達の子、普段接することのできない大学生というスタッフたちと接することで、なかなか経験できないことを体験してもらいたいと思いました。

### ②当日の活動日程

10:00	スタッフ紹介、アイスブレイク	12:15	ポイポイピーヤ (玉入れ)
10:25	チーム分け、アイスブレイク (チーム内)	12:40	マッハGO!GO!GO! (雑巾がけ競争)
10:50	しっぽでゲッチャー (しっぽ取りゲーム)	13:05	みんなでジャンピング～ (大縄跳び)
11:15	でこぼこフレンズ (障害物競争)	13:20	表彰式
11:30	お昼休憩		

## ③準備段階の話

講座長二人で企画案を練っていたときは「これくらいできればいいなあ」という雰囲気がありました。他大学のスタッフと打ち合わせをすることで、自分たちの企画の甘さを知りました。そうしているうちにフェスティバル当日が近付いてしまい、当日1週間前は、各種目の道具を準備するのに、とても慌ただしくなっていました。

## ④当日の子どもの様子

最初は知らない人たちがばかりだったせいか、とても静かでした。しかし、人間知恵の輪など他人と直接触れるアイスブレイクをすることで次第に仲良くなれている様子でした。

各種目チームで協力して乗り越えていることができていた様子でした。お昼を過ぎ午後の部が開始されたあたりから、子どもたちの緊張が取れたせいか、他のチームの子どもやスタッフと仲良くなり楽しんでもらっているようで嬉しかったです。

## ⑤学生スタッフの感想

参加してくれたスタッフから「いい経験ができた」「来年から社会人になってしまうけど、社会人枠としてでもいいから参加したい!」というとても嬉しい感想をいただきました。去年フェスティバルに参加して「いい経験ができた」という自分の思いが、他のスタッフたちにも伝わっていたようで、この講座を立ち上げて良かったなと思いました。

## 14 講座名 世界記録に挑戦!牛乳パック紙ヒコーキ

講座長 志甫知紀 (生活科学教育専攻2年)

## ○学生スタッフ12名

小島 一生 (生2) 谷内 仁香 (岐聖1) 木村 僚 (生3) 間瀬 厚仁 (生2)  
山口 奈奈 (生3) 佐藤 遼 (文3) 小林 和仁 (生3) 堂添 祐樹 (文3)  
今村 貴之 (生3) 小松 裕貴 (生3) 志甫 知紀 (生2)

○参加者 子ども 25名 保護者 15名

## ①講座の概要

今回、生活に身近なものである牛乳パックを使って本格的な紙ヒコーキの製作をした。紙ヒコーキの製作ははさみや牛乳パック専用の接着剤などを用いて、子どもには若干難しい作業であったので、前日の準備のうちに学生スタッフで9割近くヒコーキを完成させてしまい、実際の紙ヒコーキ製作の時間は30分程度とした。その分、マジックやシールを用いて「オリジナルの紙ヒコーキをつくる」ということを目的としてヒコーキのデザインの時間をたくさんとった。午後は室内での的あてゲーム、グラウンドでの飛距離を競うゲームを実施し、ヒコーキ飛ばしを存分に楽しんでもらった。

## ②当日の活動日程

10:00~10:45 導入 (志甫)	11:50~12:20 昼食
・紙ヒコーキについての説明	12:30~13:30 飛ばす
・自己紹介 アイスブレイキング	・室内 (的あて) ・グラウンド (飛距離)
10:45~11:50 製作	13:40~13:50 まとめ
・デザイン ・製作	・プレゼンでまとめ (小島)

### ③準備段階の話

今回、子供たちにはオリジナルの紙ヒコーキのデザインを主にしてもらったので、紙ヒコーキの製作は9割、前日に学生スタッフがやってしまった。具体的には牛乳パックへの型取り、切り抜き、パーツの貼り合わせなどである。当日子どもたちが行ったのは主翼と尾翼を貼り付ける作業だけである。

当日は子どもたちを8つのグループに分け、グループごとに製作活動を行った。

### ④当日の子どもの様子

それぞれオリジナルのヒコーキが作れたのでとても喜んでくれた。シールや信州大学のロゴマークなどを用意したのが良かったと思う。実際に飛ばす時には室内でもグラウンドでも元気いっぱい子どもたちが走り回り、ヒコーキを飛ばしていた。

### ⑤学生スタッフの感想

幼稚園児が多かったのでうまく運営できるか不安な面があったがなんとか無事に終えることができた。他大学から来ていただいた学生スタッフの方々は非常に優秀で、おおいに協力していただいた。他の大学の人たちとこのように交流できる活動は非常に有意義であるように感じた。

## ◇実践から得た「臨床の知」

### 人と人との関わり大切さ

高池亮輔（保健体育専攻3年）

「YOU 遊フェスティバル」は「YOU 遊世間」のプラザの中でも一番大きな規模のプラザであると思う。今年は学生、子ども、保護者、地域協力者の方々と合わせて約900人と過去最大規模の「YOU 遊フェスティバル」を開催することとなった。さらにはこの「YOU 遊フェスティバル」の成功は多くの人たちのバックアップがあってこそ成り立っているものだ。学生はこの「YOU 遊フェスティバル」を通して、どのような場面で人と人との関わり大切さを知り、そこから何を学び取っているのか考えていきたい。

#### 1. 子どもとの関わり

・子どもたちはこちらが予期しないことをしたり、面白いアイデアを持っているなど思いました。子どもがケガをした時に、班長がみんなを集めて、どうしたらケガをしない基地になるかを話し合わせて、子どもと一緒に改善していく姿勢がすばらしいと感じました。

（「つくろうぼくらの秘密基地」参加学生の感想）

・家を作っている最中、「こんなのがいい!」、「これ作ってもいい?」とどんどん意見が出てきて、やりたいことを全てやりつくした感じで、子どもたちも、私たちも達成感があって良かったです。

（「オカシ de 家づくり」参加学生の感想）

私たちは普段このような活動をする上で、様々な企画を考え、子どもたちに与えている側のように考えがちである。しかし今回の学生の感想からもわかるように子どもたちの創造力、行動力には計り知れないものがあるように思う。この「YOU 遊フェスティバル」ではどの講座も学生が何度もプレや教材研究を重ねて望んでいるにもかかわらず、子どもの発想、アイデアに驚かされている学生は少なくない。これは実際に熱心に企画した学生と楽しみに来てくれている子どもたちが関わりあう場があるからではないだろうか。また今回の「YOU 遊フェス

ティバル」ではどの講座も子どもの主体性を大事にし、学生が一方的に指示するという場面が少なかった。そのおかげで子どもたちから自発的な意見が活発に生まれ、子どもも学生も夢中になって活動に取り組んでいる姿が見られた。

また子どもたちにとっても自分の学校以外のまったく出会ったことのない子ども同士が触れ合う貴重な機会になっている。その日会ったばかりの子どもたちがひとつの活動を行うことを通して、話し合い、ひとつのものを作り上げていくことは子どもたちにとっても良い刺激になっているに違いない。

## 2. 学生同士の関わり

今回、学生スタッフが300人を超すということで、1日目の午前中の時間を使って学生レクレーションという形をとり、全体でのアイスブレイク、無作為に選ばれた班ごとの課題解決オリエンテーションを行うことで、講座以外の学生同士の交流、他大学、他学年の交流をはかろうと考えた。

- ・レクは仲良くなるすごく良い場でした。午前中という短時間の中でたくさんの人と関わることができました。みんなでひとつのことを解決していくことで、信頼や協力も生まれたと思います。
- ・講座の中だけでなく、「YOU 遊フェスティバル」に参加しているみんなと関わる事が出来て、とても良い機会でした。人と人とのつながりの大切さを改めて実感し、初対面の人でも気軽に接することが出来て良かったです。

このような機会を設けることにより、普段絶対に接することのない学生同士の関わりが生まれる。おそらくすぐに知らない人の輪になじめる人もいれば、なじめずに緊張してしまう人もいだろう。しかし学生にはこういう場を通して人との関わりの面白さ、大切さに気づくいい機会になった。また今回の「YOU 遊フェスティバル」での学生の意識が講座ごとのまとまりではなく、スタッフ全体で作上げたという意識になっていたと感じた。

また今回の「YOU 遊フェスティバル」にも多くの県外からの他大学の学生が来てくれた。他大学でも私たち「YOU 遊世間」のような子どもと触れ合う活動をしている学生が多くいる。大学ごとに違った学びをしている学生が関わり合うことで今までになかった考え方、子どもとの関わり方を学び合うことができ、学生のとてもいい刺激になっていると感じる。

以上のように子どもとの関わり、学生同士の関わりという点から見てこの「YOU 遊フェスティバル」は非常に深い意味を持つ活動となった。しかし成功の裏にはさらに大きな支えがいくつもあったことを忘れてはならない。「YOU 遊フェスティバル」を作り上げていく中で、学生スタッフ、「YOU 世間」の連携団体の皆様、長野市 PTA 連合会、保護者の方々、大学関係者（教職員、生協、学務、会計係）など多くのご支援・ご協力のもと成り立っている。

## 3. 学生スタッフの協力

- ・食事係をやって気付いたことは、人の支えでした。300人分だったので、夜遅くまでかかってしまったけど、4年生の先輩方が手伝ってくれたのがとても嬉しかったです。自分たちの講座の準備も忙しいのにそんなことはいいからといって手伝ってくれたり、失敗してもあせらずに大丈夫だよといって対応してくれたり、食事係を通して人の暖かさに触れることが出来ました。
- ・本当にいつでも実行委員以外の人に支えられていたのだと思います。1日目のお昼や前夜祭、後夜祭の会場作りも本来なら実行委員で準備すべきものだと思いますが、参加した学生が進



んで手伝ってくれ、1日目のお昼にはいろんな人が盛り付けを手伝ってくださった。「YOU 遊フェスティバル」では「人の力」のすごさを直に感じる事が出来たと思います。

今年実行委員は7人で発足した。7人で約900人の人を動かすのは想像以上に大変であった。しかし子どもの募集をいくつもの学校や何件もの知り合いに回ってくれる信大生、食事の準備を夜遅くまで手伝ってくださった先輩方、当日の会場作りを率先して手伝ってくれた1年生や他大学の学生など実行委員では補えない部分を文句ひとつ言わずに助けてくれた学生スタッフに支えられて出来上がった「YOU 遊フェスティバル」であるように思う。実行委員はスタッフの皆さんとの関わりを通して人と人が支えあうことの大切さ、感謝する気持ちを学ぶことが出来た。

#### 4. 「YOU遊世間」の連携団体、長野市PTA連合会の皆様の協力

「YOU 遊フェスティバル」では毎年長野市の小・中学生を中心に参加者の募集を行っている。その中でも「YOU 遊世間」でお世話になっているプラザの子どもたちの参加が特に多い。これもプラザで提携している地域の方々のおかげである。例えば青木村教育委員会の方々には青木小学校への募集チラシの配布、当日バスでの送り迎えなど子どもたちが参加しやすい環境を整えてくれているからである。他のプラザでも「YOU 遊フェスティバル」の宣伝する時間をとっていただくなど多くの協力をしていただいた。長年関わってきた地域と「YOU 遊世間」の関係があり、地域の方々も信大生の行う企画に信頼を寄せていただいているから多くの子どもが参加してくれているのではないかと思う。このような密な関わりや信頼を大切にしていくことはとても大事なことでこの「YOU 遊フェスティバル」を通して感じる事ができた。

また今年は長野市PTA連合会の皆様にもお力添えいただいた。平成20年8月2日に行われた「長野市親子体験教室」において私たち「YOU 遊世間」から4つ講座を出させていただいた。そのことがきっかけで長野市PTA連合会の皆様には、私たち学生の活動を認めていただき、今回の「YOU 遊フェスティバル」の募集チラシを長野市内の各学校に配布して下さるといふ大きなご協力をいただいた。私たち学生だけでは決して長野市内の全小学校にチラシを配布することはできない。しかしまだ学生である私たちの活動に「学生なのによく頑張っているね。」「面白そうな活動じゃないか。」と興味を示していただき、協力していただけたことに本当に感謝したい。

そして「YOU 遊フェスティバル」の中心でもある子どもたちを集めるにあたってこれほどまでに地域の方々の方が大きく、私たちの活動を支えてくれているかということ学ぶことができた。

#### 5. 保護者の方々の協力

「YOU 遊フェスティバル」には毎年多くの保護者さんにもご参加していただいている。これは学生にとって子どもと触れ合うだけでなく、来てくれた子どもたちの保護者さんに関わるとても貴重な経験になっている。学生としても子どもとのかかわりは慣れているが、保護者さんとはどうやって接してよいかわからないという悩みの意見もリフレクションシートにはいくつかあった。しかし「YOU 遊フェスティバル」を通して保護者さんに関わることで今後どうやって関わっていけばよいか考えるきっかけになってくれればよいと思う。

また保護者さんには「YOU 遊フェスティバル」に理解を示していただき、大事な子どもたちを学生に預けていただいたり、当日の送り迎えをしていただいたり一緒に活動に参加してい

ただいたりと本当に感謝したい。応募のはがきを見ると、「あまり人と関わることが得意でないので、ぜひ子どもを大学生のお兄さん、お姉さんと関わらせたい。」とか「子どもにいろいろな体験をさせてあげたい。」など学生に寄せる思いの強さを感じることができる。こういった保護者さんの願いを忘れずに私たちは活動していかなければならないのだと強く感じる事ができた。

#### 6. 大学生協・学務係・学部会計係の方々の協力

この「YOU 遊フェスティバル」はなにも学生の力だけで成り立っていたわけではない。信州大学教育学部のキャンパスを使わせていただいたり、食事を準備する関係において多くの大学関係の方の協力を得ている。大学生協の方には休日にも関わらず2日間通して生協を開けていただいたり、学務係の方には教室やストーブ、暗幕などの物品の手配をしていただいたり、学部会計係の方には駐車場のことや学生が使う物品のことをお願いしたりと本当に大きな協力をいただいている。学校側の協力がなければ「YOU 遊フェスティバル」の活動は決して成り立たないので、学生だけでやっていると思わずに、私たちを影でバックアップしてくださる方々に感謝することを忘れてはいけないと思う。

#### 7. 大学教員の協力

最後にこの「YOU 遊フェスティバル」では信州大学の先生方に多くのご理解とご協力を得て成り立っていることに感謝したい。調理室を使わせていただく際にご理解をいただいたり、集中講義の日程をずらしていただいたり、その他にも普段授業で使う教室を使わせていただいたりなど大変ご迷惑をおかけしてしまった。しかしお願いなどに行くと激励の言葉をいただくなど学生を支援していただけることが本当にうれしかった。

また今回の「YOU フェスティバル」の1日目に土井先生がご出席していただけない時に「YOU 遊世間」の先輩にもあたる安達先生には急なお願いにもかかわらず、前夜祭に出席していただき、激励の言葉をいただき、当日の活動にも見学に来てくださった。

また担当教員の土井先生の協力がなければ決して成功することができなかった。私はこの「YOU 遊フェスティバル」の実行委員長になった時に「今年は子ども1,000人集めたい!!」と言った。この冗談に聞こえるような私の目標を土井先生は真剣に聞いてくださり、子ども1,000人集まると信じて、応援してくださった。そのため長野市PTA連合会、市内の児童センター、フリースクール、講演会など様々な場所で先生自ら「YOU 遊フェスティバル」の宣伝をしてくださり、結果子ども1,000人とまではいきませんでした。参加者の合計が約900人と多くの参加者に「YOU 遊フェスティバル」を楽しんでもらうことができた。

また今回土井先生の提案により成人向けの講座を開くという新しい試みも達成できた。私はこの「YOU 遊フェスティバル」を学生と子どもが関わる場と考えていたが、土井先生は学生、子ども、そして社会を経験してきた大人の方々の三者で交流することにより、より深いつながりが生まれると考えておられた。その第一歩がこの「YOU 遊フェスティバル」で達成できたと思う。

土井先生とともに作り上げてきて私が感じるのは行動することの大切さであった。新しいことを頭で考え、話し合いすることは簡単にできる。しかしそれを実際の行動に移すことはなかなかむずかしい。しかし土井先生は積極的に行動に移していかれる。そんな姿を拝見して、土井先生とこの1年間関わらせていただいたことで行動することの大切さを大いに学ぶことができた。

最後に、この「YOU 遊フェスティバル」を通して食事、施設の使用、物品のこと、子どもや学生のことなどにいつでも気を配っていただき、バックアップしてくださったこと、そして毎年「YOU 遊フェスティバル」を行わせていただいていることに感謝したい。

#### 8..最後に

以上のように第7回「YOU 遊フェスティバル」は多くの関わり、協力がなければ成功することはできなかった。本当に多くの方に感謝したい。参加者が関わった人はそれぞれ違うだろう、しかしその中でそれぞれが関わった人から学びを得たり、感謝をしたりすることができたのではないだろうか。

普段は何気なく人と関わっていることが、この「YOU 遊フェスティバル」を通して人との関わり大切さを感じ、見直させてくれる活動になっている。こんなに多くの人が集まる場を作り出すことはなかなかできない。ゆえに「YOU 遊フェスティバル」は学生も子どもも大人もすべての人がこの貴重な場を共有することで人と人とが関わることの面白さ、大切さに気づき、今後の私たちの生活に大きな影響を与えることができると思う。

## 「信大茂菅農業義塾」の開設

飯村昌史（大学院臨床心理学専修1年）

### 1. 参加者の「大きな」リソース

「信大茂菅農業義塾」開設となる記念すべき平成20年11月30日（日）に、21名という非常に多くの方にお集まりいただきました。市の農業職員の方から、一般の保護者や農家の方、そして須坂園芸高校の先生・生徒といった多方面の方にお集まりいただきました。そして、この講座の趣旨でもある、お互いの持ちうる「大きな」資源（リソース）をいかに活用していけるのかを、農業義塾に参加する立場と運営する立場の両者から大いに意見交換できたと感じております。参加者の方がそれぞれのバックグラウンドで培ってきた力は大変大きなものだと改めて感じました。このたくさんのリソースをお互いにどうやって支えていき、茂菅の地に集約していくことができるかがこれからの課題であると思います。

### 2. 不登校の子のリソースを活性化するために

今回の講座には、不登校のお子さんをもつ保護者の方や、家族で農業を行っている一般の方にも参加していただきました。この講座で、不登校のお子さんの状態についてお話ししていただくことは大変勇気のいることだったと思います。少しでもお子さんの役に立ちたい、うまく関わりたいという思いを語っていただき、農業義塾として不登校の子と保護者の方にどういった場を提供できるのか、一緒にどう関わっていけるのかをお互いに少しでも共有できたのではないかと思います。そういった保護者の方の思いは、不登校のお子さんにとっては「大きな」リソースであると思います。不登校のお子さんのことを一番よくお分かりになっているのは保護者の方だと思いますし、そういった保護者の方のリソースがお子さんを支えるためにも、この茂菅農業義塾にとってもなくてはならないものだと思います。そのような保護者の方の思いを大切にしながら、不登校の子に茂菅農業義塾はどうあるべきかを考える必要があると思います。知らない場所に行って、知らない農業をやるということは、誰でも抵抗があったりできれば行きたくないと思うこともあると思います。特に不登校の子にとっては、エネルギーも人一倍使うだろうし、慣れてない環境に行くことは非常にストレスになると思います。だからこそ、私たちは不登校の子の主体性を最大限尊重する必要があると思います。来たいときに来れるようなサポート体制や取り組みやすい活動内容といった茂菅農場の在り方をまず見つめていくことで、不登校の子たちにこういう場があるのだと少しでも理解してもらうことが大切だと思います。茂菅農場の主役は不登校の子たちであると思います。だからこそ、不登校の子のニーズや思いを大切にしたいと思います。ニーズや思いというのは、その子らしさが反映されるものであり、その子のリソースであると思います。そのリソースを大切にするためにも、不登校の子のニーズに合わせた詳細な体制作りがこれからの課題であると思いました。

### 3. 「大きな」プロジェクトに「大きな」リソース

今回の講座で多くの方と意見交換を行い、みなさんがたくさんの「大きな」リソースをお持ちであることに非常に驚きました。農業の良さを自分が学ぶだけでなく人に伝えたい、人と人をつなげる懸け橋にしたいという思いを語っていただいた園芸高校の生徒さん方。お忙しい中

でも参加していただき、手厚いバックアップを前向きに検討していただいた市の農業職員さん方。教えることと農業との関連や現代の子どもたちの状況を語っていただいた先生方。現在の農業の在り方や、それに参加する立場から素直な意見を語っていただいた一般の方々。不登校のお子さんのために何かできないだろうかという「思いをもって参加していただいた保護者の方。当初、数人でも興味をもってくれた人が来ていただけたらという思いで始まった今回の講座です。しかも、茂菅農業義塾は今までにほとんど類を見ない、相当「大きな」プロジェクトです。だからこそ、もっと考慮すべき点や疑問点、不明な点は多く存在します。しかし、今回この「大きな」プロジェクトの旗揚げの日に、非常に多くの「大きな」リソースをもった方に参加していただき、多方面から意見を出していただき、大変貴重なそして濃密な時間になったと思います。最初の一步かもしれませんが、「大きな」一步だったと感じております。

#### 4. 学生・児童生徒・保護者・高齢者が協働する「信大茂菅農業義塾」開設のチラシ

主催：信大 YOU 遊世間（ワールド）

後援：長野県教育委員会・長野市教育委員会・長野市農業公社・JA ながの

##### (1) 「信大茂菅農業義塾」の特色

###### ①長野県教育委員会・長野市教育委員会の後援

農作業体験の場となる「信大茂菅ふるさと農場」は、長野県教育委員会・長野市教育委員会のご後援をいただいて実施しています。大地自然と交わる農作業体験を通して、人間性を高めることを目的としています。

###### ②小さな自分の畑の持ち主に

児童・生徒の皆さんが、1年間にわたって一人一畝ずつ自分の畑を持ち、自分の植えたい作物を育てます。JA ながの営農指導課の専門家による農業指導を受けることができます。

###### ③長野市農業公社・JAながのとの連携

定年退職された方で、自家菜園を持ちたいとお考えの方、無農薬の自家米を育てたいと願っておられる方は、「信大茂菅ふるさと農場」での1年間にわたる水田と畑の農業研修により、農業への自信をつけていただきます。その後、長野市農業公社より自家菜園や水田を斡旋していただくことができます。

###### ④子ども・青年・中高年・高齢者が交流する生涯学習の場

大学生のお兄さん・お姉さんが世話役となり、幼児・児童・生徒と保護者の皆さん、そして、高齢者の4世代の皆さんが、農場でいっしょに働きながら共に学ぶ生涯学習を実践する場、それが「信大茂菅農業義塾」です。

###### ⑤長野市茂菅地区農家、林部信造さんの協力

2000年（平成12年）3月に開設した「信大茂菅ふるさと農場」は、10年目を迎えようとしています。茂菅地区にお住いの林部信造さんは、地域の理解者として最初から農業指導に熱心に協力して下さっています。最初7アールからスタートした耕作面積が、現在は12アールに拡大しました。

(2) 参加費：年間1,500円（通信費、種苗代、傷害保険料、その他）

(3) 参加申込み方法：「はがき」に氏名（お子さんの場合は、保護者の氏名も記入）、住所、連絡先を書いて、下記の宛先にお送り下さい。参加申込み随時

〒380-8544 長野市西長野6-10 信州大学教育学部  
土井研究室気付 「信大茂菅農業義塾」宛

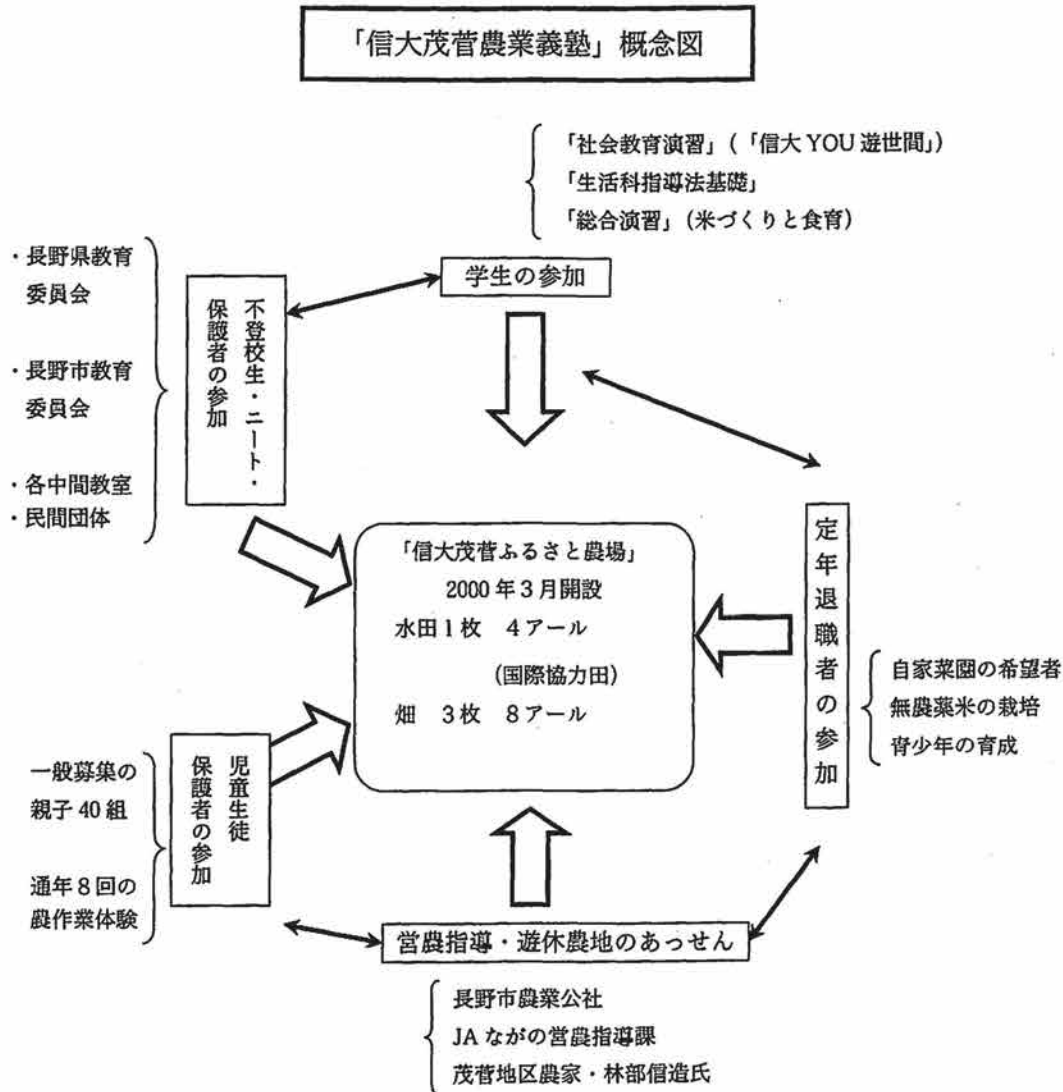
(4) 問い合わせ先

TEL/FAX 026-238-4260 (土井進) E-mail doisusm@shinshu-u.ac.jp

飯村昌史 (大学院心理臨床専修1年、メンタルフレンド)

宮川はるな (言語教育専攻3年、9代目茂菅農場長)

(5) 「信大茂菅農業義塾」のしくみ



(6) 「信大茂菅ふるさと農場」の場所

信州大学教育学部から西へ約2キロメートル、鬼無里へ向かう国道406号に茂菅大橋がかかっています。この橋の下に農場が位置しています。茂菅大橋の急カーブを過ぎてすぐ、進行方向右手に橋を降りる道があります。その道を下りきってから左へ折れる道を500メートルほどくると、きのこ栽培の大きなプレハブ施設があります。その手前に「信大茂菅ふるさと農場」と書いた看板が立っています。

旭山の麓、裾花川沿いにあり、緑に囲まれた静寂な場所です。澄んだ空気と北アルプスから流れてくる清流に接していると自ずと癒やされるのを感じます。

## (7) 「人づくり」のための「土づくり」

我が国の農学博士第1号である新渡戸稲造先生は、『農業本論』において、

「天地偽らず。農は天地に交わること近し。故に農は偽らず」

と述べています。農の営みに参画することによって、「人間力」の向上も図ることができると解釈することができます。私たちはまず第一歩を大地に踏み入れ、額に汗して田畑を耕し、苗を植え、草を取り、天地の恵みを収穫する喜びを味わい、感謝の念をもって食べる喜びを思いっきり体験しようではありませんか。

大地自然に交わる「土づくり」の営みには、人間の心を癒し、浄化する「人づくり」の働きが込められています。身土不二という言葉が端的に示しているように、人間生活と大地自然は一体不離であり、相互に密接に関連し合っています。

不登校やニートの問題で一番苦しんでいるのは、子どもたち自身であり、ニートの青年たち自身です。そして、その青少年の苦しみに同苦し、じっと耐えて、励まし続けておられるお母さんや保護者の皆様です。

一方、目を国土に転ずるとき、昭和40年代(1965年)の高度経済成長期以後の農業政策によって、遊休農地や荒廃地は年々増加し、今日では全国で約100万ヘクタールにも達しています。このような広大な農地が放棄され、我が国の食糧自給率は39%にまで低下しています。このような大地自然に対する人間の在り方自体が人間生活の上にも大きく影響してきていると考えられます。

「人づくり」のための「土づくり」という哲学を掲げて、少子高齢社会の我が国の教育課題と農業課題に取り組みたいと考えました。我が国では今、大量の団塊の世代が定年退職期を迎えています。退職した人たちは、1年くらいは仕事を離れてゆっくりしたいと考えることでしょう。しかし、その期間が過ぎると地域社会の中でこれまでに築き上げてきたキャリアを生かして、何か貢献できる道はないかと模索したり、新たな生きがいと生活の糧を求める仕事をしたいと考えるに違いありません。このような高齢者の生涯学習へのニーズにも応えるのが「信大茂菅農業義塾」です。

長野県生涯学習審議会(平成20年)では、「人や地域とかがわって学び、学びの成果を人や地域に生かす生涯学習の推進」方策が検討されています。「信大茂菅農業義塾」はこの生涯学習推進方策の一つの具体的な事例です。「遊びと学び」の世代である青少年、「生産」の世代である中高年、そして、「遊びと教え」の世代である高齢者が、共に大地を踏みしめ、共に生涯学習を展開する場、それが「信大茂菅農業義塾」です。

## 「信大 YOU 遊世間」にご協力いただいている団体・個人のご紹介

「信大 YOU 遊」の取組は、平成6（1994）年6月6日の実行委員会開催から始まり、その10年目（平成15年度）から「信大 YOU 遊世間」と改称し、以来、地域社会のさまざまな団体・個人と連携させていただいています。その際、大学側からお願いしていることは、次の4点です。

- ① 子どもの育成や世代間交流などのふれあい体験ができること。
- ② 学生も企画段階から参画できること。
- ③ 1年間単位での継続的な自然体験や社会体験ができること。
- ④ 子どもの安全等の責任は、その団体において受け持っていただくこと。

これらの条件を規準として両者の間で協議し、合意を形成しながら活動を進めてきています。学生は地域社会のご期待に応えられるよう汗と知恵を発揮することに努めています。

「YOU 遊」の取組をまとめた「報告書」も、本書で第15集となりました。この間、学生は陰に陽に地域社会からご厚誼をいただけてまいりました。それらのことは、いずれの「報告書」にも感動を持って記述されております。次に、これまで長年にわたって大変お世話になっている団体・個人の方々をご紹介します、感謝の意を捧げたいと思います。

1. JA長野中央会・JAながの・JAグリーン長野・長野市農業公社  
「人づくり」の智慧を「土づくり」の体験学習を通して学ばせていただいています。  
学生はその豊かな感性で、農作業体験から実に多くのことを吸収しています。
2. 長野市茂菅地区農家  
「信大茂菅ふるさと農場」の水利用にあたっては、4軒の農家の輪のなかに入れていただき、水管理のお世話になっています。特に地元農家の林部信造氏ご夫妻には、農場と地域社会の調整役としてお世話になっています。
3. 長野県長野養護学校保護者の会  
お母さん方がお子さんに接しておられる姿を通して、学生は一步一步障害児との関わりを学ばせていただいています。
4. 長野市立湯谷小学校保護者の会  
子どもの活動のために保護者と学生がどのように連携すればよいのかを試行錯誤しながら学ばせていただいています。
5. 長野県教育委員会・長野市教育委員会・青木村教育委員会・麻績村教育委員会・須坂市教育委員会  
村や市をあげて学生を受け入れ、伝統文化が息づく環境の中で学生を育てて下さっています。
6. 長野市大岡支所・長野市立大岡小学校・農村女性ネットワーク・放課後子どもプラン  
大岡地区で新たなプラザを立ち上げるためにご協力いただいています。

このほかにも多くの団体・個人の皆様のご協力をいただいています。どうぞ、今後ともよろしくお願い申し上げます。  
(土井 進 記)



## 編集委員会規程

平成18年3月16日制定

### 第1条 編集委員会の設置

「信大 YOU 遊世間」の実践記録を、学術的価値のある教師教育学研究として高めていくために編集委員会を設置する。

### 第2条 編集委員会の構成

「信大 YOU 遊世間」の運営委員（運営委員長、副運営委員長、各プラザ長）と「YOU 遊フェスティバル」の実行委員、その他編集委員会において必要と認めた者が編集委員となり、編集委員会を構成する。

### 第3条 編集委員長

編集委員長、副委員長は委員の互選によって決める。

### 第4条 編集方針

- (1) 各プラザの実状に即した編集を工夫する。
- (2) 学生の視点だけでなく、必要に応じて広く地域社会の協力者や専門家の意見も取り入れる。
- (3) 第1次原稿の提出は12月25日、第2次原稿の提出は1月20日。発行は3月末日とする。

### 第5条 執筆要項

- (1) 執筆する際は、「信大 YOU 遊世間」の実践と「YOU 遊フェスティバル」の実行を通して、実践的指導力のどのような側面を養成することができたのかが明らかになるように、具体的に記述する。
- (2) 実践的指導力養成の側面は、以下のとおりである。
  - A：子どもへの興味・関心
  - B：子どもが秘めているパワーへの共感的理解
  - C：子どもとのコミュニケーション
  - D：広く豊かな人間力・社会力
  - E：大学における学問力
  - F：広場（プラザ）や講座の企画力
  - G：わかりやすい授業力、楽しくなる実践力
  - H：学生どうしの協働力
  - I：保護者、地域社会の人々との人間関係構築力
  - J：その他

第6条 この規程は、平成18年3月16日より施行する。

## 第16期だよ！！「信大YOU遊世間」全員集合～♪

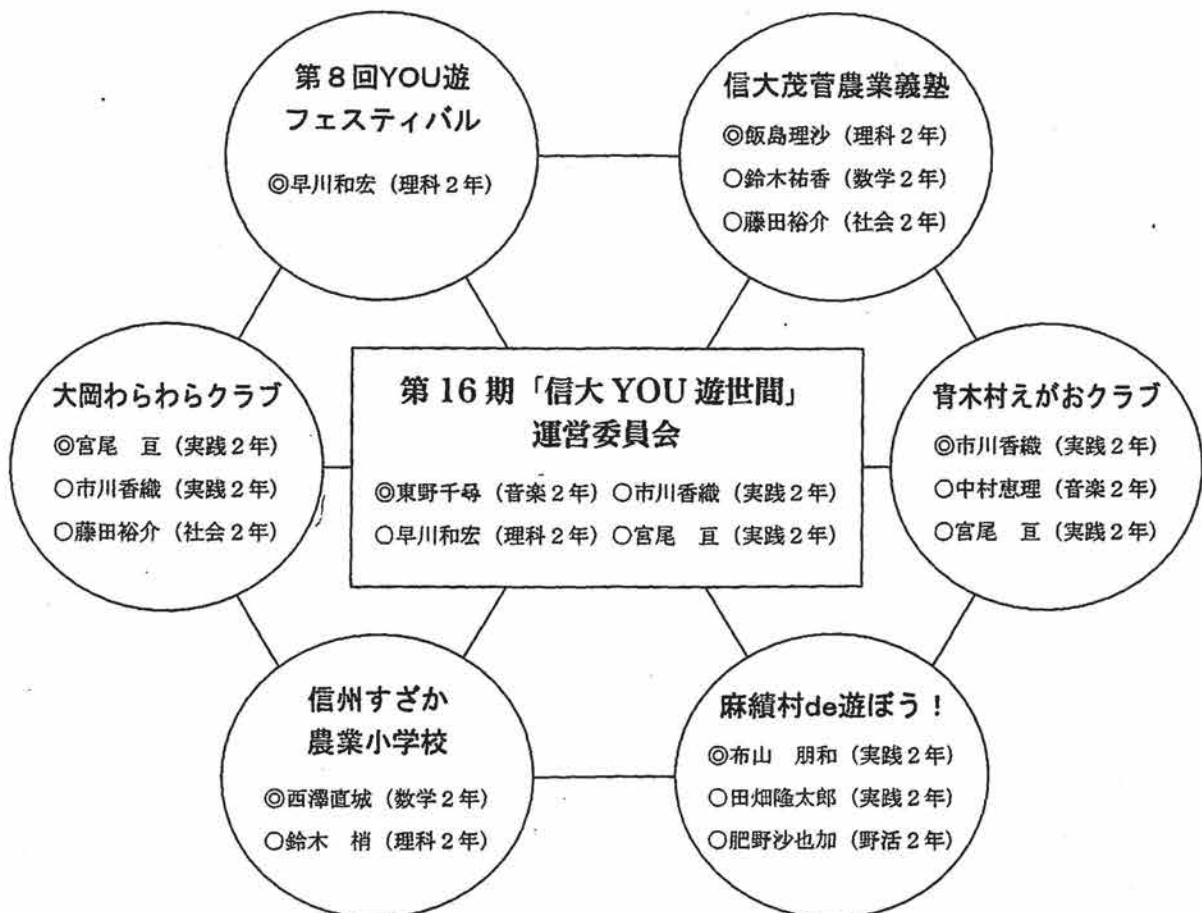
第16期「信大YOU遊世間」運営委員長 東野千尋（芸術教育専攻2年）

～全プラザ間交流でYOU遊世間を一つに～

今年度の活動を振り返って一番感じたのは、「プラザ内での絆はしっかりしているけど、ではプラザ間の絆は…？」ということです。私は今年度一年を通し、「信大茂菅ふるさと農場」の活動に参加させて頂いて、茂菅のことは知ることは出来ました。しかし、他のプラザが何をしているか、どんな学生・子ども・地域の方々が参加しているのかなどについては全くと言っていいほど知らなかったのです。

そこで、来年度は「全プラザ間交流」を企画し、それを通して他プラザの活動を知り、普段参加しているプラザ以外の人とふれあい、そして多様な他者がいる中の自分を見つめて欲しいと考えています。さまざまな人と協力し、楽しさ、苦しさ、喜びを共有し、交流を終える時に、みんなの心の中に「一つになれた」という達成感が生まれればいいなと思います。

### 第16期「信大YOU遊世間」学生組織図



第16期「信大YOU遊世間」は、自分一人でやるものではなく、「協力」し合い、「自由な発想」で楽しくやって行きたいと考えています。多様な他者とかかわり合い、自分を高め、自分たちなりの「信大YOU遊世間」をつくりあげて行きましょう！！

## おわりに

土井 進 (教育科学講座 教授)

信州大学教育学部から貴重な学部長裁量経費をいただき、ここに『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究』(第15集)を刊行することができました。ここに衷心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

本学部においては、教育の理論と実践を統合する「臨床の知」を教員養成カリキュラムの根本哲学としています。YOU 遊を実践している学生は、一人残らず1年次からの臨床経験科目を一步一步、一年一年と積み重ねながら、4年間の歳月をかけて着実に、人間としての、教育者としての学びを鍛え上げてきています。未来の大教育者として大成されることを心から念願しています。

本書の実践記録に込められている一人ひとりの貴重な学びは、教育者として、生活者としての生涯を貫く根源的な思索であると思います。YOU 遊を平成6年度に立ち上げた山口直行氏(当時、数学科4年、現在、安曇野市立三郷小学校教諭)は、信濃毎日新聞1ページ大の広告「信大 NOW 全県拡大版 vol.2」(平成21年1月24日付)において、次のように述べています。

「私は、今年16年目を迎えた「信大 YOU 遊世間」の第1期(当時は YOU 遊サタデー)実行委員長を務めました。学生スタッフとともに大学キャンパスで子どもたちの輝く笑顔を見た、という一心で講座内容を何度も検討し入念な準備をしたことが、今の私の教育実践の原点のような気がします」。

YOU 遊の活動は文部科学省によってフレンドシップ事業と命名されました。学生の皆さんが地域貢献の活動を通して培ったフレンドシップ(友情)を生涯にわたって大事にして、お互いに研鑽に励んでいただきたいと思います。皆さんの前途のご活躍をお祈りしています。

### 【編集後記】

YOU 遊フェスティバルも終わり、いくつかのプラザも活動を終えていく中で、『「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究』(第15集)の編集作業が始まりました。各プラザ長に原稿の執筆を依頼し、一次締め切りを12月22日として地域の協力者からの原稿を集めてもらいながら、執筆して頂きました。急なお願いになってしまったため、この時点での状況では、地域の協力者の方々からの原稿が集まっていなかったり、プラザ長自身の中でも編集をすることができていないプラザなどもありました。内容の構成は、大きな題目だけは全員で相談しながら決めたのですが、各プラザで行ってきた活動はそれぞれで違っているので、各プラザの特色を出してもらうため、ほとんどの内容を各プラザ長に任せることにしました。そのため、執筆に当たって各プラザ長に多大なご負担をお掛けしたことと思います。また、YOU 遊世間で学生が感じたそのままを大切にしたいと考えたため、公的な文章としては不適切な部分もあるかと思いません。ここにお詫び申し上げますと共に、ご容赦下さいますようお願い申し上げます。

最後に、この実践記録の執筆をはじめ、編集作業においてたくさんのお手伝ってくれた編集委員の皆さん、そして、この YOU 遊世間の活動に理解をもって参加してくれた学生の皆さん。出版社の春日さんと連絡を取りながら、私たち学生のやりやすいようにと常に考えて下さった土井先生。お忙しい中、大変貴重な原稿をお寄せ下さった地域協力者の方々。私たちの力の足りない部分を全てカバーしていただき、丁寧に温かく対応して下さいました春日さん。この実践記録に携わった全ての皆様に心から感謝申し上げます。

2009(平成21)年2月28日

編集委員長 原 耕平

# 第9回 全国フレンドシップ活動 in 信州

参加大学：上越教育大学・横浜国立大学・文教大学・福井大学・岐阜聖徳大学・  
奈良教育大学・広島大学・鳴門教育大学・熊本大学・信州大学（主催校）

- 「気づき」×「築き」： 実行委員長 ○
- 上越教育大学： 学びのひろば
- 横浜国立大学： わくわくサタデー
- 福井大学： 探求ネットワーク
- 岐阜聖徳大学： ぐんぐん隊
- 広島大学： 広島大学フレンドシップ「ゆかいな土曜日」
- 鳴門教育大学： 鳴門教育大 ふれあいアクティビティー
- 熊本大学： 熊本大学メイクフレンズ
- 信州大学： 信大YOU遊世間

日 程 表

参加学生

## 記念講演

講師紹介

と き：平成21年3月5日（木）

9：00～10：30

会 場：青木村 文化会館

講 師：小岩井 彰 先生 長野市立大岡小学校長

演 題：「今、教育に求められるもの 一教師を目指す若い皆さんへ」

講師紹介：

昭和31年、長野県青木村生まれ。昭和55年、筑波大学卒業。

昭和57年、信州大学教育学部生物生態学研究室研究生終了。

平成5年、上越教育大学大学院自然系理科コース修了。

昭和57年4月から長野県下小学校4校の教諭を経て、昭和63年、平成2年、平成15年、平成16年、信州大学教育学部非常勤講師。平成13年、長野県教育委員会社会教育係、指導主事。平成16年、長野県青木村教育長。平成20年4月から現職。

平成16年、青木村村長から囑望され長野県教育委員会の異例の人事で、教頭、校長を経ないで青木村の教育長に就任。「一人の子どもを育てるには一つの村が必要である」との考えから、「青木村子どもはつらつネットワーク」を設立。「子ども」を真ん中にして、「子ども」たちに関わる全ての団体、個人をネットワーク化。その一環として学生グループ「わこうど」を立ち上げ、「信大 YOU 遊世間」、文教大学、長野大学等と連携。学生の斬新なアイデアを取り入れた共同企画を実践。「6泊7日のあおきっ子通学合宿」「児童センターの遊び」「保育園・小中学校への支援」等学生諸君と協働した事業を積極的に推進。そのために学生専用の宿泊施設を設置。村の温泉を減免使用できるなどの配慮により、平成19年度にこの宿泊施設を利用して青木村の教育に参画した学生は延べ850名。現在、遊びを中心とした児童センターの運営や、通学合宿の取り組みに県内外の注目が集まり、多数の視察者が訪れている。

大岡小学校校長に就任してからは、学校に「信大 YOU 遊世間」の学生と協働した事業、「信州大岡ふるさとランド」を計画中。平成21年度には大岡産の大根を、学校、学生、地域が協働して栽培し出荷。僻地、過疎地帯の小さな学校から地域に根を張った本質的な教育を展開しようと奮闘中。

（文責：土井 進）

## 「気づき」×「築き」

第9回全国フレンドシップ活動 in 信州 実行委員長  
信州大学 理数科学教育専攻 3年 笠井悠太

## ○全国フレンドシップ活動実行委員

一條 まな(言3) 高池 亮輔(保3) 中川 茜(生3) 原 耕平(理3)  
岩本 英美(障2) 鈴木 梢(理2) 園田 泉(実2)

## ○全国フレンドシップ活動の企画を通じて

私は、今年一年間、「全国フレンドシップ活動」に関わってきてとても多くのことを考え、感じるがありました。そして、今、私が願っていた通り信州大学で「第9回全国フレンドシップ活動 in 信州」が開催できることを本当に嬉しく思っています。

2008年の3月、「全国フレンドシップ活動 in 妙高」に参加し、私は、信州大学で「全国フレンドシップ活動」を行いたいと強く願い始めました。しかし、現実には厳しく、反対派が多く信州大学では現在の状況では出来ないという結論に傾いていました。でも、どうしても諦めることが出来ませんでした。何か自分に与えられたチャンスのような気がして、諦めたら後悔すると感じていました。また、不可能とか無理といっている人に見せ付けたかった気持ちもありました。そんな思いをぶつけると、二年生を含め7人が手伝うことに賛同してくれたので、一つの企画として動き始めることが出来ました。

2008年の5月、「第9回全国フレンドシップ活動」を引き継ぎたいと挙手をした大学は、横浜国立大学と信州大学でした。どちらも生半可ではない気持ちで全フレ会議に臨んでいたと思います。ここでは、8大学のフレンドシップ活動の代表が話し合い、投票の結果、信州大学に決まりました。本当は、活動も順調で意識の高い横浜国立大学が選ばれるべきだった気がしましたが、信州大学への期待と可能性を信じて挑戦するチャンスを与えてくれた気がします。

ここから、私達の「全国フレンドシップ活動」についての企画が始まりました。目標を「気づき」×「築き」と設定し、フレンドシップ活動の本質に迫る活動を目指し企画してきました。フレンドシップ活動に関わる42大学に手紙を出し、初めてでも学べる、今まで参加していた大学も学べる環境の場を設定してきました。プログラム、物品等の準備を含め10ヶ月もの長い間「全国フレンドシップ活動」に関わってきました。

長い期間でしたが、その中で感じたものは、多いと思っています。企画を立てる大変さ、その中でリーダーとしての役割、つながりなど。特に人と人とのつながりは大事なものだと思いました。辛く、友だちと言いつつ事もあり、意識の低さに怒ったこともたくさんあったと思います。しかし、決してめげず、自分を支えてくれたメンバーがいました。この企画を始めたばかりは反対やら意識は無くやってもいいよというメンバーでしたが、今では心強い仲間です。また、参加を拒まず信州の全フレに参加したいと意思表示してくれた新しい大学を含め10大学の学生、私達の活動をずっと陰で支えてくれる地域の方々、今思えば、本当につながっていてよかったと思いました。

私は、この一年間、本当に長く感じました。投げ出したい、愚痴ってしまった時も数多くありましたが、「全国フレンドシップ活動」という企画のおかげで、仲間、つながりに気づき、大切なものを築き得た気がしました。今は、感謝の気持ちでいっぱいです。

# 学びのひろば

大学名 上越教育大学

## 1、担当教官名 釜田 聡

学びのひろば代表学生名 吉川 晋史 (平成20年度事務局長)

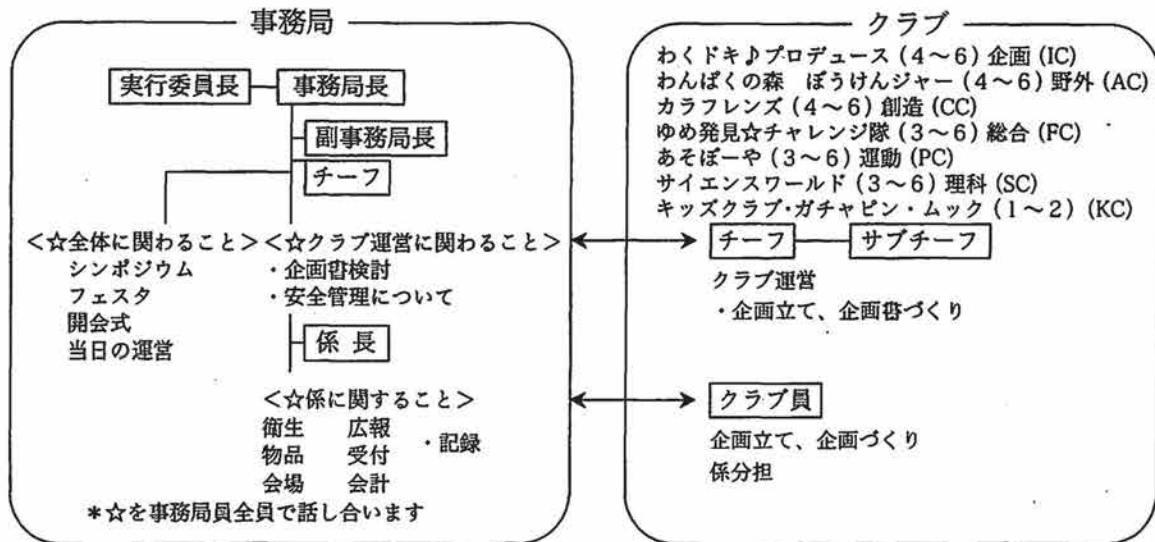
本田 千尋 (平成21年度・現事務局長)

## 2、活動の起こり

教職を目指す学生にとって、子どもや仲間との関わりの中で生じた課題は学生を成長させると考えた先生が、体験的・実践的な学習の場として「学びのひろば」をスタートさせた。

はじめは年に1回の単発活動だったが、子どもたちと継続的に関わり子ども理解を深めるために年4回の継続的な活動になり、宿泊を伴う活動も始まった。

## 3、組織構成 (事務局、係、クラブ、参加人数 (学生・子ども))



<参加人数> 学生 210人 児童 309人

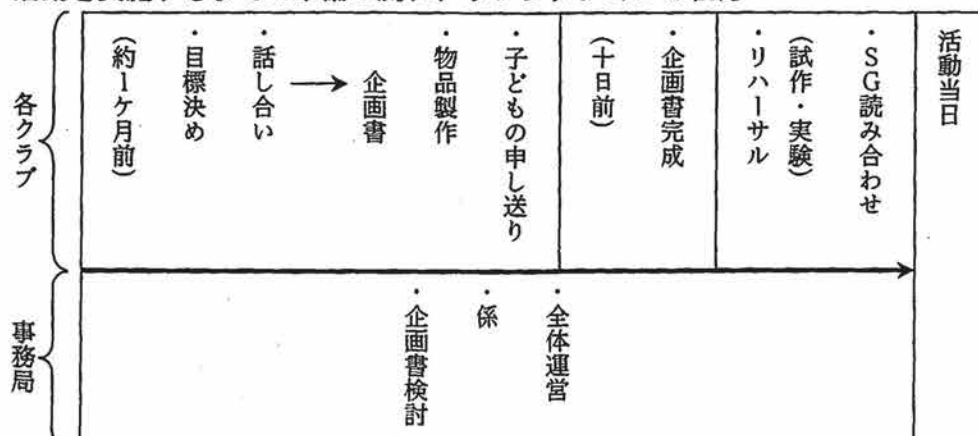
## 4、活動の目標

- ◎子どもが安全に自由に活動できる環境を整える力をつける。
- ◎情報交換をすることで、広い視野を身につける。

## 5、平成20年度の活動実施の紹介

各クラブ	学生ミーティング	朝の受付	AC→小道探検、旗づくり、秘密基地、源流探検、巨大ロボ作り CC→サイン帳づくり、ピタゴラ装置づくり、おかしな世界づくり FC→巨大すごろく、シャボン玉づくり、びっくりディナー、運動会 PC→ドッジボール、ぼ〜や五輪、クリスマスツリー作り、レク SC→気球づくり、空気砲、テーリング、星座づくり、果物電池 IC→企画決め、子ども企画、お楽しみ会 ガチャピン→食べ物集め、万華鏡を取り戻せ!、ガチャピンランド ムック→忍者、シャボン玉づくり、秋の祭典、動物園作り	解散	学生振り返り
	事務局	進行	本部 (健康調査カードの管理、けが人の対応など)		

## 6、活動を実施するまでの準備の流れ、リフレクションの仕方



- ・リフレクションは各クラブ、事務局内で活動ごとに行う。  
 リフレクションの方法としては、活動終了直後にクラブごと学生で集まり、振り返りを行う。その場で、振り返りシートに記入する場合もある。そして、後日、クラブごと、班での活動、企画、危機管理などについて詳しく振り返る。  
 また、参加した学生、子どもに対し、活動ごとにアンケートも取っているため、それらを集計し、今後に活かす材料にもなっている。

## 7、活動の成果（学生の声）

- ・子どもの安全な活動を学びのひろば全体で考えることにより、危機管理能力が向上した。
- ・学生と子どもの人間関係づくりの向上につながる。
- ・毎月たくさんの子どものと接することで、子どもと自然に接することができるようになった。
- ・実際の子どもの想定しての企画を立てる能力が身に付いた。
- ・論理的に物事を考えることができるようになった。
- ・責任感が出てきた。
- ・度胸がついた。(てんばらなくなった)
- ・人前で話すのが怖くなくなった。
- ・大切な人ができた。教職に対する意識が高まった。



# わくわくサタデー

大学名 横浜国立大学

1、担当教官名 学外活動・学外学習Ⅲ担当：杉山 久仁子、わくわくサタデー担当：野中 陽一  
わくわくサタデー運営委員長 山村 亮仁（2年 国語科専攻）

## 2、活動の起こり

12年前に横国大の教授が学会で発表された信州大のフレンドシップ活動を見習い、自分の大学でそれを実践しようとして始まった。

## 3、組織構成

平成20年度は学生約70名（1年約40名、2年約15名、3年約15名、教育人間科学部学校教育課程に所属）で活動。6班に分かれ、それぞれの班で講座を作っていく。（昨年度は学生約100名、12班。）

【講座の班】…班員は班長、渉外（全体で3人）、物品、保健、会計、広報、他大連絡、開閉会式などの係を担う。

【運営会】…運営委員長、運営副委員長（2名）、渉外長、物品長、保健長、会計長、広報長、他大連絡長、開閉会式長で構成。毎週木曜昼休みに開かれる。各係長は班結成前に選出され、各班の係も兼任。

## 4、活動の目標

自らの意思でボランティア活動に参加し、社会貢献の意義に気付くとともに、その結果を学内での教育研究活動に生かすことを目的とする。特に、講座の企画・立案、実施全てを学生が担うことで、こども理解と将来の教職における実践的指導力および自己教育力の基礎を身につけることを目指す。

## 5、平成20年度の活動実施の紹介

【前期】横浜市立西寺尾小学校（6/28）、横浜市立上大岡小学校（7/5）

講座例…巨大絵画、影絵、水鉄砲、巨大遊園地、巨大すごろく

【後期】川崎市立高津小学校（12/20）

講座例…キャンドル作り、凧作り、映画作り、そうじ

## 6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方

○講座の企画書（プランニングシート、以下PS）を作成していく。

2ヵ月半前…班結成

2か月前…素案決定、素案PS提出

1ヵ月半前…講座内容決定、ポスター・チラシ作り

1か月前…分科会PS提出、分科会、児童希望調査

3週間前…参加児童決定、招待状作り

2週間前…名札、修了証作り

1週間前…最終PS提出

本番前日…小学校に行き、活動の準備

本番当日！！！！！！

1週間後…小学校掲載用の事後新聞作り、報告会準備

全体会（水曜5限）…全体への連絡事項の伝達、係集会など、参加学生全員が出席する。

分科会…ランダムに班を作り、各班の代表がPSを他の班の人にプレゼンし、安全面や内容について議論する。

報告会…班ごとに10分程度、目標をどのように実践したか、実践の様子・反省をパワポ等を使って他の班にプレゼンする。

2週間後…報告会

## 7、活動による成果

個人の成果としては、子どもとの関わりに慣れることができたり、企画の話し合いを多く重ねることによって指導案作りや会議の練習になったりと、教育実習につながる。また、社会への貢献としては、小学校側が学生の作った講座やポスターを教材として扱っていただくなど、小学校と学生との関係が一方通行ではなく、お互いに得るものがあると言える。

## がやっこ探検隊

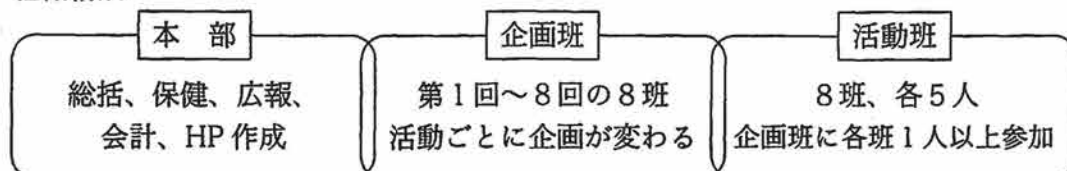
1、担当教官名 学外活動・学外学習Ⅲ担当：同上、がやっこ担当：平島 由美子

がやっこ探検隊総括 須田 薫（3年 心理発達専攻）

### 2、活動の起こり

5年前に保土ヶ谷区役所の委託を受け、継続型の活動として始まった。

### 3、組織構成



学生45名（1年16人、2年11人、3年12人、4年6人）

子ども80名（保土ヶ谷区内在住・在学の3～6年生）

### 4、活動の目標

がやっこは年間の活動目標ではなく、活動方針を立てている。今年度は「発見」である。具体的な例としては、「保土ヶ谷区の〇〇を発見、人との関わりあいの中で〇〇を発見、体験的な活動の中で〇〇を発見」などで、毎回の活動で〇〇に入るものを考えていく。

### 5、平成20年度の活動実施の紹介

- 第1回 大学内ウォークラリー（6/21）
- 第2回 牛乳パックでリサイクル帽子作り（7/12）
- 第3回 キャンプ（8/20～22）
- 第4回 大学の陸上競技場で遊ぶ（9/13）
- 第5回 区民まつりに参加（10/18）
- 第6回 農業体験（11/13）
- 第7回 保土ヶ谷公園に遠足（12/13）
- 第8回 大学の教室内でまちづくり（最終回）（1/24）

### 6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方

各企画の2か月前…企画班準備開始

各企画の2週間前…リハーサル

各企画の翌週…定例会

全体会（水曜日）…学生全体の情報共有の場。  
定例会…各企画の翌週の木曜6～7限。企画の反省が中心。

### 7、活動による成果

1年間同じ子どもたちと活動していくため、子どもの成長・子どもとの関わりを中心に目標を立てていくことができる。また、区役所との連携・区内の活動団体の協力により、幅広い活動をすることができる。

# 探求ネットワーク

大学名 福井大学

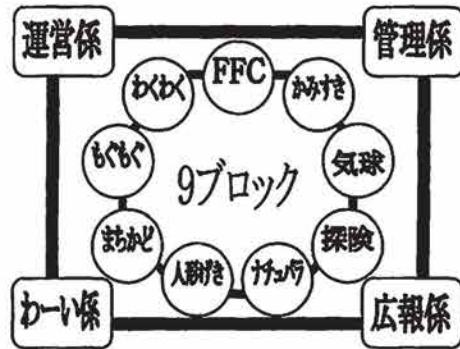
- 1、担当教官名 森透、柳沢昌一、寺岡英男、遠藤貴弘、八田幸恵  
 代表学生名 なし（探求はみんなで作り上げていくため、全体の長はいない）

## 2、活動の起こり

1990～1995年まで、福井大学教育地域科学部では「学習過程研究」というゼミが行われていた。このゼミでは、長野県伊那小学校の実践を読み合ったり、福井大学附属小学校の実践に継続的に参加しながら授業を作ったりして、学習課程の発展のプロセスを形成構築していくことの議論がなされていた。当初のスタッフだった、寺岡、森、柳沢教官は1992年に通知があった「学校週5日制の実施」をきっかけに、子どもたちと探求的かつ継続的な活動を行う事を目的として、1995年に探求ネットワークを立ち上げた。

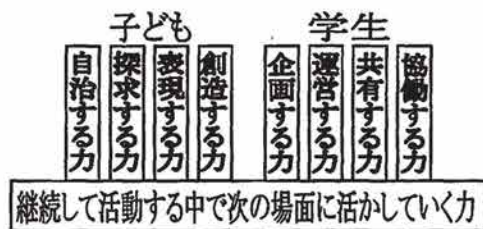
## 3、組織構成

探求では、9つのブロックと4つの係が存在する。ブロックは、障害児を対象とした「ふれあいフレンドクラブ」、かみすきを材とした「かみすきブロック」、気球について学び作る「気球ぶろっく」、自然の中を探検する「それいけ！！探検隊ブロック」、野外炊さんをする「ナチュラルクッキングパラダイスブロック」、人形劇を作る「人形げきブロック」、福井について調べる「福井まちかど調査隊ブロック」、料理を作る「もぐもぐブロック」、ネイチャークラフトをする「わくわくキャンプ工房ブロック」の9つである。各ブロックに子どもは20～40人、学生は15～40人の総勢約470名という規模である。係は学生だけで構成される。イベントを運営する「運営係」、お金や保険を管理する「管理係」、ホームページや広報誌の作成をする「広報係」、子ども向けの機関紙わーいを作成する「わーい係」である。



## 4、活動の目標

探求では、子どもたち自身が様々な経験をし、活動に参加していく中で4つの力の育成をねらっている。ものごとを突き詰める「探求する力」。多くの人に伝えるための「表現する力」。時間や技を基にした「創る力」。子どもたち同士で互いに調整し合って運営していく「自治の力」。



学生に対しても、子どもたちと関わっていく中で4つの力の養成をねらっている。ねらいとしている力を身につけるための活動を築き上げる「企画する力」。年間の流れを見通して活動を「運営する力」。学生同士のつながりを強め共に問題解決を目指そうとする「協働する力」。学生自身が他のブロックを知り互いに高めあっていくための活動を「共有する力」。

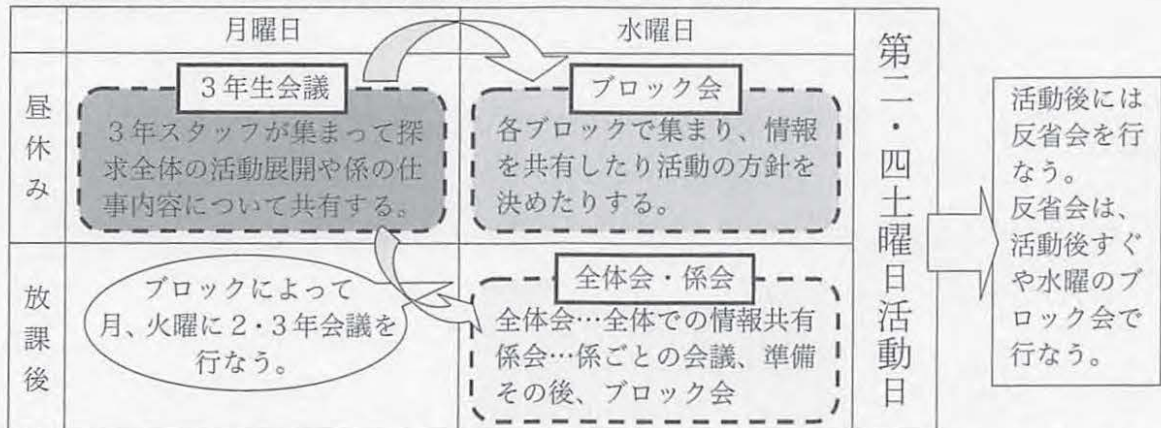
以上のように、探求では子どもとスタッフの双方において、各々が身につけていきたい力がねらいとして組み込まれた活動づくりを目指している。そのためには、子どもとスタッフとで活動をよりよいものに充実させ発展させていく必要がある。そこで子どもとスタッフとの間に

において、継続して活動する中で次の場面に活かしていく力（省察的実践力）を生み出すことで、活動が盛り上がっていくと考えられている。

### 5、平成20年度の活動実施の紹介

4月26日 経験者会議（半日）	○夏サイクル	11月9日	} 通常活動（半日）
○春サイクル	7月26日 通常活動（半日）	16日	
5月10日 開講式（半日）	8月中 ブロックによって	29日	} 通常活動（半日）
24日	キャンプなど	12月16日 なかまつり準備（1日）	
6月7日	9月6日 夏の交流会（半日）	7日 なかまつり（1日）	} in 付属小
14日	○秋サイクル	13日 閉講式（半日）	
28日	10月18日		
7月5日 ミニなかまつり（半日）	25日		

### 6、活動を実施するまでの準備の流れ、リフレクションの仕方



活動のブロック会の後には『サイクルラウンド』が開かれる。サイクルラウンドとは、各ブロックのプレゼンをし、情報共有を行ない、分科会で活動の振り返りや相談を行なう場である。さらに、1年間のまとめとして『探求内報告会』を2月に行なう。1年間を線で捉え自分の歩みを振り返り、探求内で報告し合うことが目的である。そして、1年の最後に『報告書』を書く。報告書とは、1年の活動が締めくくられた後に、活動を振り返り、記録するものである。時系列に沿って、子どもの成長やブロック運営などの面から、自分の軌跡を振り返る。

### 7、活動による成果

今年度のかみすきブロックを例に説明する。かみすきブロックは経験者の子どもが多く、年度を越えた子どもの成長を見ることが出来る。昨年度の子どもの様子から、「表現する力」が足りないと学生が判断し、今年度は子どもたちが班で話し合ったことや作った作品を発表するという機会を多く設けた。春や夏のサイクルでは、子どもたちはまだまだ声が小さく、ただ原稿を読むだけの発表であった。学生は、子どもたちが発表しやすいような環境づくりを考え、子どもたちが徐々に発表になれるような段階を設定するといった働きかけを続けた。その成果、最後のなかまつりでは来てくれた他ブロックや報道機関の人に対し物怖じすることなく、伝えようという意識を持って発表する姿が見られた。

このように、継続して子どもの様子を見ながら活動を行なうことで、学生は子どもの実態を把握し、段階に応じた働きかけを行なうことができるようになり、「子ども理解」という教育の根本となる力を探求では養うことが出来る。子どもにとっても、学校とは違う環境の中で友とかかわり合い、一人ひとりに様々な変化があると考えられる。

# ぐんぐん隊

大学名 岐阜聖徳大学

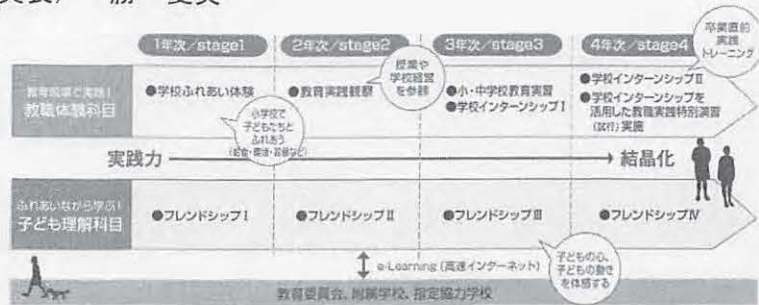
1、担当教官名 山崎 旭男

2009年度総括 (Aコース委員長) 勝 愛美

## 2、活動の起こり

2005年(平成17年度)より文部科学省 Good Practice プロジェクトを採択し、本学の教員養成カリキュラムが全面的に見直され、知識理解だけでなく地域と連携した「教職体験」や

「子ども理解」の内容もカリキュラムに盛り込まれることになった。そこで、以前からサークルとしてフレンドシップ活動を行ってきたものが本学の正式な講義として位置づけられ、単位を認定されクリスタルプランに組み込まれることになった。

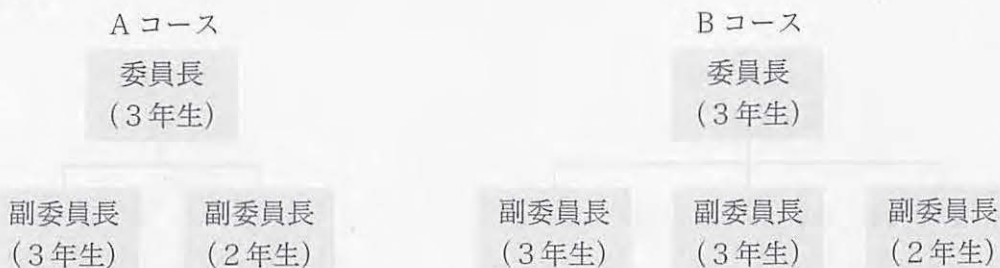


## 3、組織構成 (2008年度)

ぐんぐん農園コース (Aコース)	クラフト・サイエンスコース (Bコース)
当日 (活動班) (対象 1~4年生)	当日 (活動班) (対象 4~6年)
子ども 9人 学生 7~8人	子ども 8人 学生 7~8人
子ども約 100名 ×12班	子ども約 40名 ×6班
企画準備・運営 (ワーキング)	企画準備・運営 (ワーキング)
<ul style="list-style-type: none"> <li>・Let's わくわく ( )</li> <li>・フィールド ファーマーズ ( )</li> <li>・お米 (30名)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・クラフティーズ (22名)</li> <li>・サイエンス (21名)</li> </ul>
ぐんぐん隊には希望するコースに応募し当選した子どもたちが、年間を通してそれぞれのコースで年7回の活動に継続して参加する。	学生は年間を通じてワーキングと活動班の両方に所属し、ワーキングで企画の立案準備をする。当日は活動班で子どもの支援をしながらワーキングとして企画の運営もする。

## 幹部 (通称?)

年度初めは体制作り、子どもの募集など活動の基盤作りを。常時は手紙の発送や教授との連携などの事務仕事や、全体会議等でワーキングをまとめたり AB コース合同企画の運営をしたりもする。



#### 4、活動の目標

大学の設置した目標：学生の実践的指導力を旨とする（子ども理解も含めて）

年間目標：一響一響かせよう仲間と作るハーモニー

A・Bコースの子どもたちがぐんぐん隊として1つの仲間であるという思いを持てるようにする。一人では生み出せないものを仲間と協力し生み出す喜びを知り仲間の良さを知ってほしい。

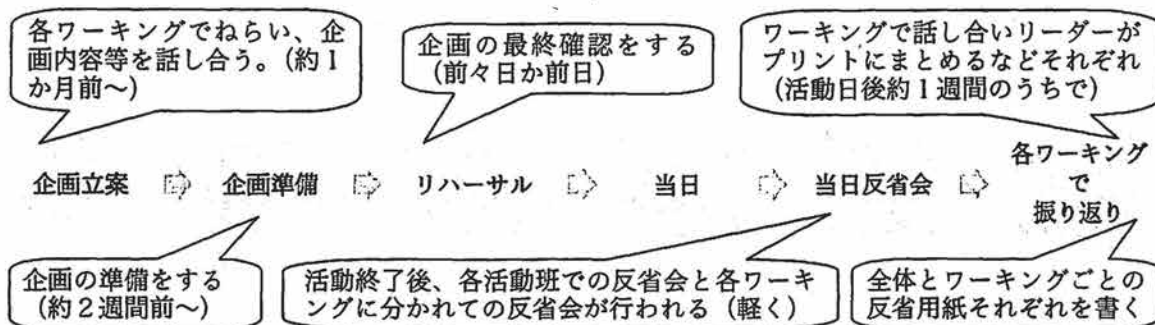
#### 5、平成20年度の活動実施の紹介

【Aコース】 わくわく：①自己紹介・名札作り ②巨大すごろく ③かざ車 ⑤運動会（しっぽ取り、障害物リレー） ⑥Get Freedom ⑦猛獣狩り、スライドショー、班の時間など フィールド：①ぐんぐん手帖作り ②さつまいも・ポップコーン植えとイチゴ収穫 ③はい！タッチ（障害物競走） ⑤葉っぱ集めてジャンケンポン ⑥芋掘り ⑦茶きん絞り＋ポップコーンの種取り お米：①ピクミンゲーム・ぐんぐん大冒険 ②芋と葉の成育を想像・白米と古代米の予告③田植え ④泥んこ大会 ⑤稲刈り ⑥振り返りとクイズ ⑦ウォークラリー

【Bコース】 サイエンス：①空気砲 ②シャボン玉 ③ウォークラリー（ペットボトルロケット等）④ペットボトルロケット ⑤飛行機作り（クラフフィーズと合同） ⑥科学マジック ⑦プラネタリウムクラフフィーズ：①電車でゴー・「ぐんぐんの木」作り・割り箸鉄砲 ②鯉のぼり ③巨大迷路 ⑤ヒコリンピック（レク、サイエンスと合同） ⑥秋祭り（松ぼっくりと団栗で動物園＋剣玉＋五感で木の特定＋木や葉の形、松ぼっくりで射的 ⑦思い出すごろく

※第4回はデイキャンプで午後からはABコース合同ブース企画（万華鏡作り＋振り返り、お化け屋敷＋プラ板細工、トリックアート、ダイラタンシー現象、スライム、カレー作り）

#### 6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方



その他：第3回活動日後と全活動終了後に全体で報告会を開き、各ワーキングの活動報告をパワーポイントを使って紹介した。第3回後の報告会では分科会も行った。

#### 7、活動による成果

今年度はワーキングそれぞれの企画のクオリティが上がり、子どもたちも楽しみながらお米や農園について（農業体験）や科学・工作等について学べたようである。また、報告会やABコース合同企画など新たな試みもあり、リフレクションの向上・ワーキング間の交流によるそれぞれの企画の見直しが見られた。

# 広島大学フレンドシップ「ゆかいな土曜日」

大学名 広島大学

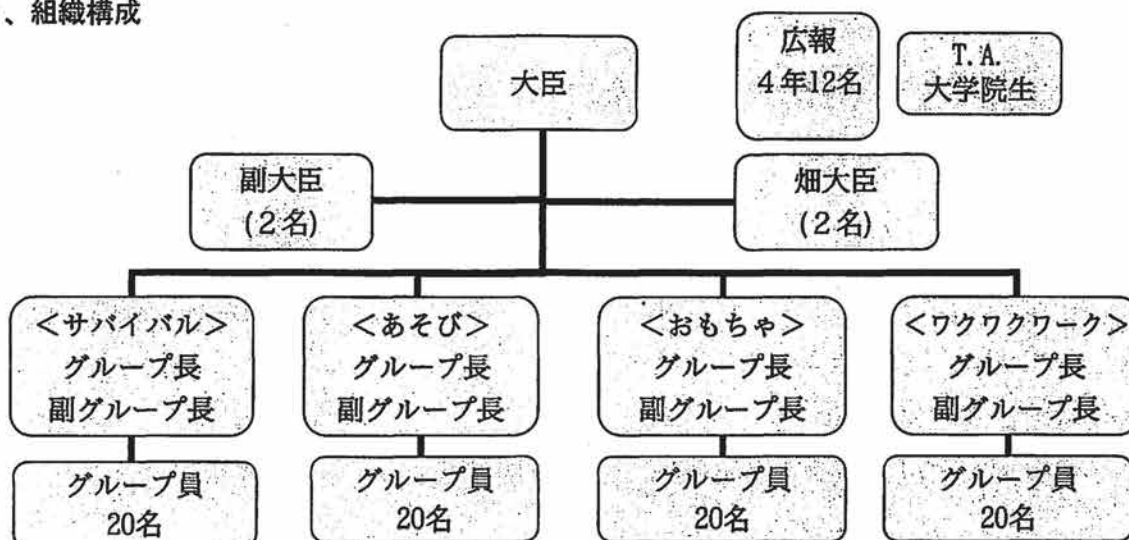
1、担当教官名 林孝 他10名

広島大学代表 岩成美幸

2、活動の起こり

フレンドシップ事業「ゆかいな土曜日」は平成9年度から文部省（現文部科学省）の教員養成教育の一環として、実施されてきている。

3、組織構成



- 幹部
- 大臣：学生組織の代表者。活動全体の運営・統括。幹部会の企画・進行。
  - 副大臣：8月のスペシャル企画の全体の運営・統括。朝の会などの司会。
  - 畑大臣：畑活動、もちつきに関する企画・運営。
  - グループ長：グループに関する企画・運営。定例会の企画・進行。
  - 副グループ長：グループ長の補佐。グループの会計。
  - グループ員：活動企画。4グループのどれか1つに所属、四月に決定し、以降変更は原則ない。5人で1つの班を形成。

子ども：138人（東広島市内の小学4～6年生、一班につき8～9人、通年で変更なし）

先生：11名 地域の方：16名

4、活動の目標

<全体目標>

- ・さまざまな人と共に活動することを通して、人とかかわりあおうとする態度を身につくる。
- ・普段出来ない活動の中で、目的を達成するために物事を自ら考え、行動する力を高める。

\*この他にも、グループ目標、各企画の目標などがある。

5、平成20年度の活動実施紹介

サバイバルグループ、あそびグループ、おもちゃグループ、ワクワクワークグループに分かれて、特色ある企画を作った。

	サバイバル	あそび	おもちゃ	ワクワクワーク
5月	開校式&班顔合わせ&名札作りなど			
6月	ロープワーク	いろいろなあそび	ブーメラン	新聞作り
	畑活動 [サツマイモの苗植え&大豆の種まき]			
7月	火起こし	畑で川作り	巨大ピンボール	木製のいす作り
8月	夏休みスペシャル企画 (グループ問わず)			
	アスレチック作り	シャボン玉	自然物楽器作り	巨大画
9月	防水服作り	遊びピンゴ	スライム	ケーキ作り
	畑活動 [成長観察&秋の虫見つけ]			
10月	ろうそく作り	ホッケー	宇宙船作り	広告作り
	畑活動 [サツマイモの収穫 (大豆は不作)]			
11月①	畑の土で粘土作り	鬼ごっこ作り	ドミノ	テレビ番組作り
11月②	竹の家作り	チェギチャギ	巨大すごろく	映画作り
12月	もちつき&各グループでの思い出作り&閉校式			

## 6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方

時期	班付 (◎)・企画者 (○) の流れ	幹部の流れ
活動の 三週前	○企画者顔合わせ、係り決め ○企画者話し合い 活動目標、活動内容、一日の流れ決め	・活動当日のタイムテーブル確認
二週前	○企画者試作 活動内容等の検討	・活動場所の決定
一週前	◎学生試作 (グループで) 子どもへ電話連絡 ○活動内容等の再検討 物品準備	・物品調整
活動週	◎作戦会議 ○内容、物品製作のつめ	・最終確認・物品調整
一週後	◎反省会 ○企画反省、片付け	・幹部反省

## 7、活動による成果

- ・学生の子どものとの接し方・意識の向上
- ・毎月の企画内容の充実
- ・家庭連絡の方法、話し方の向上
- ・子どもの安全面に対する考慮、対処など



# 鳴門教育大 ふれあいアクティビティー

大学名 鳴門教育大学

- 1、担当教官 近森 憲助（人文・社会系教育部 教授）  
 実践指導教官 太田 直也（人文・社会系教育部 准教授）  
 学生代表 杉山 健人（幼児教育専修3年）

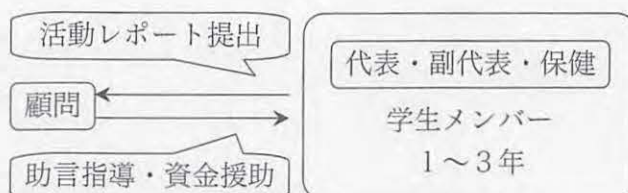
## 2、ふれアクの起こり

平成11年11月に信州大学教育学部において実施された「フレンドシップ活動事業全国学生シンポジウム」への参加がきっかけとなって、平成12年度に初代会長の大門を中心に総合学習研究会“ふれあいアクティビティー”（以下『ふれアク』）として発足した。

## 3、組織構成（人数等も合わせて）

3年生9人、2年生5人、1年生5人の計19人をいう非常に少ない人数で構成されており、3年生が中心学年となっている。3年生の中から代表（リーダー）・副代表（サブリーダー）・保健が三役（ふれアク内では「全体」と呼ぶ）として、ふれアクの時間（毎週火曜）の話し合いの進め方などを考えている。全体以外の学生は、いくつかの係に分かれて活動内容を企画していく。活動当日は、三役である全体は活動に同行するが子どもと直に関わらず、タイムキーパーや撮影、保健などの役割を担っている。全体以外の学生（班付き）は子どもと一緒に班に入って活動を展開していく。これは今年度の方式であって、その年度の代表学年によって、方式は異なっている。

また、ふれアクの活動は顧問である近森先生の研究の一環でもある。そのため、先生の研究費から活動資金が支給され、それと引き換えに事後レポートを毎回提出している。



## 4、ふれアクの目標（設立目的）

『「総合的な学習の時間」を円滑に構想・企画・実践するために必要な基礎的事項について学生の主体的な活動をもとにして研究を行う。』が、設立目的である。教師になりたい、子どもとのふれあいについてもっと知りたい、という意志のもと私たちは活動している。ふれあいを通して子どものことを知り、関わり方・接し方を自らの経験を通して学ぶこと。話し合い重ね考えを深めることで、企画力を養い、実践につなげること。他人の意見を聞くことで、視野を広げること。これらが学生の目標として挙げられるが、サークル活動のため、それぞれの学生が様々な価値観で、自由に目的を持って活動に取り組んでいる。

## 5、平成20年度の活動実施の紹介

5/24	はじける！全身お絵かき隊！ ～君はステキなアーティスト～	主催	1～4年 32名	1枚の大きな布に、全身や道具を使って絵を描く。
7/27 8/9～10	ふれアク☆上勝！サマsummer♪	主催	4～6年 34名	上勝町・山の楽校での宿泊体験活動
10/19	鳴門市 子どものまちフェスティバル	参加		

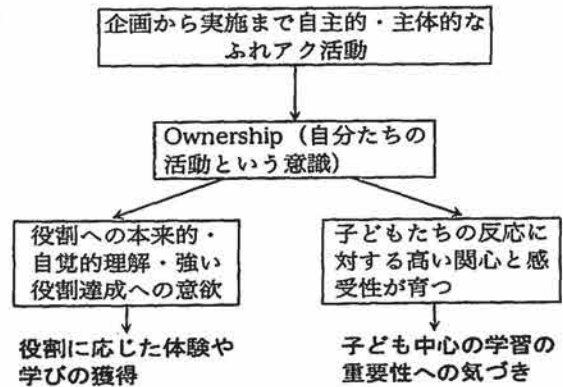
12/13	☆ふれりんびっく☆	主催	1～6年 55名	ふれアクオリジナルのミニ 運動会
12/14	鳴門市ドイツ館 クリスマス会	参加		
3/14 3/25～27	春合宿 (タイトル未定)	主催	4～6年 45名	上勝町・山の楽校での宿泊 体験活動

6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方 (合宿の場合)

- 活動企画の立案  
全体から活動目標の提示  
対象学年、人数、活動内容、タイトルなどの決定
- 教育委員会へ企画書を提出  
→代表が行う
- 鳴門市内の小学校 (19校) へ企画書・募集用紙を配布  
→学生メンバーで手分けして行う。
- 係ごとに活動内容を企画していく  
→毎週火曜日の話し合いの時間がメイン。
- 事前活動 (合宿のみ)  
→内容：子どもとの顔合わせ、保護者説明会を行う。
- 活動の実施
- 当日の反省 (活動終了直後)
- 事後の反省 (活動日以降の火曜日)

7、活動による成果

企画から実施まで自主的・主体的なふれアクの活動を通して、学生は『自分たちの活動だ』という意識をもって取り組むようになっている。このことから、ふれアクでの自分の役割 (リーダー・班付きなど) に対する本来的・自覚的理解がなされ、強い役割達成への意欲が芽生える。そして、役割に応じた体験や学びの獲得がなされている。また、子どもたちの反応に対する高い関心と感受性が育ち、子ども中心の学習の重要性への気づきが芽生えている。



# 熊本大学メイクフレンズ

大学名 熊本大学

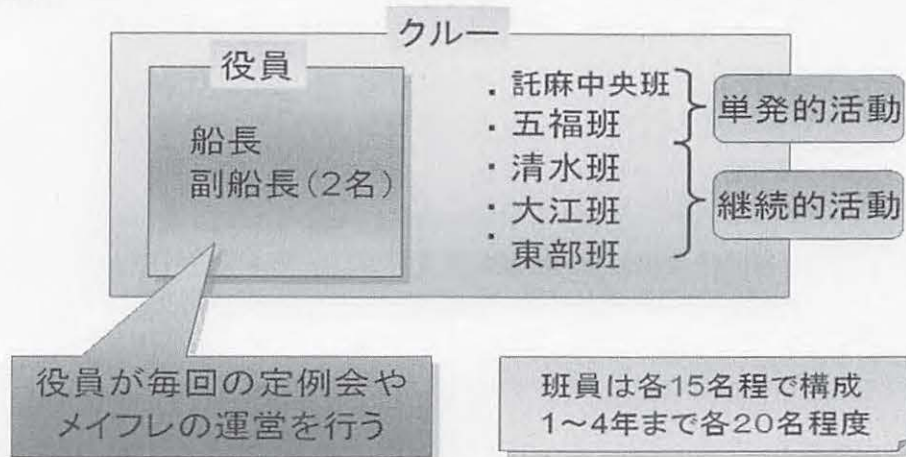
1、担当教官名 吉田道雄・馬場啓夫

メイクフレンズ船長 奥田美沙子

2、活動の起こり

平成9年度よりフレンドシップ事業がスタートしました。熊本大学メイクフレンズは、その一環として行われた熊本大学教育学部の授業から、3年後の平成12年度より発展した学生主体の活動です。現在、活動の場として、熊本市内の公民館などの社会教育施設にご協力いただき、企画・運営を含めた大学外での体験活動を行っています。

3、組織構成



4、活動の目的

メイクフレンズでは、学生である私たちが活動を企画し、その活動を実施したり、そこでの体験を振り返り見直したりすることによって、次のような力を向上させることを目的としています。

「子どもを見る眼をもつこと」

「子どもの気持ちや行動を理解すること」

「子どもとかかわる活動を企画する力を体得すること」

昨年は、これらを目指すために相互啓発をテーマに掲げました。子どもとの活動をよりよいものにするためには、活動に携わる学生同士の刺激し合い高め合える関係の中で生まれる試行錯誤が大切だと考えたからです。今年もこの相互啓発は続けていきたいと思っています。さらに今年度は活動の振り返り会の充実を図ることで、個人、班、班を超えた全体の振り返りから、次に「活かす・繋げる」ことをテーマに上記の力を向上させたいと思っています。

5、平成20年度の活動実施の紹介

i) 各班の活動

5つの班がそれぞれの公民館と連携して活動している。

●清水班…継続型(通年)・月2回。「はけみや子ども企画隊」

- 大江班…継続型（通年）・月2回。子どもチャレンジ公民館事業によるプランナー
- 東部班…同上
- 五福班…単発型・月2回。第1土曜日「遊びの広場」、第3土曜日「科学の広場」
- 託麻・中央班…単発型の振り返り班・半期3回。
- その他依頼による公民館事業（バス旅行、地域のお祭り、料理講座など）への参加

※プランナーとは？

一般の子どもたちを招待する活動を企画する子どもたちをプランナーと呼ぶ。プランナーは活動当日も班長や運営面の係となってグループを引っ張り、様々な成長を学生に見せてくれる。

ii) 外部からの依頼による活動

熊本市教育委員会からのレクリエーション依頼やその他様々な団体からのキャンプや通学合宿などの依頼があり、希望者が参加している。

6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方

【企画】



- ・活動目的（子ども・学生）を立てる
- ・活動内容（子どもの参加人数、学年など）を決める
- ・公民館の社会教育主事の先生と活動内容の相談や打ち合わせをする
- ・チラシや市政だよりで子どもを募集する
- ・学生で事前リハーサルや下見を行う
- ・予想と対策を考える
- ・タイムテーブルを作る
- ・企画書を提出する

【活動】



【振り返り】

- ・活動終了後に参加者全員で振り返り
- ・個人の振り返りシートの提出（項目：気づいたこと、子どもとのエピソード、学んだこと活かしたこと、目的についてなど）
- ・振り返り会の実施（班ごとで振り返り→班を越えて全体で振り返り）
- ・報告書の作成

7、活動による成果

- ◆子ども理解 ⇒子どもの気持ちや行動の理解
- ◆子どもの側に立った企画力の向上 ⇒子ども考えや行動を予測した企画
- ◆学生の成長 ⇒社会で必要とされる力を養う

# 信大 YOU 遊世間 (ワールド)

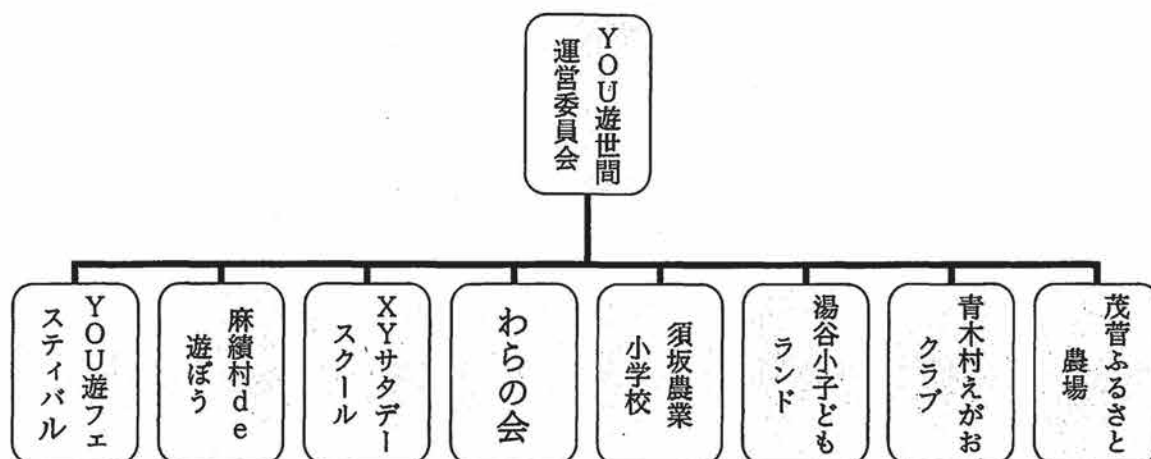
大学名 信州大学

- 1、担当教員名 土井 進 教授  
信大YOU遊世間運営委員長 原 耕平 理数科学教育専攻3年

## 2、活動の起こり

15年前教育実習が終わった後、1人の学生が「子どもと遊ぶ時間が全然足りなかった。もっと子どもと遊べる場面がほしい。」という話が上がりました。そこから、土井先生と学生が中心となって、土曜日に子どもを信州大学に集めて「YOU 遊サタデー」という活動が始まりました。その活動から地域の方々と繋がるようになり、今、8つの地域団体と連携しながら、活動を行っています。

- 3、組織構成 参加学生 約40名



- ・ YOU 遊世間は、8つの地域団体と連携して行っているそれぞれの活動団体（プラザ）の集まりです。
- ・ 各プラザは、プラザ長1人副プラザ長1～2人で構成されています。

## 4、活動の目標

**感謝 つながり リフレクション**

今年度の目標は、上記のように設定されています。YOU 遊世間が始まって15年を数えました。今までの活動は、地域の団体の方々に支えられて活動を行ってきました。このことは当たり前のことではなく、協力していただいている方々に感謝をしようというのが「感謝」です。「つながり」は、各プラザがバラバラに活動をするのではなく、何か困ったことがあったら助け合ったりすることで、YOU 遊世間として、中が繋がっていききたいという思いから、立てました。「リフレクション」は、ひとつの活動をするごとに反省をして、次の活動に生かしていこう。ということをも重視したいことから立てました。

## 5、年間活動予定

- ・各プラザで活動の回数も日程も違いさまざまです。今回は、例として「湯谷子どもランド」の年間活動予定を載せます。

No.	活動日	活動のテーマ
①	5/10	走って！飛んで！みんなで遊ぼう！！
②	5/31	名札作り
③	6/28	キャンプに向けて
④	7/12、13	夏キャンプ
⑤	7/26	流しそうめん
⑥	8/31	魚釣り&BBQ（雨のため中止）
⑦	9/13	野外炊飯
⑧	10/4	秋の遠足（地附山）
⑨	11/15	迷Q巨大パズル
⑩	12/13	クリスマスケーキを作ろう
⑪	1/17	お正月遊び
⑫	2/21	昔遊び
⑬	3/7	全フレ
⑭	3/14	6年生を送る会

YOU 遊世間は、子どもと遊ぶことをメインとして活動をしています。各プラザで、それぞれの地域団体の方々と協力しながら、共に活動を作り上げていきます。

基本的に YOU 遊世間の各プラザは月に1～2回の活動をしているため、毎週土曜日はどこかの活動があり、二つ以上の活動がかぶることも多々あります。

## 6、活動を実施するまでの準備の流れ・リフレクションの仕方

- ・YOU 遊世間の活動は、基本的に、2週間ほど前からプラザ長、副プラザ長が活動の計画を立てます。活動の1週間前から参加をする学生と一緒に物品の手伝いをしたりします。その準備にもこれない学生は、当日の朝に活動の流れとねらいを確認して、活動に臨みます。
- ・リフレクションは、プラザごとそれぞれで工夫しながら行っていますが、基本的な方法として、各活動が終わった後に20分から30分ほどリフレクションシートを各自で書く時間と、全体で反省を発表しあう時間を取っています。

## 7、活動の成果

- ・自分たちの好きなときに好きなプラザに行くことが出来て、1年を通した活動が多いので、子どもたちが自分たちのことを覚えていてくれるのがうれしい。
- ・子どもとの関わる時間が増える分子どもとの接し方が少しずつだがうまくなってきたように思う。

## 第9回全国フレンドシップ活動 in 信州 日程表

○会 場

・青木村文化会館 ・青木村体育館 ・青木村交流センター ・信州大学体育館

○子どもとの企画の活動場所

・青木村文化会館 ・湯谷子どもランド ・壇田地区センター ・麻績村体育館

○日 程

時 間	内 容			
3月2日(準備)				10:30~ 企画①
3月3日(準備)	会場準備、布団の運び			12:30~13:20 昼 食
●3/4(1日目)				13:30~ 企画②
8:00~	本部集合			16:00~17:00 フリータイム(湯谷) 入浴(麻績) 児童館・寺子屋
8:00~	体育館 会場準備			17:00~18:00 夕食準備(麻績) 入浴(湯谷) 児童館・寺子屋
8:30~	班リーダー集合			18:00~19:20 夕食、フリー(麻績) 片付け(湯谷)入浴(青木)
8:30~9:00	最終打ち合わせ			19:30~21:20 企画③
9:00~	信大参加学生集合			21:25~:50 各大学リフレクション
9:30~	他大学到着			21:55~ 移 動
9:30~	受付開始			22:00~ 就 寝
10:00~12:20	オープニングセレモニー アイスブレイク			●3/6(3日目)
12:30~13:00	昼食タイム			6:00~ 起 床
13:10~16:00	○移 動・下 見			6:15~:45 掃 除
		湯 谷 車	青木村 バス	6:50~ 移 動
			麻績村 バス	7:00~ 朝の集い
16:00~17:30	夕 食(なべ)			7:30~8:20 朝 食
17:30~19:20	片付け、入 浴 &オリエンテーション			8:30~ 全体打ち合わせ
19:30~21:40	大学活動紹介			9:00~ 企画④
21:40~:50	各大学リフレクション			12:00~ 昼 食
21:55~	移動&就寝準備			13:00~ 企画⑤、夕食準備(本部)
22:00~	就 寝			16:00~18:00 夕 食 企 画 児童館 入 浴 寺子屋
●3/5(2日目)				18:00~20:00 移 動 夕 食 夕 食 入 浴 片付け 入 浴
6:00~	起 床			20:00~21:50 最終打ち 最終打ち 最終打ち 合わせ 合わせ 合わせ 下 見
6:15~	掃 除			22:00~ ホーム 就 寝 就 寝
6:45~	移動&朝食準備			23:00~ 完全就寝
7:00~:30	朝の集い			●3/7(4日目)
7:30~8:15	朝 食			6:00~
8:15~	片付け&準備			
8:30~	開会式			
9:00~10:30	記念講演(講師:小岩井 彰 長野市立大岡小学校長)			
				起 床

6:30~	起床	朝食	起床
7:00~	朝食	移動	朝食
8:00~	準備	準備	準備
9:00~11:30	活動①		
11:30~	昼食		
12:30~15:00	活動②		
15:00~	片付け		
15:30~	移動	食事づくり	
17:30~	夕食、入浴、フリータイム		
20:00~21:50	リフレクション(個人&班)		
21:55	移動		
22:00~	就寝		
●3/8(5日目)			
6:30~	起床		
6:45~7:15	掃除		
7:20~	移動		
7:30~	朝の集い		
8:00~	朝食		
9:00~10:30	2班合同 リフレクション		
10:40~11:40	各大学リフレクション		
11:45~	閉会式		
12:30~	昼食		
13:30~17:30	交流会		
17:30~17:50	休憩		
18:00~21:00	後夜祭		
21:00~	片付け		
22:00~	就寝		
●3/9(6日目)			
	信大生起床(他の人より早く)		
5:00~	おやき作り		
6:30~	起床		
7:00~	朝の集い		
7:30~	朝食		
8:30~	片付け		
10:00~	おもいで企画		
12:00~	解散の挨拶		
12:30~	解散		

第9回全国フレンドシップ活動 in 信州  
参加学生

- 実行委員 (学年)
- ★笠井悠太(3) 一條まな(3) 高池亮輔(3)  
中川 茜(3) 原 耕平(3) 岩本美美(2)  
鈴木 梢(2) 園田 泉(2)
- 信州大学
- 青木智博(4) 加藤博美(4) 鈴木亮子(4)  
田村将太(4) 田村弘樹(4) 布山奈津美(4)  
半田 裕(3) 宮川はるな(3) 飯島理沙(2)  
市川香織(2) 島崎涼子(2) 鈴木祐香(2)  
西澤直城(2) 中村恵里(2) 早川和宏(2)  
東野千尋(2) 布山朋和(2)
- 上越教育大学
- ★吉越真帆(4) 葭谷内名緒(2) 三澤千夏(2)  
峰村春菜(2) 渡辺友紀(1) 小高大樹(1)
- 横浜国立大学
- ★西河隆史(2) 東 朋子(1) 菊地美帆(1)  
杉森 彩(1) 橋本隼人(3) 菅原功典(2)
- 文教大学
- 齋藤瑞恵(3) 小池陽愛(2) 木村千春(4)  
野澤利之(3) 山室達紀(3)
- 岐阜聖徳大学
- ★大澤拓也(2) 高橋優一(2) 羽田えりか(2)  
伊藤 翼(2) 高岡政晴(2) 太田冴恵(2)
- 福井大学
- ★長谷川和弘(3) 平林真伊(3) 前田恵子(2)  
坂谷真直(1) 畑真理子(1) 森口祐督(1)
- 奈良教育大学
- ★岡内琴音(3) 大原千晶(3) 沖山 薫(3)
- 鳴門教育大学
- ★杉山健人(3) 西川由利子(2) 三好彩香(2)
- 広島大学
- ★岩成美幸(3) 辻本里美(3) 相原 恵(2)  
渡瀬健太(1) 角谷知哉(1) 矢田啓将(1)
- 熊本大学
- ★奥田美沙子(2) 平坂千明(2) 宮崎奈緒子(2)  
岩崎太貴(3) 宮本恵梨子(2) 城島美帆(1)



## 表紙解説

表紙のキャラクターの名前は“ポニョ”と言います。私たち第15期 YOU 遊世間で『感謝・つながり・リフレクション』という3つの柱を決めた時に、プラザ長みんなでデザインしました。私たちは一年間この3つの柱を意識して活動してきました。ポニョはいつでも私たちの活動を笑顔で見守ってくれました。ポニョはかけがえのない私たちの仲間です。キャラクターデザインは小西舞・高池亮輔の合作。裏表紙は篆書で、「人事を尽くして天命を待つ」と書いたものです。  
(高池亮輔 保健体育専攻3年)

### <第15集編集委員会> (◎委員長 ○副委員長)

◎原 耕平 (理3)	○高池 亮輔 (保3)
○宮川はるな (言3)	小林良太郎 (理3)
吉田ちひろ (生3)	笠井 悠太 (理3)
梅澤 美夏 (言3)	原 卓也 (理3)
中川 茜 (生3)	小西 舞 (実3)
伊藤 香澄 (実3)	吉池 潤奈 (実3)
宮下奈保子 (生3)	一條 まな (言3)
菊地ゆかり (言3)	宮川 志織 (言3)
西澤 遙 (実3)	飯島 理沙 (理2)
西澤 直城 (理2)	鈴木 祐香 (理2)
早川 和宏 (理2)	土井 進 (教員)

### 学部長裁量経費

平成20年度教員養成学部フレンドシップ事業 報告書

第9回全国フレンドシップ活動 in 信州 報告書

授業科目名：「社会体験実習」「社会教育演習」

「信大 YOU 遊世間」の教師教育学研究 第15集  
— 「教職実践演習」への志向 ① —

2009(平成21)年3月1日印刷 ©

2009(平成21)年3月4日発行

編集 第15集編集委員会  
発行人 土井 進  
E-Mail : doisusm@gipnc.shinshu-u.ac.jp  
発行 信州大学 教育学部 教師教育学研究室  
〒380-8544 長野市西長野6-1  
TEL 026-238-4260 FAX 026-238-4260  
制作 オフィス春日  
E-Mail : xmbxp210@ybb.ne.jp

# 人事書選天合独



## ●「臨床の知」●

信州大学教育学部は、学校、家庭および地域社会の諸問題にコミットし、他者や事物とのいきいきとした関係や交流を保つ「臨床の知」の理念を核とした新しい教育体制に生まれ変わりました。